オアシスがかれるほど騒ぎたい！

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オアシスがかれるほど騒ぎたい！

【Ｎコード】
Ｎ４９１３Ｗ

【作者名】
一期　つかさ

【あらすじ】
普通すぎる俺は何故か、出会って間もないクラスメイト栗山さんと共に、牢屋へブチ込まれるように無理矢理「生徒会」へ入れられてしまった！　「生徒会」ってのは名前だけで、中身は生徒会長がたった一人でやりたい放題やってる軽いレジスタンスだった――。
メンバー集めから始まり反生徒会組織との対決、そしてハーレム。
和也もとい生徒会の壮絶な日常が始まる！
※※頭をからっぽにして読んでほしいです。それと、かなりソフトな小説です。

※※「オアシスがかれるほど騒ぎたい！」にタイトル戻しました。。

インディペンデンス・デイ（前書き）

主人公はホントに凡人です。

インディペンデンス・デイ

どうしてこうなったのか。教えてほしい。新一年生の俺には縁遠いはずの三年生の教室に、昼休み、俺と栗山さんと会長と三人。

机に足を乗っけそうな勢いで堂々と椅子に座る生徒会長、今田美園先輩は「私が何か悪いことしましたか？」と言い張る。

会長の席の前で仁王立ちをする先生は、この世のものとは思えないほどの厳つい剣幕で会長を睨む。

会長の後ろで見守る俺たちに飛び火しないことを祈ろう。というか、早くこっから立ち去りたい。先輩ってのは、ホントに厄介な人種だ。

俺の隣で会長と先生のにらめっこを申し訳なさそうな表情で見守る同級生の栗山さんも恐らく、いや絶対、俺と同じ心境だろう。

「みんなに迷惑をかけているってことが分からないのか！？」

先生が突然怒鳴った。びくんと反射的に体が反応する。耳を塞ぎたかったがそんな余裕は無い。二人はクラス中の注目の的となった。

驚くべきというか、仕方ないのか、会長はちっとも動揺してない。それどころか、先生にも負けないくらい辛辣な表情で先生を睨む。そして、なぜか目を閉じた。そしてそのままインチキ賭博師のごとく微笑んだ。その表情は、実に不気味で、俺にとっては吐き気を催すほど不愉快なものだった。

「……来年の今日は、きっと休日ね」

何を思ったのか、会長は突然そんな事を言い出した。そして、椅子から立ち上がった。

「カレンダーに目立つように明るい字でよーく記しておきなさい…今日という日を！」

会長はそう言うと、勝ち誇ったように微笑んで先生を指差した。先生は呆れた表情で今までにない大きな溜め息をつく。先生、俺も同じ気持ちだ。

「我々、東葦高校生徒会の独立記念日（インディペンデンスデイ）をね！」

この会長のことだから、アホらしい決めポーズでもするのかと思えば、会長はスカートが翻り、その中が見えるほどに大きく足を上げ、思いっきりその薄汚い足の裏で先生を蹴り飛ばしやがった！

「どわ！」と脱力したマヌケな声を上げて倒れた先生の姿に俺の身体は思わず前のめる。周囲にいた先輩たちもみんな、この壮絶、というよりはサスペンスな光景に注目する。

独立記念日（インディペンデンスデイ）？　笑わせるな！　今日は人生最大の汚点だ！

「さぁっ！　行くわよ！」

会長は爽やかに俺たちの方へ振り返ると、こんなトコ早く立ち去るわよ、と催促する。従いたくない、だが、逆らうわけにはいかない。死にたくない！

俺の青春は、こんな傍若無人な脳タリン女と出会わなかった時間軸

を妄想するのかと思うと、吹っ切れそうで怖い。

先生が立ち上がる前に、逃げるように教室を後にすると、俺たちは廊下を我が物顔で歩く会長の後を鴨の子のように黙々と追った。

人気があるのか避けられてるのか、会長が通ると廊下は一気にざわめくする。そんな会長の手下だと思われるのが、嫌で仕方ない。

不意に「和也！」と会長は廊下の真ん中で立ち止まり、薔薇が舞う幻覚が見えるほど華麗に振り返った。夢中で歩いてた俺は危うく会長にぶつかりそうになり、身体に急ブレーキをかける。

「なんすか？」

みんなが見てんだよ！　恥ずかしいから早く済ませて！

「あんたの教室、どっち？」

どっち？　だって。なんかバカっぽい。

「どっちっていうか、一年Ｂ組、です」

「Ｂ組？　夏子ちゃんは？」

その言葉に、俺の隣にいた栗山さんがびくんと反応する。この様子、相当怯えてるな。

「……桐生くんと同じです」

肩まで伸びた緑色の髪。その頭頂部に聳えるチャーミングなアホ毛。

四角くて黒いフレームの眼鏡。反射するレンズの奥に見え隠れする大きくて澄んだ瞳。

朴訥、それの付け合わせメニューのように謙遜な栗山夏子さんとは、さっきも言ったけど同級生だ。まだ知り合って一ヶ月にも満たない。全然話したことも無いし、話そうとも思わない。なんかこう不気味っていうか……。

「じゃあ、行くわよ！」

栗山さんのことを考えてると、いつの間にか会長が結論を見出だしていた。会長の後ろ姿が俺と栗山さんを置き去りに遠退く。

「え？　ちょっと！　行くって、どこにですか？」

俺の反射神経は先輩を逃がさなかった。

「アンタ自分で言ってたじゃない。そのアホ面はなに？」

会長はまた振り返ると、俺をバカにしたように言う。

困る。こんな怪物が教室にいるだけで迷惑だ！　それにもうすぐ昼休みが終わるし。

俺の気持ちを知ってか知らずか、先輩は前に向き直りまた歩きだした。

俺は呆れて思わず隣の栗山さんの顔を見た。

栗山さんも俺と同じことを思ってたのか、苦笑いで俺の顔をみた。

これから、こうして栗山さんと顔を見合わせることが何度もあるのかと思うと、なんか気が遠くなる……。

インディペンデンス・デイ（後書き）

「ファインド　Ａ　ウェイ」と並行して書いてます。
「ファインド　Ａ　ウェイ」を真剣に書くあまり、これはすさんだ作品になるかもしれませんｗ

第1話　3日後・・・

俺が無理矢理ブチ込まれた、あの悪質な生徒会は、校内でも有名っちゃ有名らしいが、大して生徒達の関心の的にはなっていないようだった。みんな、俺たちには関係ない、とばかりに嘲笑うだけだ。

しかし！　あれは三日前、水曜日だった。週の真ん中に教室の真ん中で担任の教師を蹴り飛ばし、めっちゃさりげなく独立宣言した今田会長率いるたった三人の生徒会を新聞部は大々的に取り上げた。

写真も載ってた。恐らく偶然あの場に居合わせたのだろう。慌ててシャッターを押したらしく写真がブレていた。

その影響は、一応生徒会に所属してる俺にも飛び火した。まぁ、これは仕方ないことなんだろうな。

あの日から俺が友達と話すときの話題といえば、軽いレジスタンスと化した生徒会のことや傍若無人な会長のことばかりだ。大体が批判や馬鹿にする声だ。「なんなのあれ」とか「馬鹿っぽい」とかそんな感じ。正直俺もそう思ってる。

それに会長はエイリアンみたいに神出鬼没だから、校内で迂闊なことを言えない俺は、鎖でギチギチに縛られた鶏みたいだ。笑える。

もう一人、無理矢理生徒会に入れられた「同志」である栗山さんはどうなのか？　こんなことを言っては元も子もないけど、知らん。

まぁ、俺と同じように苦労してるのは確かだよね……。

馬鹿馬鹿しいが、一部では俺と栗山さんが付き合っているという噂が流れている。友達から聞いた。

恐らく全世界の高校の中で一番たちが悪く、パパラッチ集団とも呼ばれている新聞部によって掲示板や新聞の記事にならなければ、すぐに消え去る噂だから心配ない、と会長が言ってた。それと、単にあんたに興味ないだけかもね、とも。

そんな台風のような楽しいようでそうでもない日常。でも台風には目がある。会長は俺のプライベートを脅かすことはないってことだ。それだけはホントに助かる。

明日、土曜日、俺は隣町にある孤児院へ行く予定がある。もちろん一人で。行く理由は子供たちとの交流。勉強を教えたり一緒に遊んだりね。それにそこに行けば大親友だっている。楽しみで仕方ない！

まぁ、毎週のように行ってるんだけどね。

只今、午後十時、もうすぐ寝よう。風呂も入って、パジャマにも着替え、歯磨きも終えた俺は、寝る気に取りつかれたロボットだ。

部屋の電気を消し、ベッドに身を投げ出し、布団に潜り込む。

今日は良い夢見れそう……。

第1話　3日後・・・（後書き）

短めかな？

第2話　眠たいパジャマと休日の朝

それは、ブレーキとアクセルを踏み間違えた、なんて言い訳が通じないほど突然の悪夢だった。

部屋の外から、俺の快眠を一刀両断する騒々しいノックの嵐、そして、地獄に落とされた俺には悪魔の呻き声にしか聞こえない高くてハキハキした呼び声。

寝ぼけた頭で考えても、明らかに意味無しのノックが終わると、今の俺には爆発音にしか聞こえないドアを勢いよく開ける音。

「お兄ちゃん！」

妹という名の悪魔は、俺の名を叫ぶと、俺の肌の一部と言っても過言じゃない体温で暖まった掛け布団を思いっきり剥がそうと布団を掴んだ！

「お兄ちゃん！　起きてよ！」

この悪戯好きの小悪魔め！　俺から布団を奪おうなんて、それはテメェにとって罰ゲームなんだとよーく解らせてやろう！

妹が布団を引っ張ろうとしたタイミングを狙い、俺も布団を離すまいと中から布団を引っ張る。

案の定、引っ張り合いとなった。

「ちょっと！　お兄ちゃん！　起きてよ！」

こいつを蹴り飛ばす準備はとっくに出来てる。後はタイミング――。

それは、あまりにも突然だった。妹が布団を引っ張るのを諦めたのか、引く力を感じなくなった瞬間、腹部に鉄球を落とされたようなそんな重圧が襲った。

どうやら、妹がのし掛かってきた、らしい。なんとも悪戯悪魔らしい仕打ちだ。

俺は思わず目を開けてしまう。

「おい！　ちょっと！　おりて！」

「堪忍した？」

妹が無邪気に微笑む。

「何なの！？　朝っぱらから！　今日は休日なのに！」

悪魔にしては、意外にも物分かりの良い妹は、俺の身体もといベッドから降りると、開いたままのドアを指差した。

「電話だって。今田って人から。和也を出せ！　っだってさ」

俺は耳を疑った！　まさか、会長……？　ありえない俺の家の電話番号なんてアイツが知る筈もない！

そうは言っても、確認しないことには真相はわからん。仕方ない。

俺は渋々、ベッドから起き上がり、妹にたたき起こされた分の眠気

が残る目を擦りながら、一階のリビングへ向かう。

低い棚の上にある電話の横に死んだ人みたいに横たえてある受話器を取る。そして決まり文句である「もしもし」を唱える。

「和也！」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、聞き覚えのある高貴な雰囲気を無理矢理絞り出した高い声だった。

「会長？　ですか？」

「私の声をもう忘れたっていうの？　早くその寝惚けたまんまのトロトロ脳みそを冷凍庫で固めなさい！」

恐らく、頭を冷やせって意味、なのか？　謎の文句を決め込んだ会長に返す言葉も見当たらない。

「ねえ！　私の声聞こえてるの？」

「……は、はい一応」

「……寝ぼけてるところ悪いんだけど、今日、暇？」

悪いと思うんなら掛けてくんなよ！　脳タリン女！

「ねえ！　ホントに聞こえてるの？　暇？　って聞いてるの！」

「暇じゃないです！」

生憎、というよりは辛うじて。

「どうして？」

「用事があるんです」

「――じゃあ、今回は許してあげる。じゃあね！」

そう言って会長だ電話を切った。

言ってる意味はさっぱりだが、傍若無人な会長にしては潔がよい。

まぁでも、第一の壁は乗り越えたってわけだね。

受話器を置き、俺は洗面所へ行き、顔を洗い、歯を磨く。

朝食の準備が出来ていた。

平日、特に月曜日の朝は、ビターみたいに憂鬱だけど、休日の朝ってのは、ミントみたいな爽やかさだ。

第2話　眠たいパジャマと休日の朝（後書き）

細かい描写も無く簡単に書き上げる小説も悪くないｗ
（ふと思った）

第3話　チャーミー・エンジェルズ

普通で良いのに、俺は何故か逃げるようにして自転車を漕いでいた。

俺が逃げるモノといえばただ一つ、そう、会長だ。電話番号を知られたんだから、あの人のことだ、住所まで調べて追ってきそうだ。

あの人のすごいところは、俺におバカな被害妄想を抱かせるところだ。脳を洗脳されそうで怖い。

向かうのは勿論、隣町の孤児院。大きな川沿いの道路の片隅をやや急ぎ気味に安全運転する。

幾つ角を曲がったか、それは俺の頭の中の本能だけが記憶してることだろう。

上に高速道路が走る、都会っぽい大きな幹線道路から脇に逸れた小さな住宅街の路地、その一角に、通り過ぎてしまいそうなほど然り気無く、ひっそりと佇む所々、塗装が剥がれて錆び付いてる緑色の門。それがここ「雛菊育成園」の目印だ。

自転車は、脇の自転車置き場に止め、手ぶらの俺は、我ながら慣れた手付きで門を開け、中に侵入する。

本園入り口だってのに、なんて地味なんだ。

遊歩道のような、植え込みに囲まれた緑豊かな細い道を抜ければ、大きな長方形の家屋が俺を待ち受ける。ここが三つある棟の内の一つ、「レモンの家」だ。

玄関に辿り着く前に、一人の華奢な少女が俺を見据える。そいつは俺もよく知ってる子だ。島崎明里だ。俺より五つ下の小五だ。

地毛なのかどうかは知れないけど清潔な茶色の髪。そして、もうちょっと伸ばしてからやればよかったと思わせる、無理矢理結んだような短めのツインテール。

「和にぃだあ！」

おっとりとした優しい声。明里は嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、叫ぶと、猛ダッシュで俺に近寄ってくる。

夕日みたいな赤い健康的で柔らかそうなほっぺた、ゆさゆさと体を揺らす子供っぽい仕草。垢抜けた笑顔。

可愛い、ってのはこのことか。

「元気だった？　明里」

「うん元気だよ！　とっても元気ぃ。アイム　ファイン　センキュー　アンジュー？」

「ピーク　ア　ブー！」

「いえーい！」

笑顔でハイタッチをする俺と明里。我ながら意味不明だ。

「和也くん。なにしてんのー？」

流麗なストレートの黒髪を靡かせて、仔犬を頭に乗っけて現れたそいつは、明里の同級生、九重理沙こと「くるりん」だ。

何を気取ったのか分からないが、近づき難いオーラを滲ませて、微笑みながら俺らに近寄ってくる。

「くるりんもいたんだ」

「……それ何回目？」

「う～ん、五回目？　かな？」

「七回目！」

くるりんの頭の上の仔犬が「きゃん！」と可愛く吠える。生憎、犬語は教わってない。

「早く中入ろうよー！」

明里が俺の服の裾を引っ張る。だが、明里が指差したのはレモンの家では無く、小さな道を挟んだ反対側のパッと見、倉庫のような木造の建物だった。

そこは、よく明里とくるりんと遊ぶ、多目的ホールだ。いつも鍵が開いていて、子供たちの遊び場となっている。

いつものように、俺らはそこにお邪魔する。

靴を脱いでフローリングに上がると、学校の体育館より一回りも二

回りも小さいが広々とした空間が広がる。

「今日は理緒はいないの？」

窓際の壁に腰を掛けながら、不意に思ったことを俺は素直に言う。

「いるよぉ」

明里が返事をする。

「でも呼ばない。私あの子嫌い」

くるりんが眉を潜めながら、広々としたホール内の真ん中で小さなボールと遊ぶ仔犬を見据える。

そうだったな。くるりんと理緒には確執があるんだっけ。なんでそうなったか詳しいことは何も知らないけど。俺はいつも仲直りを促すが、どっちも譲らなくて困ってる。

「明里は好きだよぉ？」

明里が相変わらずのスロー加減で呟く。

ふと、ドアの開く音がホール内に響いた。くるりんの嫌いな理緒が入ってきた。ベストタイミングなのかバッドタイミングなのか……。

「来てたんなら言ってよねー！」

入ってくるなり叫ぶ理緒。

目立つ赤色のショートヘア。明里、くるりんと同級生だが、二人に比べて背が高い。スマートさとクールさを滲ませて慌ただしく近寄ってきた。

理緒、いい名前だ。

第3話　チャーミー・エンジェルズ（後書き）

シリアスな展開には絶対しない。

第4話　チャーミー・エンジェルズ　フルスロットル

「理緒ちゃぁ～ん」

明里が嬉しそうに微笑む。それとは正反対にくるりんは険しい顔をした。

「くるりんも居たんだ」

ただでさえ機嫌が悪いくるりんに、理緒は嘲笑うように声を掛ける。ホントにやめてほしい。

「地獄へ落ちろ」

理緒に対抗するように、くるりんは中指を立てて見せ付けた。

この二人が仲良くなった日には地球が滅びるな。まぁ、それにしても、いつものメンバーが揃ったわけだが……。

「駅前に新しいスイーツショップがオープンしたんだけど、和ちゃん、奢ってよ。くるりんは自腹ね」

「今日は金欠でね。また今度ってことで」

「じゃあ、映画観にいかない？」

理緒がけろりと言う。俺が言いたいことはただ一つ。

「バカかよ！」

「ご名答！」

くるりんがにやける。

ふと、明里がいないと思えば、隅っこの方で仔犬と戯れていた。隅っこにとどまらず、広いホール内を満面の笑みで仔犬と駆け回る。実に平和的で微笑ましい。

「逃げる奴はベトコンだ～逃げない奴はよく訓練されたベトコンだ～～」

俺は耳を疑った。明里はなんと叫んだ？

「クラスの男子に言われたんだって」

ぽかーんとしていた俺を察したのか理緒が説明してくれた。

「あれって、言ってる意味わかってるのか？」

「まさか」

一発ギャグをやるような感覚で、あの台詞を言ったのか。おバカなのか愛嬌なのか。呆れる。

「明里ちゃん！」

理緒が走り回る明里を呼び止めた。

「女子供をよく殺せますね！」

理緒、何を言い出すのかと思えば……。

「簡単さ！　動きがのろいからな！」

おっとりとした穏やかな声で明里は言う。どうやら明里は正真正銘のおバカさんのようだ。

「これも、男子に言われたの？」

「ううん。言われたっていうか、言ってたんだってある男子が。なんか流行ってるみたい」

「……今度その男子に会ったら言っといてくれ、『パパの精液がシーツのシミになり、ママの割れ目に残ったカスがおまえだ！』って」

「りょーかい」

俺も思いきったことを言ったなぁ。理緒のことだ。絶対、言うだろう。それにしても「フルメタルジャケット」が流行るなんて。

「あ、そうだ！」

理緒が何か閃いたのか、手を叩いた。

「どうしたの？」

俺だけでなく、くるりんと明里も理緒に注目する。

「淳史お兄ちゃん達が、裏のグラウンドに秘密基地を作ったんだっ

け！」

理緒の言う『淳史お兄ちゃん』とは、ここの施設の理緒と同じレモンの家に居る野郎で、俺より一つ年下の中三だ。淳史とは俺も仲良しだ。

ちなみにだが、この施設の棟は、さっきも言った「レモンの家」、それから「ライチの家」、そして「イチジクの家」の三つだ。

明里とくるりん、淳史はレモンの家で、理緒はイチジクの家で生活してる。

「……あいつららしいな」

「行こうよ！」

理緒がホールの出入り口を指差す。

「勝手に入ったら怒られるよ！　私いかない」

くるりんが冷静に反論する。

「くるりんは臆病なんだね。大丈夫だよ！　和ちゃんがいるもん！」

「明里も行きた～い！」

「俺も行ってみたい。あいつらがどんなガラクタを作ったのか見てみたいし」

俺も悪い奴だ。くるりんを仲間はずれにするなんて。許してくれ、

くるりん。

「よし決定！　行こう！　三人だけでね！」

理緒が握り拳を低い天井に向かって掲げる。

「……っ」

怪訝そうに眉を潜めるくるりん。見てて可哀想で仕方ない。俺も悪いんだけどね。

元々くるりん側についていた仔犬も連れて三人でホールの出入り口へ向かう。

靴を履き、ドアを開ける。

「……私も行く！」

意を決したように突然、くるりんが叫んだ。淋しがりやなんだな、くるりんも。

こうなることを願っていたよ。

くるりんも出入り口まで駆け足でくると、俺ら三人を差し置いて、先に外に出る。そしてこう言うのだった。

「何してんの？　早く行こうよ！」

くるりんらしいや。

三人は苦笑いでくるりんに続く。

レモンの家の脇にある大きな樹が目印の短い道を抜けると、森の一角みたいな木々に囲まれた広々としたグラウンドが広がる。

ここはよく、施設の近くにある私立幼稚園の運動会だとか、施設のイベントに使われている。イベントには、俺も何度か参加したことある。

グラウンドの縁は小高い丘のようになっていて、その一角に、俺の慎重よりもやや低い、小さな四角い粗末な建物が見えた。恐らくあれが秘密基地とやらなんだろうな。

「あれだよ」

案の定、理緒が指差したのは、まさにその四角い建物だった。

「やっぱガラクタじゃん」

思わず口からこぼれたのは、俺の素直な気持ちだ。

「そう？　そんなことないよ！　狭いけど楽しいよ！」

「入ったことあんの？」

「だって、私も一緒に作ったんだもん！　淳史お兄ちゃんたちは入るな！　って言ってるけど、みんながいない時は、こっそり入ってるんだ」

酷い連中だ。

「言い付けてやる！」

くるりんが謎の強気と理緒に対する対抗心を剥き出しにする。

「くるりんの言うことなんて、誰も信用しないから大丈夫！　ね！　ホラ吹きくるりん」

「……ナイフで犯す……」

明里と理緒には聞こえてなかったようだが、俺にははっきり聞こえた。

エロいことを言い出すようになってきたんだな。こいつらも。

エロいっていうか、狂気だね。

第４話　チャーミー・エンジェルズ　フルスロットル（後書き）

あの子たちに、例の汚い台詞を言わす気なんてなかったんだが。。。

第5話　アリエン

ガラクタ屋敷もとい秘密基地の中を覗き込んだ俺は、恐らく、今までにないほど、心がフェス帰りの若者のように騒がしくざわめいた。

何でだ！　ありえない！

「相変わらずのアホ面ね。何なのそのパンツ履き忘れたーって顔は」

目を擦っても、その幻覚は消えない。ってことは本物なんだな……。

そう、淳史たちが作ったガラクタ屋敷の中に入っていたのは、今田美園クソ会長だった！

気に入ってるのか、プライベートだというのに学校の制服を着ている。

性格悪そうに見せる少しつった大きな目とお嬢様ぶった佇まい、一言で言えば滝のような綺麗な水色の長い髪は、クソ会長の目印のようなものだ。

呑気にアイスを舐めながら、アホみたいに俺を見上げていた。

「あ！　美園お姉ちゃん！　来てたんだ！」

俺が、なぜここにいる！　って聞く前に理緒が食い付く。明里も興味津々だ。くるりんは俺と同じような心境なのか、なんか機嫌悪そう。

「おはよう、理緒ちゃん、明里ちゃん」

愛想良く挨拶をする会長。

「久しぶりぃ！」

「明里ぃ～！　元気してた？」

愛しそうに明里に抱きつく会長。

第三者のはずの俺は反射的に体がびくんと反応した。襲いかかってくるかと思った……。

会長と明里、理緒がじゃれているのを横目に、くるりんが俺の服の裾を引っ張ってきた。

「なに？」

「こんなビッチ放っといて、私ら二人だけで遊ぼ」

くるりんは良くわかってる。

っていうか、こいつら会長と知り合いだったのが驚きだ。一体、どんな経緯で知り合ったのか……。

「そうだな。行こうか」

俺とくるりんは、こっそりと逃げ出そうと、忍び足でグラウンドの出口へ向かおうとする。

「和也！　二人してどこ行くの？」

生憎、会長に呼び止められた。なんて言い訳する？

「失せろ！　汚い腐れア●ルビッチ！」

可愛らしい高い声で堂々と酷いことを叫ぶ喧嘩腰のくるりんだが、俺はくるりんの味方だ！　もっと言ってやれ！

「デタラメと人の悪口しか言えない能無しのホラ吹きチキン娘。よ～く覚えておきなさい。あなたみたいな性格の悪い腹黒おチビちゃんのことを『ビッチ』って言うのよ？　わかった？」

穏やかな口調でくるりんに反撃し嘲笑う会長は、会ってまだ数分だが、今日イチで怖い。

俺は関係無い、という思いを秘めた苦笑いでくるりんの方に目を向ければ、怒りからなのか小刻みに震えている。

「なぁ、ちょっと二人とも仲良くしてって！」

見ていられなくなった俺はすかさず仲裁に入る

「そうだよ二人とも！　見苦しいよ！」

理緒も俺に協力してくれる。

「……あいつだけは絶対に許せない！」

くるりんは仲直りする気など更々無いようだ。全く、どうしたもの

か……。

「私は許すわよ？」

会長は案外、潔い。

「そうすれば、くるりんだけが悪者になるからね」

前言撤回！　イカれてる！

「和也くん！　もう行こう！」

くるりんが俺の手を強引に引っ張り叫ぶ。引きずられるように俺はくるりんとその場を後にする。

会長も理緒も明里も、誰も止めたりはしなかった。

「どこ行く気？」

一応訊いてみる。

しかし、くるりんは答える気などないようだ。

無言のまま連れてこられたのは、レモンの家の正面に広がる殺風景な広場の脇の木々に囲まれた涼しげな小さなスペースだった。

俺らは、そこにあるベンチに並んで座った。

「……なぁ」

俺の言葉にくるりんは「ん？」と反応して、俺の顔を見る。俺には、さっきっからずっと聞きたかった重要なことがあった……。

「何で会長がここにいるの？」

仲の悪いこいつに聞くのは野暮だったかもしれないが、すごい気になっていたことだ。

「会長って？」

「今田先輩のこと」

「あの人……。ここの出身らしいよ」

初耳だ！　それに、どういうことだ？　俺もこの施設出身だが、あんな奴見たことない！

「いつ出たの？　どこの部屋だった？！」

聞きたいことがありすぎる！

「えっと……」

人差し指を唇に添えて、首を傾げるくるりん。

「あ！　やっぱりここにいた！」

明里と理緒は、俺たちを見つけるなり叫び、駆け寄ってきた。まさにバッドタイミングだ。

「……ビッチは？」

俺の質問をすっかり忘れたのか、くるりんは二人に訪ねる。

「さっき帰った。くるりんによろしくだってさ」

理緒のその言葉に、くるりんは安心したのか溜め息をつく。

「くるりんちゃんは、なんで美園お姉ちゃんが嫌いなの？」

明里は穏やかな口調で率直な質問をする。

「気が合わないの！　会ったときからね！」

「俺も同じ意見だ。会長とは気が合わない。会ったときから」

どうやら俺たち四人は、二チームに別れてしまったようだ――。

第5話　アリエン（後書き）

なんか、「苺ましまろ」を連想してしまった。。。

第6話　ミソノ・ビッチ・プロジェクト（前書き）

どこに向かって行くかなんて知らない。

第6話　ミソノ・ビッチ・プロジェクト

月曜日、俺はいつものように学校に登校した。

昇降口で上履きに履き替えて、二階にある一年Ｂ組の教室を目指していた。

だが、気取らず普通に廊下を歩いているのに、なぜかみんなの視線が痛い。これも生徒会、というか会長の影響か……。

掲示板の前をなに食わぬ顔で通り過ぎた途端、俺は何かを感じた、というよりは控え目な横目で見た掲示板に何か見覚えのある写真を見つけた。

俺は引き返し、その正体を確かめる。

「なんじゃこりゃ！」

思わず大きな声が漏れた。だが、掲示板にはそれ相応の記事が二枚の写真付きで大々的に貼ってあった。

一枚目の写真は、俺と理緒、明里、くるりんが仲良くしてる画で、場所は恐らく、とうか絶対あの離のホールだ。二枚目は、俺とくるりんがベンチに座って話している画だ。

まさか、何で!?　誰がこんなの撮ったんだ!?

というか記事が気になる！

『一年Ｂ組　桐生和也　重度のロリコンか！！』

見出しからふざけてやがる！

『一年Ｂ組在籍の桐生和也は、毎日のように、隣町の児童養護施設「雛菊育成園」へ行き、そこで暮らす幼女たちと戯れることが日課で――』

新聞部のマスコミ気取りのゲス野郎共が！　何だこれは！　あることないこと書きやがって！

っていうか何で俺が周一で施設行ってるって知ってるんだ！？

俺が怒りに狂っていると、頭に軽い衝撃を感じた。ふと振り返って見ると、そこには会長が勝ち誇ったような微笑みを浮かべ立っていた。

「おはよう！　ロリシュくん！」

「お、おはようございます会長……『ロリシュ』って何ですか？」

「ロリコンシュチューデント、略して『ロリシュ』。私が作った言葉よ？」

この瞬間、俺は会長に対して奇妙な怪しさ、それに対する説得力を感じた。

「何なんですか？　この記事」

「さぁ？　何なんでしょうね」

怪しい！　すっごく怪しい。

「会長ですか？　こんなこととしたのは」

「私が？　まさか！　私はこんな無益なことしないわよ？　新聞部が勝手にやったんじゃない？」

会長も怪しいが、聞いてた通り新聞部ってのは相当イカれた連中のようだ！

ホントに無益だ！　とにかく俺は記事に書かれたようにロリコンなんかじゃないし、今すぐこれを訂正、というか排除してもらわないと、俺はこの学校でずっとロリコンとして生きていかなきゃならなくなる！

「新聞部はどこですか？」

「乗り込む気？」

「ええ」

「部室は隣の部室棟にあるわよ」

「何階ですか？」

「三階よ」

よし。会長のわりには良い仕事をした。今から乗り込んでやる！

俺は、駆け足で来た道をそのまま戻り、部室棟へ向かう。

階段を駿馬のごとく駆け上がり、三階につくと息つく暇なく新聞部の部室を探す！

廊下の一番端の部屋、そこのドアに確かに「新聞部」とバカみたいに色とりどりのマーカーを使って書かれた画用紙が貼ってあった。

俺はノックも無しにそのドアを勢いよく開ける！

大きな長方形のテーブル。それの周囲に三人の生徒、恐らく全員上級生だろう。

「何なの？　ノックも無しに」

部室の奥の方で足を組んでパイプ椅子に座り異彩を放つ一人の制服姿の女子生徒。

長い黒髪を結ったポニーテール、愚民を弾圧するような鋭い眼光、粗末なパイプ椅子を磨きあげられた玉座に見せてしまう堂々とした佇まい。

それに、恐らくドSだろうこの人……。

「薄汚い蟻が迷い込んだみたい。あんたの巣はここじゃないって教えてやって」

部員にそう言う女子生徒。

「彼女は、新聞部部長の小泉今日歌よ。みんなは『キョンキョン』

って呼んでるの。あんな態度だけど、ホントはすっごく可愛い子よ。私の同級生なの」

ふと、背後から声がすると思い振り返ると、そこにはなんとさっきまで別の棟にいた会長がいた。ホントにエイリアンみたいだ！

「おはよう美園、今日はなんの用？　仲間を引き連れて」

「おはようキョンキョン。ほら、見覚えない？　この子」

「だからあんたのイカれた生徒会のメンバーでしょ……」

そう言って小泉先輩は俺の顔をまじまじと見つめる。

そして何か思い出したように「ああ」と手を叩く。

「ロリシュね！」

小泉先輩が高々と笑顔で叫ぶ。

俺は納得がいかない！　頭の中が混線して漏電しそうだ。

「何なんですか！　いったい！」

「何がよ」

小泉先輩が呆れたように高飛車な態度で俺を下目で、あしらうように見下す。

「全部ですよ！　記事といい、写真といい！」

「写真を提供してくれたのは美園、記事を書いたのも美園。言いたいことはそれだけ？　ならとっとと帰って」

「ちょっ！　キョンキョンってば！　それは言わない約束でしょ！」

会長は唇に人差し指を当てて、喋るな！　とアピールする。

俺はクソ脳タリン会長を睨む。

「会長は、いったい俺をどうしたいんですか!?　というか、何で周一で施設行ってるの知ってるんですか!?」

「それは……あんたの妹から教えてもらったのよ」

あいつめ！

「っていうか早く撤回してくださいよ！　あんたの言った通りこれは無益だ！」

「残念だけど、和也はまだ生徒会の一員として良い仕事をしてないのよね。まぁ自分でも分かってるとは思うけど。良い活躍をしたら、私が直々に全校生徒の前で謝罪するわ。それまではお・あ・ず・け」

会長本人は可愛らしく言ったつもりなのだろうが、ちっとも可愛くない！

小悪魔なんてもんじゃない、これこそ正真正銘の魔王だ！

「可哀想な和也くん。最近では反生徒会もできたそうだしね……」

小泉先輩が同情する。他の新聞部員も俺に哀れみの視線を向ける。
やめてほしい。

それにしても気になる言葉が出てきた「反生徒会」？

名前的に生徒会に反抗する組織なんだろう。そいつらに頼もう……
早くこの生徒会をぶち壊してくれ！

第1話　桐生和也と東董の騎士団

陽が差し込む小さな窓が鉄格子に見えたのは初めてだ。

俺は、朝以来、再び部室棟に来ていた。というよりは無理矢理連れてこられた。俺は椅子に座らされ、目の前には長机越しに三人の上級生。一つしかない出入り口には、門番のように佇む、彫り深い、金髪の恐らくハーフか外国人。これまた上級生。

まるで面接のようだ。

一人、机の上に足を乗っけてるのが気になるが……。

今、聞きたいことはただ一つ――。

「いったい、なんなんですか？」

そう言うと、一人の眼鏡をかけた男子生徒の口が開く。

「まぁ、落ち着いてくれ」

自分では、これまでにないくらい落ち着いてるつもりなんだが……。

「僕の名前は、一木（いつき）　博（ひろし）。よろしく」

眼鏡の奥の小さいが鋭い眼差しと、洗礼された仕草。

「は、はぁ……」

相槌に紛れて小さな溜め息をつく俺。

一木さんは、隣の二人の女子生徒に何やら目で合図する。

「山口（やまぐち）　桃子（ももこ）と言います。よろしく」

これまた眼鏡をかけた黒いおかっぱの髪の女子生徒が自己紹介をする。

「ウチは、松田（まつだ）　聖（ひじり）！　よろしくっ！」

毛先を遊ばせた赤いショートヘアーの女子生徒。悪そうなツリ目、口元に眩しいぐらいに光輝く真っ白い健康な歯。

体操着姿のそいつは、実にボーイッシュだ。

そして、俺が気になってた奴だ。机の上に足を乗っけて偉そうな態度。

それにしても、よろしくって言われても困る。

「そして彼は、ユゴーだ」

一木さんがドアの付近の西洋風の男子生徒を指差す。

「……」

ユゴーと呼ばれた先輩は、無口で返事も挨拶もしない。

「よ、よろしくお願い、します……」

とりあえず俺も全員にペコリとお辞儀し挨拶をする。礼儀だからな。

「気になっていただろう？　我々が何なのか」

「は、はい」

一木さんが放つオーラに圧倒される俺。

「我々は、教頭から直々に命じられて、君ら生徒会に制裁を降す、いわば反生徒会ってわけだ」

「は、はあ……」

出た。さっき小泉さんが言ってた奴だ。

それにしても教頭は頭が悪いのか？　会長が仕切る生徒会が嫌いなら、無理矢理解雇すれば良いと思うんだが……。

なんでわざわざ「反生徒会」なんか作ったんだ？

「ちゃんと名前もあんだよ。『東菫（とうきん）の騎士団』ってね！　カッコいいでしょ！？」

松田さんが付け加える。

「……その『東菫の騎士団』が、俺になんの用ですか？」

俺もバカな質問をしたなぁ……。俺たち生徒会を制そうとしてる連中に。

「実は、君に頼みがあるんだ」

一木さんがひっそりとした低い声で言う。

「な、何ですか？」

「君も『東葷の騎士団』に入らないか？」

「そうそう！　そしてあのバカ美園をギッタギタにこらしめんの！　楽しいよ！　絶対！」

一木さんと温度さのある、高いテンションと声で松田さんが口を挟む。

そしてそれを一木先輩が「君は黙っててくれ！」と制す。

「……確かに楽しそう」

正直な気持ちが零れた。

「でしょでしょ！？」

松田さんが前のめりになると、一木さんが大きく咳払いをする。

あのクソ会長を懲らしめるのは、確かにこれ以上にないパーティーだ。でもこの人たちにそんなことができるのか、少し不安な部分もある。

まだそんなに会長のやりたい放題ぶりは見たことがないが、オーラ

で伝わってくる。

「そこで、あなたにやってもらいたい、とても重要な任務があるの」

山口さんが口を開く。

「どんなことですか？」

「スパイってやつ」

「スパイ？」

「そう、スパイ。あなたはいつものように生徒会活動、もといお遊びに付き合えば良いの。それで、あの子の弱味や色々な情報を握って、で、手に入れた情報を私たちに伝える。それだけ。それで、タイミングを見計らって、私たちが一気に攻撃する。もちろんあなたもね？　その方が混乱させられると思うから」

この人たちがバックについてくれるのは、とても頼もしい。成功するか不安だ。

「そんな心配すんなって！」

松田さんが根拠のないフォローを入れてくる。

「とりあえず、が、がんばります！」

「よし！　今日から君も騎士団の一員だ！　よろしく！」

一木さんが握手を求める。

俺は、生徒会でありながら反生徒会の騎士団へ入ったのだった……。

第1話　桐生和也と東董の騎士団（後書き）

そういえば、まだ美園の傍若無人ぶりが発揮されてないね。。。。

第2話　ウォッチボーイ

しかし、誰が美園を見張るのか！　もちろん俺だ。

だが、一つ困ったことがある……。

クラスのみんな、知らない奴まで俺のことを「ロリコン」だとか「ロリシュ」と呼ぶ。そう、これも全て会長のせいだ！

そう、だから俺は騎士団に味方するのさ！

美園会長という名の薄汚れた醜い魔獣の首を、俺が勇者となり、騎士団が俺の強力な武器となり、原型もとどめないほどグチャグチャに切り裂いて、その堕落しきった精神を死体安置所に送ってやるのさ！

そして俺はこう言う、「火葬でお願いします」。

イカれた悪の魂を洗礼された正義の炎で見違えるほど更正させてやるのさ！

悪を洗い流された魂が会長の肉体に戻った時、会長は俺にこう言うだろう、「ああ主よ。どうか私を菫畑に連れてってください！」。

そして、全てを涙ながらに謝罪するんだ！

うん、最高のシナリオだ――――なんてね。

バカみたいだ。

放課後、俺は、会長に絶対に来るようにと言われていた生徒会室へ向かう。

騎士団のこともあって、行かないわけにはいかないんだけどね。

それにしても、生徒会室を未だに使えることが不思議でならない。いったいどうなってんだこの学校は……。

お城の中にいるような、大きくて豪華な扉の前に、クソ会長と栗山さんが立って何やら貼り紙とにらめっこしていた。

「どうしたんですか会長？」

一応訊いてみる。

「ああ和也……」

相変わらず貼り紙とにらめっこしながら言う。

「何があったの？」

俺は隣にいた栗山さんに話を聞く。

「……つかえないみたい」

苔アホ毛娘め。何をかって聞いてるんだよ！

「『東菫の騎士団』ねえ……アホみたいな名前。誰が考えたのかしら。私ならもっと良い名前考えるわよ」

会長が呆れたように脱力して言う。

騎士団の名前を聞いて、俺はその貼り紙を見る。

『この部屋は、腐れ会長率いる堕天生徒会には贅沢すぎる。ヘドロまみれのガマカエルにフカヒレを与えるわけにはいかない。今日からこの部屋は我ら反生徒会団体『東菫の騎士団』の部室だ！　異論は認めない！　交渉にも応じない！』

酷い言われようだな。まぁ全部クソ会長のせいだが。

「行くわよ！」

会長の力強い叫び声に、俺と栗山さんはびくんとなる。

そして、去り行く会長の後に続く。

それにしても驚きだな。会長なら強行突破とかしそうなのに。いったいこの人は何を考えてるんだ？

それより、会長に関する情報を集めないといけないんだっけな。情報つっても、どんなのがある？　弱味？　まずそんなものが会長にあるのか疑問だ。

会長の後を追って着いたのは、新聞部の部室前だった。ここに来るのは朝と今の二回目か。今度はなんの用なんだ？

もしかして、この部室を乗っ取ったりなんてしようとしてるんじゃあるまいな？！

「たのもー！」

会長はいっちょ前にそう叫び、大きな音を立てて全力でドアを開ける。

まるで道場破りだ。

「はぁ……美園、今度は何の用？　それにメンバー全員連れて」

朝と変わらず、大きなテーブルから離れたところにパイプを置いて座っている小泉今日歌さんことキョンキョン。

会長はお構い無しにズカズカと室内に入ると、適当に置いてあったパイプ椅子を持ち出し、小泉さんのところまで行くと、向かい合わせに椅子を置いて、座った。

「……だから、何の用なの？」

呆れる小泉さん。

「キョンキョン！　あんた、生徒会に入らない？」

これは！　俺もこんなかたちで生徒会に誘われたんだ！

『サッカーやろうぜ！』みたいなノリで！

「はぁ？　……生憎、新聞部の作業で手一杯なんだけど」

完全に呆れ返ってる。めんどくさそう。だが、俺だってこんな風に

お断りさせてもらったさ！

会長のスカウトはこんなもんでは終わらない。

「大丈夫よ！　息抜きだと思えばいいから！　新聞部なんていう人のプライベートをあることないこと書くゲスい部活なんて、心底疲れるでしょ？　でも生徒会は違うわ！　そう、すっごく楽しいの！」

「ウチらはパパラッチなんかじゃないし……。学校の行事に関することとか色んな情報を発信して……」

あ、そうだ。これもちゃんとした情報だな。会長が新聞部部長を勧誘っと。

「お願い！」

「別に私じゃなくても、他にそういう騒ぎたいだけの連中はいっぱいいるでしょ？　今から記事書くんだから、あんたらがいると邪魔なの。とっとと帰って」

「いいじゃん！　別に」

少し甘えた口調になる会長。

「聞こえなかったの？　私は無理って言ったの！　もう出てってよ！」

小泉さんが煙たそうにそう言うと、会長は「ふんっ！」とふくれて、椅子も戻さず、出入り口まで向かってきた。

そして一歩廊下に出ると、「キョンキョンのケチ！」と舌を出した。

小泉さんは呆れた様子で天井を見上げて知らんぷりをした。

「行くわよ！　二人とも！」

今現在、大した情報は手に入らず。次に期待。

第3話　セイトカイをぶっつぶせ

会長はいったいどこに向かってるんだ？　……二つの意味で。

会長は一階にある何の部活か分からない部室の前で止まると「よし！」と声を上げた。

「なんですかここは」

「今日からここが、生徒会室よ！」

またそんな勝手に……。絶対許可取ってないでしょ！

「大丈夫なんですか？」

「その質問は野暮よ」

なるほど。さすが会長だ。

会長は堂々とドアを開けて入るが、俺も栗山さんも気が引けて、なかなか入れない。

「もっと度胸を持ちなさい！　そんなんじゃ生徒会の仕事が務まらないわよ！」

仕事って、もはや遊びのようなもんじゃん。それに、まず会長が会長になれたのがすごいな。

部室には何も置いてなく、殺風景だ。

「テーブルが欲しいわね」

会長がそんなことを言い出す。

「和也、夏子ちゃん！」

突然名前を呼ぶもんだから俺も栗山さんも「はい！」と大声で反応する。

「お隣から机を拝借してもらえない？」

「隣に部室なんてありましたっけ？」

「いいからいきなさい！」

「はい！」

俺と栗山さんは勢いよく廊下へ飛び出す。

また栗山さんと顔を見合わせ、隣の部室を訪ねることにする。

ドアに貼り付けられた紙には「枕研」と書いてある。枕研ってなんだ？

とりあえずノックをする。

返事もなく開かれたドア。目の前の立っていたのは、パジャマ姿の女子生徒だった。

眠たそうな目を擦りながら「なんですか？」と俺に訊ねる。

「あ、あの～机をですね、貸して欲しいんですが……」

俺がそう言うと、女子生徒は、相変わらず眠たそうに背後を振り向くと「部長、なんか来た」と言って、下がっていった。

その代わりに奥から現れたのは、同じくパジャマ姿の男子生徒だった。この人も眠そうだ。

「なんだい？　君らは」

「え、えっと、せいとか……」

やばい。生徒会の名前は出さない方がいいかな。

「なんて？」

「新聞部の者です。机を拝借したいのですが……」

「新聞部？　君、見ない顔だね。もしかして新入部員かい？」

「ええ、まあそうです」

やだ。このまま嘘をつくのが辛い。

「おお！　よろしく！　僕は枕研の部長、クレイヴっていうんだよろしく！」

握手を求めてくるクレイヴさん。とりあえず俺も手を差し出す。

それより何より、俺には溜まり溜まった疑問がある。『枕研』っていったい何だ？　何なんだ？

でもそんなこと聞けない。聞く余裕がない。早く机を拝借しないと。

「それで？　何だっけ？」

「机を貸して欲しいんです」

何回言わす気だよ！

「失礼します」

背後から声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。後ろを振り返ってみる。

「あ、桐生さん」

俺の視線の先にいたのは、『東菫の騎士団』の山口百子さんだった。いったい百子さんがこんな所に何の用なんだ？

「やあ、山口さん」

おっとりとしゃべるクレイヴさん。

「ちょっと、椅子が足りなくてね。悪いんだけど貸してくれない？」

偶然、同じように物を借りに来たようだ。それにしてもすぐ隣に会長がいるってことが心配だ。

「二人がいるってことは、あの子もいるのね？」

山口さんが俺と栗山さんを見て言う。『あの子』とは正真正銘、会長のことだろう。

「一応……」

クレイヴさんが運んできた椅子を抱えると、山口さんは俺に意味深なウインクをおくる。

「それじゃ、頼んだわよ桐生くん」

「は、はい……」

とにかく会長と接触しなくてよかったぁ。

「それで？　君たちは何だっけ？」

もう一度言おう、何回言わす気だよ！

俺は半ば強引に机と椅子を奪い去るように廊下に運び出す。

「こんにちは、美園さん」

ホッとしたのも束の間だった！　なんと山口さんと会長が顔を合わせてしまっていた！

「あなた誰？　見たことあるけど……」

「あなたが追い出したんでしょ？　生徒会からね」

「ああ、思い出した！　百子ちゃん！　ごめん影薄いから忘れちゃった」

「……私たち『東葦の騎士団』は、必ず生徒会、もとい、あなたを潰しますから。それだけは覚えておいてください」

それだけ言うと山口さんは、会長に背を向けて立ち去る。

宣戦布告されても会長は、どこか余裕の表情だ。その自信はいったいどこから湧いてきてるのか不思議だ。

そうだ、騎士団の勝利には、俺も頑張らなくちゃいけないのか……。

生徒会室に机と椅子を手分けして運ぶ。

「さぁて、作戦会議よ」

机と椅子を室内の真ん中に起き、椅子には座らず机の上に座る会長。

作戦会議ってのは、いよいよ本格的に騎士団との対決に挑むってことか。情報がいっぱい手に入りそうだ！

「キョンキョンを生徒会に入れる方法、何か案ある人いる？」

俺はずっこけた。

第3話　セイトカイをぶっつぶせ（後書き）

恐らくクレイヴは今回限りのキャラ。

第４話　最後の勧誘

「私に良い案があるわ」

だったら何故俺らに聞いたんだ？

「ちょっと待っててね」

会長はそう言うと、机から飛び降り、そそくさと部室を後にした。

いったい何をしようっていうんだ。

会長が戻ってくるまで暇だ。俺は床に胡座をかく。

栗山さんも座り込む。

待つこと数分、ドアがバタンお開き、会長のアホ面が戻ってきた。

会長は遊園地の帰りみたいに、脇に画用紙とマーカーセットを抱えて戻ってきた。

「何ですかそれ？」

「見て分からない？　小学生の時からよく使ってたでしょ？」

「いや、何をするんですか？」

「ここが生徒会室だってわかるように、ここに目立つ色と大きな字で『生徒会』と書いて、ドアに貼るのよ？　わかったら手伝って」

机に画用紙とマーカーセットを置きながら言う。

いつも思うが会長はバカだ。なんて危険なことを言い出すんだ。

「会長それってちょっと……」

今までずっと無言だった栗山さんが口を開く。

「何よ？」

「いや……何でも無い、です」

会長に威圧されて引き下がる栗山さん。

「そうそう、和也にはちょっと御使いに行ってもらうわ」

なんか嫌な予感……。

「な、なんですか？　御使いって」

俺がそう言うと、会長は待ってましたとばかりに、画用紙の下に隠してあった白い封筒を取りだし、「じゃじゃーん」と俺に見せつける。

「何ですかそれ？」

「お手紙よ」

「お手紙？」

「そう、お手紙。あなたには、今からこれをキョンキョンに届けに行くという極めて重要な仕事をしてもわうわ。誇りに思いなさい」

まだ諦めてなかったのか！

「嫌とは言わせないわよ？」

「……分かりました」

「夏子ちゃんにもちゃんと仕事があるから安心してね」

俺は廊下に出て、新聞部に向かう。

そうだ。会長には悪いが、これを騎士団に持っていこう。でも時間を掛けると怪しまれるな……。

騎士団の人たちとメアドでも交換しとくんだった。

……よし、走ろう！

俺は、ドアを閉めると、全力疾走する。

向かうのは元生徒会室。今は騎士団のアジト。

渡り廊下を駆け抜け、目指すは三棟の最上階！　会長に怪しまれないように、急ぎ足で向かう。

そして息切れしながらも元生徒会につく。大きな扉に似合わない控えめな小さなノックをする。

「はーい？」

仲から女子生徒の高い声がしたと同時に、観音開きの扉が開く。

「あら、桐生くん。どうしたんですか？」

声の主は山口さんだった。

「あの、こ、これ！」

息切れしながら俺は山口さんに封筒を差し出す。

「ロ～リシュっ！　どうしたの？」

背後からハキハキとした高い声が聞こえたと思ったら、体が引っ張られ、グッと傾く感覚を覚えた。

松田さんが肩を組んできた。

「会長が新聞部部長に宛てて書いた手紙です。届けるように言われたんですが……」

松田さんの腕の中で言う俺。

「なるほど……さすが桐生くん。よくやったわ」

笑みを溢す山口さん。

「それじゃ、俺、会長を待たせてるんで」

「そう、引き続き頼むわよ」

「はい！」

そう言って俺は、松田さんの軽いヘッドロックから逃れ、騎士団室を後にする。

そして大急ぎで生徒会室へ戻る。

ドアにはすでに目立つ鮮やかな字で「生徒会！」と書かれていた。

固唾を呑み、息切れを隠しながら恐る恐るドアを開ける。

「遅かったわね」

ドアを開けるのと同時に会長が、机の上に座りながら俺に不適な笑みを見せる。かなり怖い……。

栗山さんもちょっと怖じ気づいたように、申し訳なさそうに俺を見る。

いったい、どうしたんだ？　俺が言えたことじゃないけど……。

「手紙はちゃんと届けてくれた？」

「は、はい！」

「よかった、今さっき夏子ちゃんも手紙を届けてくれたの。これで私の計画は成立ね」

栗山さんも手紙を届けた？　作戦？　いったい何のことだ？

「どういうことですか？」

「その内わかるわよ」

そう言ってウインクをする会長。

俺には状況が理解できない。

第４話　最後の勧誘（後書き）

軽い感じで書いたら頭が混線。

みんなキャラ薄いかな？

第5話　スーパーガール（前書き）

騎士団ＶＳ生徒会（というよりか美園）の本格的な対決です。

第5話　スーパーガール

この日の生徒会の会議（？）は終わり、俺と栗山さんは、帰って良いと言われた。

部室棟の廊下を歩いていると、目の前から見覚えのある四人の人物が歩いてきた。

俺はその姿を見て、少し驚いて立ち止まってしまった。栗山さんもだ。

歩いてきた集団は、騎士団の方々だった。

恐らくリーダーであろう一木さんを先頭に横並びに松田さん、山口さん、ユゴーさんと続いている。

「やあ！　ロ～リシュっ！　元気してる？」

松田さんが笑顔で言う。

「あ、どうも……」

恐る恐る言う。

いったい、どうしたんだ？　もしかして、もう攻め込んできたのか？　まだ情報は新聞部部長に宛てて書いた手紙しか無いぞ？

俺と三メートルほどの距離で騎士団の人たちが立ち止まる。

「手紙、読ませて貰ったよ」

一木さんがそう言うと、何故か栗山さんが後退り、逃げ出そうとする。

「どう、でしたか……？」

「最高の内容だったよ！」

一木さんは笑みを浮かべながらそう言うと、俺が渡した封筒を地面に叩きつけるように乱暴に捨てた。

怒っているのか？

その行為の直後だった、無口なユゴーさんが俺に向かって突き進むように歩いて向かってくる。

その顔は厳つい顰めっ面だ。

俺は思わず後ずさる。

ユゴーさんがとうとう俺の目の前まで来る。何なんだいったい。

ユゴーさんの青い瞳を見ていると、ふと、何かが浮いているのが見えた。

そう思ったのも束の間、俺は頬に尋常じゃないほどの衝撃を受け、体が吹き飛ぶ！

「ぐはっ！」

三メートルほど俺は飛ばされただろう、何事かと思って、飛び起き、前方を見てみると、ユゴーさんが拳を俺に向けて何やらポーズをとっていた。

俺は、殴られたのか……？　口の中は血の味がする。

栗山さんが怯えたように立ち竦んでる。

ふと、生徒会室のドアが開き、中から会長が出てくる。

「やっぱり、ちゃんと来たわね。ありがとう和也！」

騎士団の姿を見据えると会長は何故か俺に礼を言う。殴られた衝撃もあり頭がぼんやりする。いったい何のことなんだ？

「望み通り来てやったぞ！　生徒会！　貴様らは我が校の恥だ！」

一木さんが叫ぶ。

「へえ？　それで？」

「今日で美園さん、あなたのくだらないお遊びは終わり！　あなたは、私たち騎士団によって二度とその口をきけないように打ちのめされるのよ。でも安心しなさい！　ちゃんと報酬もあるわ！　毎日休みなく社会貢献に追われる人生をプレゼントするわ。まず最初は、そうね、トイレ掃除なんてどうかしら？」

淡々と喋る山口さん。

しかし、会長は笑みを溢す。

「それ、間違ってない？　修正するとこうよ。『今日であんたらのくだらない偽善は終わり。あんたらは私たち生徒会によって二度とそのクソをたれる汚れきった口をきけないように打ちのめされるのよ。でも安心しなさい。ちゃんと報酬があるわ。私らのお世話係という、これまでにない最高の高校生活をプレゼントするわ。まず最初は、そうね、生徒会室の飾り付けなんてどうかしら？』」

「あなた方は、何も理解していないようね……」

山口さんが真っ黒いオーラを放つ。心なしか少し毛が逆立ってるように見える……。

「あなたたちこそ、空気の読めない連中ね。第一なによ。『東葦の騎士団』って。ダサい名前。ゾッとするわ！　それと吐き気もね」

会長と山口さんのにらみ合いが勃発する！

いったいどうしてこうなったんだ、と栗山さんと顔を見合わせる。これで三度目だ。

「ユゴー！　まずは裏切り者の和也くんをやっちゃいな！」

松田さんが勝手に指示する。っていうか、俺が裏切り者!?

「ちょっ――！」

ユゴーさんが猛スピードで突進してくる。これはマズイ！

死の恐怖を感じた俺は慌てて逃げる。きっとすっごく無様だろう。

でも構わない！　命さえたすかれば！

しかし逃げ場が生徒会室しかない！　これはホントにマズイ！

いきなり、会長は俺の胸ぐらをつかんで、庇うように俺と位置を交換し、向かってくるユゴーさんの前に出た！

いったいどうする気だ！？

そう思った次の瞬間だった。俺は胸ぐらをつかまれたまま、下に引っ張られ、前のめりになった。

そして、それに追い討ちをかけるように背中にずっしりとした、そして暖かい重みを感じる。

その直後、ものすごい物音と振動が耳と体に伝わった。

背中が軽くなり、ユゴーさんの姿を確認しようとしたが、向かってきていたはずのその姿が見当たらなかった。

一木さん、松田さん、山口さんは、驚愕の表情で窓の方を見ていた。

俺も何かと思って見てみる。

するとなんと、ユゴーさんが窓ガラスに身体を突っ込んで力無く項垂れていた！　まるでコメディーだ。

というか大丈夫か！？

本来強力なはずの分厚い強化ガラスは無惨にも割れて、破片が辺りに散らばっていた。

「今の見た!?」

会長が目を輝かせながら俺の方を向く。そして俺の反応など無視するように「カッコよかったでしょ!?　私のキック！」

キック!?

まさか、アレって、会長がやったのか!?

さっきの重たい感覚はそうか、俺の背中を台にしてユゴーさんを蹴り飛ばしたのか!?

っていうか、あの窓割るって、相当なパワーが必要だと思うけど……?

「あのユゴーが一撃で……」

一木さんがユゴーさんの無惨な姿を見て力無く言う。

「上等じゃん！　次はウチがやる！　ユゴーは油断しすぎなんだよ！」

松田さんが悔しそうに叫び、俺らというか会長に近づいてくる。

だが会長は松田さんに背を向け、俺の方を向きながら、目を閉じて、勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

あぶないですよ会長！

というか俺はどっちの味方なんだ？

「おーりゃぁあああー！」

会長の背後で、松田さんは、顔を狙った高い回し蹴りをする。

だが、なんと会長は相変わらずの笑みで見ずに腕で防ぐ。

鈍い音が廊下中に響き渡る。

「えっ？」

松田さんは思わず声をあげる。

それも束の間、会長は使っていない左腕の肘で、勢いよく松田さんの腹部を突く。

「がはっ！」

松田さんは悲痛な声を上げ、腹を抱え後退し、片目で苦しそうに会長を見る。松田さんあぶない！

会長は、振り返り際、大きく足を上げ、スカートを翻し、松田さんの顔面に目掛けて回し蹴りを入れた！

「きゃぁあっ！」

今までに無い女の子っぽい悲鳴を上げ、松田さんは仰け反り、三メートルほど吹っ飛び、廊下に仰向けで倒れこむ。

「あんたのやりたかったことってこれでしょ？　お手本は役に立ったかしら？」

どうやら生徒会会長、今田美園は、本当に悪の大魔王だったようだ――。

第5話　スーパーガール（後書き）

このままだと能力者とか出てきそう……。

第６話　生徒会からの手紙（前書き）

今回は美園ＶＳ百子！

そしていつもより長め。

第6話　生徒会からの手紙

俺は今日、会長のとんでもない一面を栗山さん、騎士団の人たちと刮目した！

まるで映画のようだ！

窓から夕日が射し込む日差しは、睨み合う会長と騎士団にスポットライトを当てているようで、戦いの始まりはまだまだこれからだということを仄めかす。

心なしか歓声も聞こえる……。

それにしても凄まじい光景だな……。

筋肉質のユゴーさんは、窓に体を突っ込んで無様に項垂れている。

魅惑のボーイッシュガールの松田さんは、仰向けで倒れてる。

「さあ、次は誰が吹っ飛ばされたいのかしら？」

会長はすっかり余裕を決め込み、背中から不適な笑みを浮かべていることが伝わる。

一木さんは怖じ気づいたのか、少し後退りし、山口さんの顔を見る。

だが、山口さんの方は、眼鏡のレンズに反射して、どんな目をしているかは分からないが、どこか強きで、それでいて冷静なオーラを醸し出している。

そう思った矢先、山口さんは、会長目掛けて歩み寄ってきた。

眼鏡の奥に見え隠れする目は、刃物のように鋭く、会長を睨んでいた。

その目にはまるでメデューサのような能力が秘められていて、その目を見てしまった俺は、得体の知れない恐怖で足がすくむ。

「……随分やりたい放題やってくれたわね。どうやら私たちは生徒会を見くびっていたようね――」

歩みよりながら山口さんは口を開く。

やりたい放題やってくれたわね、って、襲ってきたのはそっちでしょ！

ユゴーさんは会長に向かっていったと思ったらガラスにダイブしてるし、松田さんは、いっちょ前に回し蹴りしたと思ったら廊下の真ん中でイビキかきそうな勢いで寝転んでるし……

まさにやりたい放題だな！

「教えてあげる。騎士団はあなたみたいな騒ぎたいだけの子供になんか負けたりしない、ってことをね」

そう言って、山口さんは華麗におかっぱヘアーを揺らしながら眼鏡を外し、その鋭い眼光を会長に向ける。

眼鏡を外した山口さんは、案外美人だった……。

「へえ？　やる気なの？　それなら手加減しないわよ？」

「言いたいことはそれだけ？」

山口さんはその言葉を聞いた直後、俺は凄まじい衝撃を感じ、身体が吹き飛んだ！

「うぁっ！」

背中にも強い衝撃を覚えた。廊下の壁に打ち付けられたようだ。すごく痛い。

セルフで背中を擦りながら、俺は会長と山口さんのことが気になり、前を向く。

その光景は、まさに次元を軽く超えていた――。

まるでアクション映画のような壮絶な大立ち回り！

山口さんの滑らかで俊敏で強力そうなパンチやキックを会長が手足を使い防いだり、華麗な動きでかわす。

しかし、みる限りでは会長が圧されてる。

一木さんは、額に汗を滲ませ、心配そうに二人の闘いを見据えてる。

山口さんのパンチキック地獄を見切ったのか、会長が素早くしゃがんだ！　そして、そのまま一回転し山口さんのアゴ目掛けて蹴りを放つ！

しかし、山口さんはわかっていたように俊敏に身体を仰け反らしてかわし、一気に体勢を前にのめらせ、勢いよく隙だらけの会長目掛けてパンチを放つ！

パンチは会長の顔面にクリーンヒットし、会長は「きゃっ！」と悲鳴をあげ、仰向けに地面に身体を強く打ち付ける。

大丈夫か会長！

「いったーい！」

倒れても会長は、どこか余裕そうで、すぐに身体を起こす。

だが、今度は山口さんの踵が、会長の頭上で待機している。このままでは会長が危ない！

山口さんの踵落としが炸裂すると、ほぼ同時に、会長はそれをかわすように、しゃがんだまま素早く山口さんの横を勢いよく滑り抜け、窓際へ移る。

山口さんの踵落としは、隕石が墜落するように大きな音を立てて、俺の目の前に落ちてきた。

びゅうっ！　っと掠れた音が俺の耳の中に響く。そして凄まじい突風を感じ、身体がのけぞる。

なんてパワーのある踵落としなんだ！

ガリ勉の陰気少女だと思っていた山口さんは、会長にも負けない格

闘家だったようだ。

ユゴーさんのもとまで逃げた会長は、何を思ったのか窓ガラスの鋭い破片を素手で掴み、山口さんを見据える。

おいおい、まさかそれで山口さんに斬りかかるつもりか！？

しかし、山口さんもかなり余裕な表情で、笑みを浮かべ、気取ったように手のひらを返し手招きをする。

それを合図に会長は、飛び付くように山口さん目掛けて足を踏み込む。

かと思うと、姿勢を落とし、身体を寝かし、スライディングキックで、山口さんの足を狙う！

しかしそこは山口さん、上に飛びかわす。そのまま空中で一回転し、足を開いて着地する。

山口さんの股のしたに、仰向けで寝転がる会長。そして山口さんは拳を振り上げる！

またしても会長のピンチ！　このまま互角で終わったら、山口さんの判定勝ち間違いなしだ！

しかし会長はにやける。

会長は寝転んだまま、足を曲げ、体育座りの様な状態になり、そして山口さんのパンチが来る前に、そのまま足を目一杯開き、その衝撃で同時に山口さんの足も開かせる！

「きゃぁ」

山口さんは小さく悲鳴を上げ、会長に向かって倒れかかる。

それを見計らい、会長は持っていたガラスの破片を山口さんの顔面目掛けて突きだす！

山口さんは顔を傾けてかわし、ガラスは頬を掠め、切り傷が走る。

だが会長の攻撃はまだ終わってなかった！

会長は、すぐにガラスを持った手を引っ込め、目一杯開いた両足を使い、女座りで地面に座り込んだ山口さんの顔をヘッドロックする！

まるでプロレスの試合を見ているようだ！

「くっ！」

苦しそうな山口さん。

会長は、そのまま勢いをつけ、ともえ投げをするように山口さんを投げ飛ばす。

その勢いはとどまるところをしらず、山口さんは強化ガラスを突き破り、屋外へ飛んでいってしまった！

そして悠々と起き上がり、見事に割れた窓を見ながら「どうする？一木さん」と言うのだった……。

西日に照らされた会長の堂々とした表情は、とにかくかっこいい！
惚れてしまいそうだ！

「……次会う時が、お前の命日だ！」

悔しそうに吐き捨てる一木さん。

そして、目の前に仰向けで倒れ気絶している松田さんの脇腹を小刻みにさするように蹴り「起きろ松田！」と焦った様子だ。

ふと、誰かが階段を降りてくる音がした。

降りてきたのは新聞部部長の小泉さんだった。悲惨な光景を前に立ち止まると「え？」と声を漏らす。

「キョンキョン。遅いじゃない」

会長が腰に手をあてて言う。

「つーか、何これ」

不思議そうに辺りを見回しながら会長に向かってくる小泉さん。

「ユゴーさん？　死んでるの？　これ」

窓に身を突っ込んだユゴーさんを見て言う。

「さあ？」

なんとも無責任な発言をする会長。

「それより、和也、夏子！　これより生徒会緊急会合をするわ！　早く中に入って！」

騎士団の人たちを放置し、会長は手招きをする。

さっきまでの会長の残像に圧倒され、言われるがまま、生徒会室の中に入る俺と栗山さん。それと小泉さん。

室内の真ん中の机の前に会長と小泉さんは立つ。

「さあ！　二人とも！　心して聞いて！」

会長が言う。

「この度、この子、キョンキョンが生徒会の一員になりまーす！」

「え？」

いったいどうしたっていうんだ？　俺は手紙を届けてないぞ？

小泉さんは、余計なお世話とばかりに、少し恥ずかしそうにそっぽを向く。

「全部、夏子のお陰よ。ありがとう夏子」

「ど、どういたしまして……」

俺には状況が理解できない！

「か～ずやっ」

会長がわざとらしく俺の名を呼ぶ。

「は、はい？」

我ながら少し同様した声を上げてしまう。

「廊下に落ちてる手紙、ちょっと回収してきてもらえるかしら？」

「わ、わかりました！」

俺は廊下に出る。

さっきまであったユゴーさんの姿もとい騎士団の姿はどこにもなく、窓際にはガラスの破片が落ちている。

そして、廊下の真ん中に俺が騎士団に渡した封筒が落ちている。

俺はそれを拾い、中身を確かめる。

手紙には太い字でこう記されていた――。

『俺、桐生和也は騎士団など言う下劣な集団に付き合う気も協力する気も更々無い！　俺が慕うのはただ一人、偉大なる今田美園名誉会長のみだ！　わかったか！　そして我ら生徒会は、貴様ら薄汚れた足の裏の角質を集めたような騎士団に宣戦布告する！　桐生和也』

……なるほどね。そういうことか。

会長は、最初から全て見抜いていたってわけか……。

施設でのこともそうだが、もう迂闊なことができないな――。

俺の高校生活、自由など一切許されないようだ。

第1話　告白（前書き）

新章突入！

第1話　告白

昨日は、会長の意外な一面を刮目し、騎士団の無様な姿を目撃した。

そして、新聞部部長の小泉さんは、会長の書いた手紙に心動かされたのか、生徒会に入った。

これで生徒会のメンバーは四人になった。これからいったいどうなっていくのやら……。

朝、教室に向かう途中、廊下の掲示板を見てみると、その記事がすでに張り付けてあった。

見出しはストレートだった。『騎士団、無惨！』

記事には昨日の一件に関する写真は無く、文章だけだった。

「ようロリコン」

後ろから男の声がして、振り返って確認する。

そこにいたのは、入学当初から仲良しだった近藤（こんどう）　彰造（しょうぞう）だった。

彰造、お前も可哀想な奴だな。

俺は彰造を軽くあしらい、教室へ向かう。

教室に入ると、真っ先に俺の席に向かう。

ふと、机の中に手を入れると、何か薄っぺらい紙のようなものが入っていた。

取り出すと、それはどうやら手紙のようだった。

まさか、惨敗した騎士団の連中がリベンジを申し込もうと俺にこっそり手紙を書いたのか？

手紙の内容を見てみる。

『桐生　和也くん　　放課後、体育館裏に来てください』

果たし状か？　名前も書いてないし……。でも、騎士団ではなさそうだな。文面が殺風景だ。それに文字が整ってて可愛らしい。

「おい！　それって――！」

びっくりした！　後ろから彰造の声がし、思わず振り向く。

「なんだよ」

「それ、ラブレターじゃね？」

彰造がわざとらしく言う、まさか、俺にそんなものが？　まるで青春映画だ。

それにラブレターってもっと文字数多いと思うし。

「騎士団の罠かも」

「いいや、騎士団はそんな器用に攻め込んでこないだろ」

こいつは騎士団の何を知ってるんだ？

「絶対、女子からだよ！　行った方が良いって！」

「騎士団だったら、この手紙食わすからな」

「お好きにどうぞ」

放課後、俺は手紙に書いてあった通り、体育館裏へ向かう。

体育館に向かう渡り廊下を外れ、その大きなの建物に沿って、裏へ回る。

路地裏のような小さなスペースに一人の女子生徒が立っていた。

「あ、あの～」

恐る恐る声を掛けてみる。

そうすると、鳩が豆鉄砲を喰ったような顔で振り向く。

リンゴのように赤い頬、薄い眉毛、少し垂れ気味の大きな瞳、そして、魅惑の厚い唇。ミディアムのふわふわっとした桃色の内巻きの髪。

なにより、ワイシャツの上からでもわかる、その巨乳さ加減！

俺はこの女子が眩しくて仕方なかった。

もしかして、この綺麗な子が俺を呼び出したっていうのか？

「和也くん……」

この子はそういうが、俺はこの子を知らない。

「ええっと……」

伺うような感じで言ってみる。

「あ、ごめんなさい……。私、矢口（やぐち）　真依（まい）って言います！」

「矢口、さん？　あの手紙書いたのって」

「私です！」

食い気味来られた。なにやら緊張しているようだ。それに触発されて俺もちょっと緊張してきた。色々な可能性を考えて……。

「俺に何か用？」

「は、は、はい！　入学式の日から、ずっと好きでした！　私と付き合ってくださいっ！」

矢口さんは、顔を真っ赤にし、思いっきり目を閉じて、恥ずかしそうに下を向いた。

告白されるなんて、しかもこんな可愛い子から！　こんなこと一生

無いと思ってた！

というか、返事をしなければ！　ビジュアル的には物凄くＯＫだが、俺はこの子のことを全く知らないし……どうしよう。

勢いだけで付き合うか？

「俺も！　す、好き、でした！　真依と呼ばせてください！」

緊張して出た言葉がこれだ。我ながら意味不明だが。

しかし、矢口さんは一気に顔を上げ、ニッコリと笑顔になり、目を輝かせた。

俺の青春はこれからだ！

この日は、俺は連絡先だけを交換し、わかれた。

なぜなら、生徒会という名の鎖が俺を縛っているからだ。

しかし、俺は鼻唄を歌いながら生徒会室に向かう。恐らくスキップもしていただろう。

生徒会室に入ると、もう既に俺以外の全員が揃っていた。

「遅い！」

机の上に座りながら会長が怒鳴る。

「ちょっと用事がありまして……」

一応、いいわけをする。

「これから大事な会議なのよ？　遅れるなんて言語道断」

いや、そんなこと聞いてませんし……。

「すみません」

とりあえず頭を下げ謝っとく。しかしワクワクが止まらない！

「今度は何を企んでんの？　会長さん。私は部活もあって忙しいんだから、くだらない内容なら帰るよ……って全部そうだからこんなこと言っても無駄か」

小泉さんが皮肉っぽく言う。

「安心しなさい！　今日も私の夢目掛けて、突き進むわ！」

意味不明だ。

「折村（おりむら）　純（じゅん）ちゃんって知ってるかしら？」

折村　純？　たしか入学当初に聞いたことある。

「もちろん。忌まわしき風紀委員の奴だからね」

小泉さんが答える。

「そうそう。それでね、その子を生徒会に入れようと思ってるの！」

またメンバー集めか！

「無理無理！　二つの意味でね！」

「どうしてよ」

「あの頑固な奴が絶対にこんなゲスい集団なんかに入らないし、まず私がアイツを嫌い！　私パス！」

そう言って生徒会室を出ていく小泉さん。

会長、今度はどんな作戦で俺を驚かせてくれるんだ？　新聞部無しで。

第2話　サイレント昼（前書き）

第三章は急展開の章です。

第2話　サイレント昼

小泉さんが帰ってしまったことで、会長はひどく激怒してしまい、今日はすぐに解散となった。

すっごく助かる！

栗山さんと一緒に廊下に出たとき、割れたまんまの窓の外に騎士団の松田さんがいた。

松田さんは、慌ただしく校門を出ていった。いったいどうしたんだ？

そんなことより、早く家に帰ろう！　俺は大急ぎで通学路を逆走する。

家につき、自室のベッドで横になりながら携帯を開くと、メールが一件届いていた。真依さんからだ。

『和也くん。いきなりだけど、明日の放課後、暇かな？　生徒会の活動あるから無理かな？』

ホントにいきなりだ。

生徒会もあるけど、あの感じじゃ、きっとすぐ解散かな？　そうじゃなくてもサボれば良いし。

『たぶん暇だと思うよ。何かあるの？』

送信っと。

返事はすぐに返ってきた。内容を見てみる。

『じゃあ、明日の放課後、一緒に帰りませんか？』

そんなこと、わざわざメールでいうことなのか？　なんか可愛らしいからとりあえず『いいよ！』と送っとくか……。

次の日、俺は掲示板を見て驚愕した！

『桐生　和也×矢口　真依　熱愛！』

そして体育館裏で俺と矢口さんが話してる写真が貼られていた。

くそ！　新聞部め！　というか小泉め！

「か～ずやくんっ」

後ろから声がし、振り向くとそこには彰造がいた。

「お前やるな！　セクシーレーザーと付き合えるなんてさ！」

「セクシーレーザー？」

「お前の彼女だよ」

矢口さんのことか。

そんなことより、この記事をどうにかしてもらわないと！

まだロリコンの件もおさまってないのに！

昼休み、俺は新聞部の部室へ向かった。

ノックもせず勢いよくドアを開ける。そしてこう言う。「小泉さん！」

部室には小泉さんはいなかった。いたのはたった一人の男子部員だけだった。

「あ、あの、小泉さんは？」

俺がそう言うと、その部員は俺に小さな紙切れを渡してきた。

そこには『生徒会室』とだけ書かれていた。

喋れないのか？　なぜ紙切れなんかに……。

俺は取り敢えず生徒会室へ向かう。

ドアを思いっきり開けると、室内には、小泉さんと会長がいた。

それとなぜか部屋のカーテンは全部閉められていた。

「小泉さん！　なんですかあの記事は！」

「シー！　静かに」

小声でそう言う小泉さん。

そして会長が一枚の紙切れを俺に渡してくる。

『あの記事は新聞部が書いた記事じゃない』と書かれている。

今日はなんか様子がおかしい。誕生日パーティーでもするのか？

というか二人は仲直りしたのか？

会長はもう一枚俺に紙切れを渡してくる。

『今日は生徒会活動無し』

そして会長は俺を出ていくようにと言う。

俺は生徒会室を無理矢理出された。おかしい。明らかに変だ。

でも、これで矢口さんと一緒に帰れる。まぁ嬉しいっちゃ嬉しいな。

放課後、俺は校門前で矢口と合流した。

「待たせた？」

「ううん、全然」

「じゃあ行こうか」

なんか緊張するなぁ～こういうのって。

校門を出て、大きな道路沿いを歩いていると、ふと矢口さんが、「そうだ、ちょっと遠回りしない？」と言い出した。

「いいね！」

普通に帰るのも味気ないから、たまにはそういうのもいいなぁ。

矢口さんは、俺の手を引いて、狭い路地まで連れていく。

なんか青春だなぁ～……。

しばらく手を引かれながら歩くと、いつのまにか行き止まりまできていた。

三方をコンクリートの壁が覆っている。

「行き止まり？」

「うん」

けろりと答える矢口さん。

「やあ、和也くん！」

背後から男の声がした。

振り向いてみると、そこには、一木さんが堂々と仁王立ちしていた。

「一木さん……」

俺がそう言った途端だった。矢口さんは、一木さんに向かって走っていった。

かと思うと俺の方を振り向いた。

「もう分かっただろ？　お前は騙されたんだ！　矢口さんの色気にな！」

一木さんが言う。

クソ！　やっぱり騎士団の罠じゃないか！　彰造のせいだ！

第3話　スタンド　バイ　ミー（美園視点）（前書き）

なんか違うと感じサイブタイ変更。

第3話　スタンド　バイ　ミー（美園視点）

私は一人、風紀委員の連中が集う教室へ向かう。

私にノックされる安っぽいドアは、私に『勝手に入れ』と言っているようなもの。

ドアを開けると、そこには一人の女子生徒が立っていた。私は彼女を知ってるわ。

「折村　純ちゃんね」

「……はい」

様子を伺うように返事をする純ちゃん。

「委員長は不在かしら？」

「はい、いません」

そりゃそうよね。

私はスカートのポケットから封筒を取り出し、それを純ちゃんに渡す。

「はいこれ、ちゃんと読んでね」

「あ、はい」

封筒を受け取る純ちゃん。そしてそれをポケットにしまった。

封筒をしまったのとは反対のポケットから何やら黒いものを取り出す。

私はそれを見切れなかった。

脇腹にすさまじい衝撃を感じる。そして気が遠くなる……

「んん……」

意識が朦朧とするけど、私にはわかるわ。私は気絶してた――。

目を擦ると、目の前には足の角質騎士団のユゴーとその横に純ちゃんもいる。それとさっきまでいなかった百子も。

自分の身体を見てみると、身体がロープでぐるぐる巻きにされて身動きがとれない。

「まんまと罠にハマったね。会長さんっ」

百子がほざく。

「騎士団は、あんたの行動を全部読んでたんだよ？　あんたが純ちゃんを勧誘しようとしてたってことはね。純ちゃんは元々、騎士団

派だからさ、すぐに協力してくれたんだ。知ってるよ？　キョンキョンと仲間割れしたんでしょ？」

全く面白い冗談だわ！

「これで一対一の同点だね。会長さんっ」

言いたいことはいっぱいあるけど、口にガムテープを貼られて声を出せない。逆に好都合だわ。

「今、和也くんも酷い目にあってるかもよ？　ハニートラップってやつ」

百子のア●ルがクソを垂れた途端、ドアが開く音がして、その方向を見てみると、そこには風紀委員の委員長、浜田（はまだ）　伊代（いよ）ちゃんがいた。

黒髪のお下げ、風紀委員長らしいキチッとした身なり、楕円形のフレームの眼鏡、いかにも真面目そうな伊代ちゃんは私を見下ろしてから、騎士団のところへ歩みよった。

「やりましたよ委員長！　ついに生徒会長を捕らえました！　委員長のスタンガンのお陰です！」

嬉々と笑みを浮かべながら言う純ちゃん。ホントに……物騒なものを持ってるわね。軽く犯罪だわ。

「よくやりました。純さん」

「はい！」

嬉しそうにはしゃぐ純ちゃん。

そんな純ちゃんに伊代ちゃんは手を差し伸べた。

「スタンガンを貸してくれますか？　こんな下劣で不気味な下等生物はもっと懲らしめてやらなくちゃいけません」

「はいどうぞ！」

伊代ちゃんはスタンガンを受け取り、私の方に近づいてくる。

だけど、素早く純ちゃんの方に振り返ると、勢いよくスタンガンを持った手を純ちゃんの脇腹目掛けて突きだした。

そして電源を入れたのね、バチバチっと音がなる。

そして純ちゃんは当たり前のように崩れ落ちる。

だけど、ユゴーと百子がそれに気づいたのか、一斉に伊代ちゃんに襲いかかる。

伊代ちゃんは素早くユゴーの腹にスタンガンを突き刺すようにあて、休むことなく百子の腹にも同じ仕打ちをする。

ユゴーの巨体も百子も崩れ落ちる。

さっすが伊代ちゃん！

「ふぅー……。私も柄にもないことをしたものね……怪我はないで

すか？　美園さん」

そう言って伊代ちゃんは、私のもとまで来てガムテープを剥がしロープをほどいてくれる。

「ありがとう伊代ちゃん！」

私は伊代ちゃんに抱きつく。

「やめなさいって！」

伊代ちゃんは顔を真っ赤にして私を振り払う。……懐かしい光景。

さあて、こっからが本番ね。

騎士団を懲らしめてやらなくちゃ！

「ねえ、一つ聞いていいかしら？」

伊代ちゃんが言う。

「なあに？」

「あんたの集めた生徒会メンバーのことなんだけど……」

やばいわね。気付かれたみたいだわ。

「シー！　その話は内緒！　それよりまずやんなきゃいけないことがあるでしょ？」

私は純ちゃんに歩み寄る。

第４話　それでも恋する和也くん（前書き）

次の章からはもうちょっとほのぼのとした急がない話にしようかと思う……。

第4話　それでも恋する和也くん

行き止まりに追い詰められた俺には、もはや逃げ道は無い。

目の前には仁王立ちをする一木さんと、哀れんだ目で俺を見る矢口さん。

「今ごろ、君の会長も、亀甲縛りで痛め付けられてるだろう！」

「まさか。会長がそんなバカするはずない！　会長は強化ガラスを割るような暴君だ！　返り討ちにあってるさ！」

「それはどうかな？　では試しに電話してみようか？」

そう言って一木さんはおもむろにズボンのポケットから携帯電話を取り出す。そしてキーを何度か押し耳にあてる。そして「もしもし。折村くんか？」と通話を始めた。

電話相手の声は、俺にも聞こえた。

『は～い、折村　純ちゃんです』

風紀委員の奴は、自分のことをちゃん付けで呼ぶのか？　そういうルールか？

「誰だ貴様は！」

一木さんが突如怒鳴る。

『純ちゃんですよ？　今、気絶してるんだけど、もうすぐ亀甲縛りで蝋燭垂らされる予定で～す。喘ぎ声は聞かせますけど、映像は見せませんよ？』

「貴様は……今田美園か！？　なぜ貴様が！」

ふん。俺の言った通りじゃん。

『あ、そうそう聖ちゃんの画像なら送りますよ？』

「うるさい！」

『あとは頼んだわよ。ま～いちゃんっ』

一木さんの携帯からそう聞こえた途端、矢口さんが、あらかじめ用意していたのか、少し開いたスクールバッグの中から何やらスプレーのようなものを取り出した。

かと思うとそれを一木さんの顔面目掛けて噴射する。

「ぐわぁああ！」

目を押さえて跪く一木さん。いったい何が起こったんだ？　催涙スプレーか？

「和也くん！」

矢口さんが大声叫ぶ。

「えっ？」

「早く来て！」

矢口さんが大振りな手招きをする。

それにつられて自然と身体が矢口さんの方へ進む。

矢口さんは、俺の手をぎゅっと掴むと、一木さんを置き去りに、走り出す。

しかし、何かに躓いて「きゃぁっ！」と声を上げ倒れ込む、手を握られていた俺も跪く。

その瞬間、目の前が一瞬だけ真っ白になる。

倒れながら見えたのは山口さんの姿だった。

どうやら山口さんは矢口さんの足を引っ掛けて転ばしたんだとすぐにわかった。姑息な女だ。

何かに駆り立てられたようにすぐに起き上がる矢口さん、俺の手を引き走る。

だが、後ろを向いてみれば、山口さんが猛スピードで追ってくる！

矢口さんは、狭い路地の角を曲がった。

その時、俺は電柱に隠れている栗山さんの姿が見えた！　いったいこんなところで何をしているんだ緑頭のアホ毛は！？

山口さんも角を曲がってきた。しかし！

なんと、あの陰気な栗山さんが、「えいっ！」と可愛げに叫び、山口さんに足を引っ掛けた！

当然、勢いよく走っていた山口さんは「ぎゃぁ！」と柄にもない声を上げて転んだ！

栗山さん！　ナイス！

俺と矢口さんは、学校からほど近い賑やかで大きな道路に面したチビッ子たちの笑い声や叫び声が響く公園のベンチまで逃げた。

ベンチに二人して腰掛ける。

運動が苦手なのか「はぁはぁ……」と過呼吸で額に汗を滲ませる山口さん

「和也～～！」

遠くから高い声が聞こえる。会長だ。それともう一人女子生徒も一緒だ。

「ここにいるってことはやったのね！　ありがとう矢口さんっ！」

全然ついていけない。俺の知らないところで、いったい何が行われていたんだ？

「それじゃ、私らは最後の仕事があるから、騎士団は向こうにいる

のよね？　じゃ、行くわよ伊代ちゃん！」

「全く……美園って子は……」

そう言って、俺らが逃げてきた道に走って行く二人。

疑問は溜まりたまっているが、一番気になるのは……。

「や、矢口さん？」

「はい？」

背筋をピンと伸ばした正しい姿勢で俺に振り向く矢口さん。

「あ、あの、お、お付き合いの件は……」

徐々に声が小さくなる俺。情けない……。

「う～ん……私、まだ和也くんのこと全然しらないから、お友だちからってことで」

「は、はいす……」

呆れて声が掠れる俺。

矢口さんはポケットから紙切れを取り出して俺に渡す。

そこにはメールアドレスらしき文字が書かれていた。

「なにこれ」

「私のメアドです」

「え？　昨日、交換しなかったっけ？」

「ううん。あれは私のじゃないから――」

「誰の？」

「一木さん」

嘘だろ？　ってことは、俺がドキドキしながらメールした相手は一木さんか！　ふざけやがって！

矢口さんは俺に「じゃあね」と別れを告げ立ち去る。

はぁ……なんだかすっごく空しい気分だ。

第5話　レジスタンス／負けざる者たち（前書き）

ちょっと書き忘れたことがあったから修正した。

第5話　レジスタンス／負けざる者たち

次の日、俺は掲示板を見て唖然とした。

『騎士団、カップル襲う』という見出しで、山口さんが矢口さんに足を引っ掛けるシーンを写した写真が使われていた。

あの白い光は、フラッシュだったのか！　それにしてもよく捉えたなぁ……。

「よぉ！　大変だったな！」

彰造が笑いながら寄ってくる。ふざけやがって！

「騎士団の罠だったぞ！」

「何が何が？」

「あの手紙だよ！」

「ああ！　あれね！」

「お前の言った通り、食わす！」

俺はあの忌まわしき手紙をズボンのポケットから取り出す。

「まぁ待てよ！　俺の話も聞いてくれ！」

言い訳など聞かん！

俺は手紙を突きつける。

「実はあれ、俺がお前の机に入れたんだ」

今なんと言った？

急なことに手が止まる。

「騎士団の山口先輩に頼まれたんだよ。これを和也の机にいれといてくれってね」

「おい！　どういうことだ？」

「それだけじゃないんだ。朝、手紙を受け取ってお前の机に入れようとした時、生徒会長が俺に声を掛けてきたんだ」

「会長が？」

「そうだ。そして俺にこう言ったんだ。『その手紙、ちゃんと和也に読ませてね』って、しかもその後、芸を仕込まれたんだ！」

「……芸？」

「和也が手紙を開いた時は『それ、ラブレターじゃね？』って言えって言われた。さらに『騎士団の罠かも』って言われた時には『いいや、騎士団はそんな器用に攻め込んでこないだろ』って仕込まれた。そして止めにこう言えって『絶対、女子からだよ！　行った方が良いって！』ってね。後はアドリブ。良い芝居だったろ？」

どうりでわざとらしかったのか！

ってことは、会長は手紙の内容を全て知っていたのか？　なぜ？　どうやって？

「ってことで、もうすぐ予鈴がなるから俺はこの辺で……」

「待て！　約束は約束だ」

俺は彰造の肩をつかむ。

「冗談だろ？　やめろやめろぉおおぉぉ！」

放課後、俺はいつものように生徒会室へ向かう。

ドアを開けると、昨日とは違って、カーテンだけでなく、窓も全開だ。

そしていつものように机の上に会長が座ってる。

その後ろで小泉さんが椅子に座っている。

俺のすぐ隣には栗山さん。

そして、もう一人、昨日見た知らない女子生徒がいる。もしかして、この人が折村　純？　でも昨日電話で亀甲縛りとかなんとか言ってた気が……。

「気になるでしょ？」

会長が俺の気持ちを察して言う。

「生徒会新メンバーの風紀委員長、浜田　伊代ちゃんよ！」

え？　風紀委員長？

「メンバーに勧誘しようとしてたのって、折村純というひとじゃなかったんですか？」

「私が狙っていたのは、最初から伊代ちゃんよ？」

「え？　でも昨日……」

「あれは嘘よ？」

「え？」

ホントにどういうことだ？

「教えてあげる」

そう言って会長は黙々と喋り始める。

「昨日、キョンキョンが新メンバーのことで協力しないって言って出ていったじゃない？　それは嘘でわざと言ったのよ。外に騎士団のスパイがいてね。新聞部員が教えてくれたの。私があらかじめ外に忍ばせておいたね。それでお芝居をしたってわけ。純ちゃんを狙うって、そして新聞部が今回は仲間はずれだってあえてね。でもホントの狙いは委員長だったの」

昼休み、抗議にいったときに静かだったのはスパイを警戒してのことだったのか？

それにしても

「なんで嘘なんかつくんですか？」

「ほらこれを見て」

そう言って会長は一枚の写真を俺に渡す。

そこには窓ガラス越しに何やら文章を書く山口さんの姿が写っていた。

書いてある内容、見たことある！　矢口さんからの手紙だ！

あれは山口さんが書いていたのか！　『口』しか会ってない偽物が！

「その写真は私が撮ったやつね。騎士団の作戦は、会長を他のメンバーから引き離して、別々で痛め付けるって作戦だったわけ。それに、和也くんが詰め寄ってきた、あのスクープ写真は、実は私が撮ったやつ。騎士団のモチベーションを無駄に上げるためのね。私が生徒会から仲間はずれだっていう。まぁ、和也に嘘をついたのは、あのとき和也は邪魔だったからね。こっそり作戦会議には」

小泉さんが座りながら話し出す。

やっぱりあれは新聞部のだったのか！

「アイツらは、純を新メンバーに入れるっていう嘘の情報をまんまと手に入れて、私らより先に純に接触して、手を組んだんだ。元々、純は騎士団派だからね。でも、それも会長さんの狙いだったってわけ」

小泉さんの言葉に「うんうん」と頷く会長。そして会長が口を開く。

「私たちはその隙を狙って、すでに騎士団の手先だった真依ちゃんを説得してお芝居をするように言ったの。和也を騙すのとは別のね。その次はこの作戦の重要人物である和也がちゃんと真依ちゃんに接触するように、騎士団に仕込まれた演技に騙されるように、和也の親友の近藤くんに芸を仕込んだの。もう聞いたでしょ？　そして私は、騎士団がノーマークだった、そこにいる伊代ちゃんに手紙を渡したの。そしてあとは和也が真依ちゃんにまんまと連れて行かれるのを待ったの。気づかなかったでしょうけど、二人の後をキョンキョンと夏子がこっそりつけてたのよ？」

全然気づかなかった！

っていうか、さっきの彰造が真実を話すってことも作戦だったのか！

もう大体内容は掴めたぞ。

「それに私も体を張ったのよ？　和也は何も知らないでしょうけど。まず、伊代ちゃんに頼んで純ちゃんにスタンガンを持たせたのよ」

スタンガン！？　そんなもん捕まるだろ！

「それで、私は、嘘の通り、純ちゃんに会いにあの教室へ行ったの一人で。まぁ、廊下に伊代ちゃんを忍ばせてだけどね。そして私は

わざとスタンガンをくらったの！　気絶したわよ。起きた時にはロープでグルグル巻きよ！　ユゴーと聖と純ちゃんが私を嘲笑ってたわ。でもナイスタイミングで伊代ちゃんが教室に入ってきたの。純ちゃんに信頼されてる伊代ちゃんは、言葉たくみに純ちゃんからスタンガンを奪うと見事に三人を潰したわ！　目にも止まらぬスピードでね」

なんでそんなめんどくさいことするんだ？　会長なら蹴り一発で殲滅できると思うんだが……。

「そして、あとは、純ちゃんの携帯に博から電話が掛かってきたから、それを利用して真依ちゃんに合図したの！　私があらかじめ渡しておいた催涙スプレーを博の顔に吹きかける合図をね。案の定大成功よ！」

会長の表情は喜びに満ちていた。

「そうそう。あとは私となっちの仕事ってわけ。一木の背後に山口が隠れてることなんて大体予想できたからね。追ってくる山口をなっちが転ばせて、あとは、私が押さえつけてやった！」

会長のところまで歩み寄る小泉さん。そして二人は笑顔で「いえーい！」とハイタッチする。

俺の知らないところで、生徒会と騎士団の裏をかいたもん勝ちの頭脳戦が繰り広げられてたってわけか……。

そしていつの間にか俺もそれに巻き込まれていたのか。

騎士団の奴らは、前回みたいに直接対決じゃなくて、今回はちゃん

と作戦をたてて会長に挑もうとしたようだけど……。どうやら会長のリサーチ勝ちって感じだな。

関心したよ会長……。やってることはアレだけど……。

「回りくどくないですか？　その作戦」

俺は疑問を投げ掛ける。

「そう？　私たちにもちゃーんと目的があるのよ？」

会長が俺に言う。

「目的？」

「百子が二人を転ばせた瞬間、実はキョンキョンが写真を撮ってたの。それで記事を書いたの。和也も朝見たでしょ？　『騎士団、カップル襲う』ってね。そもそも私たちの狙いは、騎士団の支持率と好感度を低迷させることだったのよ。結果は大成功！　今や騎士団の味方なんて小汚ないゴキブリぐらいよ！　詰めが甘いのよ。騎士団の連中は！」

……なるほど、納得。会長、あんたは天才だ、色んな意味でね。それにしても騎士団もバカな連中だ。

小泉さんを仲間に勧誘すればよかったのに。

それと、いつの間に小泉さんは栗山さんのことを『なっち』と呼ぶように……。

第5話　レジスタンス／負けざる者たち（後書き）

ちょっと展開急ぎすぎて微妙な話になったけど第三章はこれでおしまいです。

次からはほのぼのさせます！

第一章～第三章までに出てきたキャラ。（前書き）

キャラの名前にプチ情報を添えました。

第一章～第三章までに出てきたキャラ。

主人公
・桐生（きりゅう）　和也（かずや）　（男）
１６歳（一年）
何の取り柄もない普通の高校生。雛菊育成園出身。
生徒会長の美園に無理矢理生徒会に入れられて、大変な一年を送る予定。
週に一度、施設に遊びに行く。

★★★生徒会★★★

・今田（いまだ）　美園（みその）（女）
１８歳（三年）
東葦高校（ひがしすみれ）の生徒会長。そのわがままさと傍若無人さと悪賢さに誰もついていけず、ついに一人になってしまう。しかしそれも彼女の狙い……？
格闘技もでき、その腕前は百子を凌ぐ。
和也と同じ施設出身。

・栗山（くりやま）　夏子（なつこ）（女）
１６歳（一年）
和也と同じように無理矢理生徒会に入れられてしまうかわいそうな少女。
無口でほとんど喋らない。髪の毛が緑色なため、和也に心の中で「苔頭」や「緑頭」と呼ばれている。

・小泉（こいずみ）　今日歌（きょうか）（女）
１７歳（一年）
愛称は『キョンキョン』。
新聞部の部長で、美園の手紙を読んで生徒会に入る。
やや冷たい性格で、めんどくさがりだが、仕事はちゃんとする。

・浜田（はまだ）　伊代（いよ）（女）
１８歳（三年）
風紀委員の委員長でありながら、美園の手紙で、生徒会入りする。
礼儀正しくて、仲の良い同級生にも下級生にも敬語を使う。
お下げの髪がトレードマーク。

★★★東堇（とうきん）の騎士団★★★

・一木（いつき）　博（ひろし）（男）
１８歳（三年）
騎士団のリーダー。
優等生で、元生徒会メンバー。美園のことが誰よりも大嫌い。
口だけが達者だが、運動神経は無く、戦闘を避ける。

・山口（やまぐち）　百子（ももこ）（女）
１７歳（三年）
普段は大人しいが、怒って、眼鏡を外すと豹変する。
カンフーとテコンドーと空手とカリを習っていた。

・松田（まつだ）　聖（ひじり）（女）

１７歳（二年）
溌剌とした明るい性格。運動神経抜群だが、眼鏡を外した百子ほどではない。
男子との絡みが多く、性格も男っぽくなった。

・ユゴー（男）
１８歳（三年）
在日フランス人。無口だが、ガッチリした体型と堂々とした出で立ち誰もが圧倒される。
ケンカに負けたことが無いが、初めて美園に惨敗した。
実は作家志望。

・折村（おりむら）　純（じゅん）（女）
１５歳（一年）
風紀委員だが、二度目の生徒会と騎士団の戦いの時、騎士団の仲間入りを果たした。
博にかなり気に入られている。

★★★枕研究部★★★

・クレイヴ（男）
１８歳（三年）
枕研部長。
アメリカと日本のハーフ。
おっとりとした性格で、万人に癒しを与える。

・北乃　くう（女）

１５歳（一年）
いつも眠たそうな顔をしていて、部長と似ておっとりしている。
校内を堂々とパジャマ姿で歩き、パジャマで授業を受けることもある。
あだ名は「ねむ子」や「くうちゃん」
追記：ミドリ星人の友人がいて、宇宙語も話せる。
話せる言語は。ミドリ語（火星の南半球の共通言語）とパルメス語（水星のパルメス共和国の言語）が話せる。
現在は水星のピシュメイヌ大陸にあるキュイミ連合国の古語であるポルニ語を勉強中。

★★★雛菊育成園★★★

・島崎（しまざき）　明里（あかり）（女）
１１歳（小５）
穏やかでまったりしたしゃべり方が特徴。
一番和也に可愛がられている。

・九重（ここのえ）　理沙（りさ）
１１歳（小５）
愛称は『くるりん』。頑固でわがままな性格なため、周囲の人をよく困らせる。
実は誰よりも和也が好き。

・濱名（はまな）　理緒（りお）
１１歳（小５）
明里、理沙と違ってしっかり者。
仕切るのが好き。

・前田（まえだ）　淳史（あつし）
１６歳（高１）
施設時代の和也の大親友。

★★★その他★★★

・近藤（こんどう）　彰造（しょうぞう）
１６歳（高１）
和也が入学当初に出会って気が合い、すぐに友達になった。
飄々としていて、考えてることが誰にも察しされない。

・矢口（やぐち）　真依（まい）
１５歳（高１）
和也を魅了した巨乳の持ち主。
清楚なイメージを持たれがちだが、実は小悪魔。
みんなからは「セクシーレーザー」と呼ばれている。

・桐生（きりゅう）　桐乃（きりの）
１２歳（中１）
和也の義理の妹。
そもそも桐生家が和也を引き取ったのは、桐乃が和也に惚れたから。
らしい。

新キャラがある程度加わったら、「キャラ紹介？」を作ります。

第四章～第五章に出てきたキャラ（前書き）

案外早めのパート2です。。

第四章～第五章に出てきたキャラ

★★★生徒会（レジスタンス）★★★

・広瀬（ひろせ）　小海（こうみ）　（女）
１６歳　（１年）
冬好きの少女。嫌われもので、誰にも相手にされない。Ｂ組の学級委員。
美園に憧れていて、生徒会に入ることが夢だった。

★★★雛菊育成園★★★

・アメリ　（女）
１１歳　（小５）
日本とフランスのハーフ。施設に新たに入ってきた。
暴走すると手がつけられなくなる。周囲のモノを気が済むまで破壊する。
何故か和也にはなついた。

★★★軽音楽部／五反田ランチタイム★★★

・凹沢（ぼこさわ）　唯（ゆい）（女）
１６歳（２年）
ＭＣネームは、ＢＹＵＩ（ビュイ）
表向きはドジで天然で可愛らしいが、実は全て演技。そして虚言癖。

裏向きは手のつけられないほど性格の悪い悪女。
澪にそれを指摘されたことで仲が悪くなる。
「ダイエット・スペクタクル・イマジネーション？、？」と「心の底からブレインコントロール」の作詞をした。
軽音部の夢を「２２４７年に火星の植民地で開催される『第５回マーズフェス』に参加すること」と語る。

・冬山（ふゆやま）　澪（みお）（女）
１７歳（２年）
ＭＣネームは、Ｍ．Ｉ．Ｏ．（エムアイオー）
口が悪く、普段はおとなしいが、汚い言葉を吐きかけることに快楽を感じている。
「オアシスがかれるほど騒ぎたい」と「ディスカウントショップ～イレブンハートｍａｒｋ２～」の作詞をした。

・土井中（どいなか）　律（りつ）（女）
１７歳（２年）
ＤＪネームは、ＩＢＡＲＡＧＩ（イバラギ）
男勝りなだらしない性格。ガサツで片付けが苦手。主に作曲をしてる。
憧れのＤＪは、ＤＪ　ＦＵＭＩＫＯ。
「日本刀ＶＳロングソード」と「ブラスバンド・シュプレヒコール」と「竹竿伝説」の作詞作曲をした。

・琴吸（ことすい）　紬（つむぎ）（女）
１８歳（３年）
ＭＣネームは、ＯＴＳＵＭＵ（オツム）
素顔は眉毛が無い。校内一のヤリマン、それにアゲマンと噂されて

いる。
ボロアパートにすんでる。
あだ名は「むぎちゃん」、「ビッチ先輩」、「ビッちゃん」。
「セ●クス・トゥ・ザ・フューチャー」と「セッ●スフレンド」と「オ●ニーマウンテン」の作詞をした。

・新宿（しんじゅく）　梓（あずさ）（女）
１５歳（１年）
ＭＣネームは、ＰＩＣＣＡＤＩＬＬＹ９（ピカデリーナイン）
不真面目で、悪ふざけやイタズラが大好き。背が低いのがコンプレックス。
「エイチエフ一フッ化水素酸を浴びて熱くなれ一」と「クラッシュチェアー」と「パスタ無しスパゲッティー」の作詞をした。

・御花畑（おはなばたけ）　さわ子
年齢不詳。
３年Ａ組の担任兼軽音部顧問。そして現役クラブＤＪ。学校には隠してある。ＤＪネームは、ＦＬＯＷＥＲ（フラワー）　ＧＡＲＤＥＮ（ガーデン）。
主に週末にスカラでＤＪをしてる。
いい加減な性格。唯、紬、澪、梓、律のネームを考えた。

★★★留学生★★★

・須藤　シュミルヌナ
火星の南半球にあるギュギ王国から日本に来た留学生。
愛称は「シュナちゃん」。

第1話　訪ねる1人の少女（前書き）

こっから恐らくほのぼのの始まりかと。
もともとそれを目指してましたから

第1話　訪ねる1人の少女

金曜日の放課後、俺は若干特別な思いでいつもよりも早く生徒会室に向かった。

「騎士団入団テスト！」とか言う無数に張り付けてある謎のポスターなどには目もくれず、俺は部室棟一階にある生徒会室の扉を開けた。

室内のカーテンと窓は全開で、穏やかな陽気の中、部屋の中心の机の上で会長が一人、携帯を耳にあてがい何やら通話していた。

「へぇ～ホントに？　どんな子？　へ～。う～ん。へ～。うん、じゃあね～」

俺が聞いたのはそれだけだ。通話を終えたのか、会長は携帯を閉じてスカートのポケットにしまう。

「あら和也、早いじゃない？　どうしたの？」

会長は不思議そうに言う。

「会長。一つだけ聞きたいことがあるんです！」

「何よ改まって。まさか辞めたいって言うんじゃないでしょうね？」

その思いもあるけど……。

それに聞きたいことがある、とは言ったが、言いたいことがあると

は言ってない。

会長が今、さらっと言ったことは、言いたいことの類いに当てはまる。

って。

「いえ違います」

「何？　もったいぶらないで早く言いなさいよ。そんな早く来たってことは、私にだけ聞きたいんでしょ？　早くしないとみんな来ちゃうわよ？」

さすが会長だ。何でも察する。

「前にくるりんから、会長は雛菊育成園の出身と聞いたんですが、本当ですか？」

俺がそう言うと会長は、感慨深げに腕を組んだ。

俺は答えにささやかな期待を寄せる。

「そうよ。それで？」

もうちょっとはぐらかすんじゃないかと思ったんだが……。なんか拍子抜けした。

でも、まだ聞きたいことがある。会長もそれをどうやら察しているようだ。

「いつ頃までいたんですか？」

「知りたい？」

ここで焦らしが入なんて。俺の予想とは違う。

「ええ、知りたいです」

俺は真剣な面持ちを作り言う。室内に謎の緊張感が漂う。

会長はまた腕を組んで今度は目を閉じる。そして音をたてて大きく息を吸った。すると、一気に笑顔になり、むふふ、と不気味というかマヌケな笑顔で下を出しながら「教えな～い」と俺を嘲笑うように言う。

相変わらず憎たらしい！

けど、ここで引き下がるわけにはいかない。

「何でですか？」

「う～ん。なんでも」

「は？」

「とにかく！　お・し・え・な・い！」

会長がそう叫んだ途端、会長からすればナイスタイミングだろう、ドアが開き栗山さんと小泉さんが入ってきた。

もしかして、いや、ホントにもしかして、会長かこのタイミングも見計らって、わざと焦らしたのか？

今までの出来事からするとそう考えざるおえない。

「和也くん。こんなに早く……。それに二人で何の話？」

小泉さんもグルのように見える。俺の思い過ごしかもしれないが。

「大した話じゃないわ。悩み相談みたいなものね」

会長がデタラメを言う。

「俺がいつ会長に悩み相談したっていうんですか」

「そうだよね。悩み相談なら占い部にするもんね！」

小泉さんはそう言いながら、特等席の窓際にある椅子へ向かい、腰を掛ける。

それにしても、枕研に占い部、それにさっき「合宿部」まで見た。この学校はホントに何でもあるなぁ……。

俺が呆れて床に胡座をかいた途端、今度は浜田さんが室内に入ってきた。

「こんにちは美園。こんにちはみんな」

礼儀正しく挨拶をする浜田さん。

それにつられて、というよりは礼儀を重んじて俺も栗山さんもペコリとお辞儀する。

そういえば、なんでこんな真面目そうな人が生徒会に入ったんだ？

会長は手紙を渡したって言ってたけど、あの手紙には何て書いてあるんだろう……。

「今日はどんなお仕事で私らを苦労させる気？　会長さん」

小泉さんが窓の外を見つめながら皮肉っぽく言う。

すると会長は「う～ん……」ともう一声掛けてほしげに小さく唸る。

よし、ここはみんなのかわりに俺が言ってやろう。

「どうしたんですか会長」

「それがね。一つ困ってることがあるのよ……」

柄にもなくテンションが低い会長。

「悩みなら占い部に相談しろって、小泉さんが今さっき言ってましたけど？」

俺はあえて冗談で食って掛かる。

「今私が言おうと思ったのに！」

なぜか小泉さんは悔しがる。

「ある女の子がね――」

俺らのことなど軽くシカトし、会長は話し始める。

「生徒会に入れてくれって言って、朝からずっと私に言ってくるのよ。それで困っててねえ……」

会長は呆れたように言う。

「いれてあげればいいんじゃないんですか？　メンバーを増やしたがってたじゃないですか」

「もう！　和也はホントに……和也だねぇ」

いや、意味が分からん。

どうやら俺の意見には誰も賛成してないようだ。まさにアウェーの空気だ。

俺がただならぬ空気を感じた途端、急に背後から大きなノックの音が聞こえて、体が反応する。

「は～い？」

会長が叫ぶ。

するとドアが開き、そこに立っていたのは一人の女子生徒だった。

茶髪ショートヘアーの少女。着崩した制服。謎の赤い首輪。見たこ

とあるぞ。こいつは確か同級生だ。というか同じクラスだ。

名前は確か……広瀬（ひろせ）　小海（こうみ）だ。

自己紹介の時に「スキー場のあのほどよく雪が積もってるちょうど良い感じの角度の斜面ががとけるほど恋したい！」って意味不明なことを高らかに叫んでたのを覚えてる。

ほどよく雪が積もってるちょうど良い感じの角度の斜面って『ゲレンデ』のことだろって思いながら聞いてたのも覚えてる。

第2話　ミソノ・アイデンティティー（前書き）

もともと、ほのぼのでハーレムを目指してたのに。
いつしか、クールでスマート路線へ行ってるという。。。
第一章からそうかも……。

第2話　ミソノ・アイデンティティー

「また来た……」

会長がめんどくさそうに眉を潜める。

「噂をすればってやつ」

小泉さんが笑う。

広瀬さんは堂々と仁王立ちをして、なんか偉そうに会長を見据える。

しばらく会長と広瀬さんの謎のにらみ合いが続く。

俺を含め他のメンバーは蚊帳の外からその数分間のにらめっこを見つめた。

「何か用かしら？」

痺れを切らした会長が沈黙を破り、少し優しい口調で帰れと言う。

広瀬さんは、ぶらっと下げてあった腕に力を入れ、ぎゅっと握りこぶしを作った。

そして、何をしだすのかと思えば、キレて頭を机に打ち付ける小学生のような勢いで、お辞儀をした。

「お願いです！　私を生徒会に入れてください！」

広瀬さんの涙声にも似た叫び声が室内に満遍なく響き渡る。

会長が煙たそうに言ってたのって広瀬さんのことか。

入れてやりゃいいのに。何で、何の取り柄も無い俺や、無口で何も喋んない栗山さんとか、いつ裏切るかも分からない埃みたいに漂ってる新聞部部長とか堅苦しくて後々厄介になりそうな風紀委員長を入れて、広瀬さんはダメなんだ？

会長の好みがわからん……。

「どんなことでもやります！」

お辞儀をしたままそう言う広瀬さん。

「う～ん……良いわよ？」

え！？　さっきあんなに煙たがってたのに良いのかよ！

「ほ、本当ですか！？」

広瀬さんは、顔を上げ、目を光らせながら会長の顔を見る。

「でも、その前にまずはテストを受けてもらうわ。ほら――」

そう言って会長は、机の上からおりると、スカートのポケットから丁寧に折り畳まれた紙を取り出した。

そして自らそれを開いて広瀬さんに見せる。

「それは……なんですか？」

「『入団テスト』よ！　あなたのために特別に用意したの。騎士団の連中も、見たでしょ？　ポスター。ぜーんぜん懲りずにメンバーを集めようとしてるから、私たちもそろそろピンチなのよホントのことを言うとね。だけど、ただ単に寄せ集めのメンバーってわけにはいかないの。ちゃんと面接をして能力を判断ないとね。ここにいる全員、テストを受けたのよ？」

嘘だ！　入団テストなんて一回も受けてないぞ！

会長が見せた紙を見てみると『生徒会新メンバー募集！』と色とりどりの字で書かれていた。

「是非！　受けます！」

騙されてますよ！　広瀬さん！

会長は広瀬さんに紙を渡すと「そこに書いてある時間に、ちゃんと来てね」と広瀬さんを送り返す。

広瀬さんは騙されたとは知らずに嬉しそうに鼻歌をうたいながら部屋を出ていく。

それを確認すると、ドアを閉め、机の上に座り直すと「はぁ～～～」と大きくため息をついた。

「キョンキョン、あとは頼んだわよ」

「わかってるよ、美園」

いったい今度は何を企んでるんだ会長たちは。また俺だけが仲間はずれになる展開は勘弁だ！

ここはハッキリ言っておこう。

「今度はどういう作戦ですか？　今度こそは俺にも教えてくださいよ！」

「知りたい？」

会長は表情を一つ変えずに無意味な焦らしを入れる。

「はひ……」

あえて俺は声を掠める。『はい』と言ったつもりだ。

「何よ、その感じ。もう作戦には和也は入れてあ～げないっ。ロリシュはロリシュらしく幼女と戯れてれば良いのよ！　親が居ない孤児の弱味に漬け込んで内面から自分のものにしようとしてる非人道的な変態尿道野郎！　ポ●ノでも撮る気なの？」

おい！　えらい誤解を催促させやがって！

「全部デタラメだ！」

思わず大声が出る。

すると何故か会長が「ムフフフ～」と不気味に笑いだした。

しかし、他のメンバーは完全に引いてる。
何にって俺に。
「冗談よ冗談！　怒らないでね？」
そう言って会長は可愛らしく顔を斜めに傾けながら顔の前で合掌する。
「美園は和也のこと大好きだからね～」
不意に小泉さんがそんなことを言い出す。
「シー！　もう！　キョンキョンは口が軽いんだから！　次言ったら顔面ガムテープでグルグル巻きだからねっ！」
若干焦った様子で小泉さんを制する会長。
小泉さんのいってることが本気なら……女子に好かれるのはありがたいが、会長は嫌だ。それに俺はまだ矢口さんを諦めてない！
それ以前に、好きならあんな悪口言わないでもらいたいね！　冗談でも。
「ちょっとすみません！」
急に浜田さんの張った声が室内に響いた。
「どうしたの？　伊代ちゃん」

「この教室に、椅子は一つしか無いのですか？　立ってるのが辛いです。床は汚れて私にはとても座ることはできません」

ロボットのようだが、ごもっともな意見だ。

「う～んそうね……。じゃあ、枕研に借りてこようかしら」

またあそこか。

第3話　眠たいパジャマと16歳の再会

俺は一人、また隣の枕研へと向かった。

ドアを軽くノックしながら、「すみませ～ん」と言う。

……。誰も出てこないなぁ～……。

もう一度ノックする。

……。それでも誰も出ない。いないのか？

「勝手に入っちゃいなよ」

びっくりした！

急に背後から声がするから振り返れば、そこには小泉さんがいた。

「そんなチンケなノックじゃ起きないよ？」

「起きない、ってどういう意味ですか？」

「枕研の活動内容って、大体寝ることだからね」

なんじゃそりゃ。だったら帰ればいいのに！

「合宿部、では」

「ないよ？　枕研と合宿部は似てるようで違うからね。枕研は、泊

まらないの。合宿部は泊まる。ほら、全然違うでしょ？」

ほら、って言われても……。俺にはその違いが今一理解できないんだけど……。

「今は、みんな寝てるから、勝手に入っていいのよ？」

平然とそう言う小泉さん。

「でも、ちょっと気が引けるなぁ……」

「なんなの……？　家にキ●タマ置き忘れてきたの？　男でしょうが！」

うぁ！

っていうか、小泉さんは呆れながらそう言うけど、性別の問題じゃないし。

「もう！」

小泉さんは業を煮やしたのか、俺を差し置いて枕研のドアの前に立った。

「よ～く見てなさいよ。一回しか見せないからね！」

そう意気込むと小泉さんは、気合いを入れる不気味な雄叫びとか、戦隊ヒーローみたいな見世物のファイティングポーズをとるわけでもなく、公園のチビッ子が親御の前でいきなり「チ●コ！」と叫ぶようなノリで、枕研のドアを蹴り飛ばした！

大きな音を立てて開くドアの向こうに広がった光景に俺は唖然とした。

十畳ぐらいの畳が敷かれた部屋のちょうど真ん中に布団が敷かれてあった。周囲の広々としたスペースには数個の机と椅子が並べられてあった。

しかもその布団で、一人の女子生徒が寝息を立てて寝ていた。

黒いショートボブ、への字に閉じたキュートな口、剥がれた掛け布団が見せるピンクのパジャマ姿、大きく開いた胸元。

その寝姿は言い様の無くすごい無防備で、それに部室の鍵を閉めないのもあって、寝込みを襲うのは簡単そうだ。

この女子生徒とは、前にもここで会ったっけな。名前は知らないけど。

こいつのパジャマ姿はもう慣れた。普通に構内をパジャマで歩いてるからなぁ～……。

「熟睡ね」

小泉さんが寝姿を見ながら言う。

「そうですね……」

そうとしか言いようが無い。

そう言えば、前はクレイヴとかいう部長がいた気がしたんだが？
今日は不在のようだ。

「それじゃ私は用事があるから。じゃあねっ。女の子を泣かすんじゃないわよ～」

そう言って小泉さんはその場を後にする。

「ちょっ」

俺は思わず小泉さんに手を伸ばした。

かなり気まずいからねこの状況。

だけど小泉さんは会長とは違って察する能力なんてないようで、そそくさと棟を出ていった。

さて……どうする？　会長も待たせてるんだ。

「し、失礼しま～す……」

俺は上履きを脱いで恐る恐る室内の畳に足を乗せる。

「すー……すー……」

寝息を立てるパジャマ少女の横を俺は忍び足で、通過し、俺は椅子たちが待つ楽園へ向かう。

まるで集中力ゲームだ。

それにしてもこの部屋、良い香りがする。何の匂いだ？　なんか、甘酸っぱい、レモンみたいだ……。

そんなことを考えながら、俺は椅子の背凭れに手をかける。椅子を二つ同時に持ち、出入り口へ向かう。もちろん忍び足で。

起きるなよ～……。

なんとか、俺は廊下まで辿り着き、ゆっくりドアを閉めて、生徒会室へ戻る。

「なかなかの遅さね。ねむ子ちゃんと一発ヤってきたの？」

何の話だ。

「ねむ子って？」

俺は椅子を置きながら言う。

「枕研の部員よ。北乃くうちゃん。みんなは『ねむ子』って読んでるわ。有名でしょ？　パジャマで授業受けてる子よ」

ああ、パジャマ少女のことか。

「あれは、アリなんですか？」

「ナシだったらとっくに制服に着替えてるわよ」

まぁそうでしょうね。

俺が持ってきた椅子は、すでに浜田さんと栗山さんが占拠していた。

まぁ仕方ないよね。そのために持ってきたんだから。俺は当分床でいいや。

「あともう一つ椅子が必要みたいね」

会長がそう言う。もしかして俺のやつか？

「俺は良いです」

「何言ってるの？　私の椅子よ」

「いつも机の上に座ってるじゃないですか」

偉そうにね。

「持ってきなさい」

「またですか？」

「聞こえなかったの？」

はぁ～……。

めんどくさい奴だ。自分で持ってくればいいのに。

俺はまた枕研の部室へ向かった。

第４話　クウ（前書き）

こういうラブコメみたいな展開ってみんなよく考えられるね。
俺にはこれが限界だ。。。

第4話　クウ

「失礼しま～す……」

俺はまた、恐る恐る枕研の部室のドア開けて、こっそり忍び込む。

さて、第二ラウンドの始まりだ。

寝息を立てるパジャマ少女こと北乃さんの横を通り、椅子がある室内の隅っこへ向かう……。

起きるなよ～……。

足音を立てないようにこっそりと……。

まるで通学路の番犬との駆け引きだ。

俺は北乃さんに背を向ける……。

「本日はおはようございますぅ～」

げ！

背後から高い声がした！　それに合わせて俺は魔法をかけられたように動きが止まる。そして胸の鼓動が高まる。

北乃さんが起きたようだ。と、とりあえず挨拶しとこう……。

「おはよ――うぎゃ！」

俺の体は何かが飛び付いてきて仰向けに倒れてしまう。それが何かは一瞬の出来事で、確認なんてできなかった。

畳の上に倒れた俺は急いでそれを確認する。

……北乃さんだ。

どうやら北乃さんが俺に抱きついてきたようだ。

柔らかい感覚が全身を駆け巡ると同時に鳥肌が立つ。

「本日はおはようございますぅ……」

どうやら北乃さんは寝ぼけているようだ。目も開いてない……。

俺は急いで北乃さんを引き離す。

しかし、北乃さんは何故か抵抗する。なかなか離れない。むしろ頬擦りをしてくる。

この状況じゃちっとも嬉しくないし、新聞部に見られたら大変だ！

『和也、浮気発覚！』なんて見出しで、『一年Ｂ組の桐生和也は金曜日、枕研の部室でパジャマ姿で有名な『ねむ子』こと北乃くうと校内畳セッ●スで絶頂に』なんて無いこと書かれちゃう！

俺には矢口真依さんがいるのに！

「本日はおはようございますぅ～」

相変わらずそれしか言わずに離れない北乃さん。

駆け引きは数分に及んだ。

全然離れない！

と思った途端、北乃さんが目を開けた。そしてそのまま俺の顔を見た。

「本日はおはようございます……」

小声で呟くようにというか様子をうかがうように俺を見つめる北乃さん。

「お、おはようございます！」

慌てて俺は返事をする。

「本日はおはようございます……」

『北乃くう』という名の巨大レコーダーには「本日はおはようございます」ってワンパターンの台詞が何パターンも録音されてるようだ。

「あ、あの、き、北乃、さん？」

今の状況を説明すると……俺が尻餅をついてM字開脚で座り込んでるところに、北乃さんが俺の両肩に両腕をかけて俺のうなじに手を回して、俺の腰に両足でしがみついてる。

北乃さんの暖かい吐息が俺の顔にかかる。
新聞部に嘘かかれても言い逃れができなくなる！
「くうちゃんです」
北乃さんが俺のまだ眠そうな目をじっと見つめながら掴み所の無い雲のようなおっとりとした声で言う。
「え？」
「くうちゃんです」
「く、くう、ちゃん……？」
「はい？」
「は、離れてくれない、かな？」
「くうちゃんは嫌です」
日本人、だよな？
「いや、まずいんだって！」
俺は無理矢理北乃さんの肩をつかんで引き離す。
「くうちゃんは離れません！」

ちょっと！

北乃さんは、叫ぶと同時に俺を強く抱き寄せて、何故か俺の首筋に噛みついた。

生暖かい、唾液と舌と歯の感触を感じた。すごいくすぐったい！

びっくりした～。食い千切られるかと思った……。

さて、この牙無しのエセヴァンパイアをこれからどうするか……。

一刻も早く椅子をもってこっから立ち去らないと。

しばらくすると、北乃さんの甘噛みはおさまり、その跡地である首筋がスースーして少し気持ち悪い。

「枕研に入りませんか？　和也っち」

真正面を向いて言う北乃さん。

和也っちって、ていうか、俺の名前知ってたのか？　まぁ、無理もないか……。色々あったもんな。

「ま、まず離れてくれない？」

「返事が先です」

「いやぁ……俺は生徒会で精一杯なんです」

「だいじょです。会長さんがついてますぅ……ふわぁ～」

眠たそうにあくび混じりに言う北乃さん。あれ？　前に来たとき、こんなおっとりしてたっけ。もっと冷たい感じじゃなかったっけ？

「会長がついてるって？」

「会長さんは私と和也を二人きりにしてくれた恋のキューピットなのですぅ」

「え？」

まさか、俺はまた会長の作戦にハマったのか？

待てよ……。

今思えば、浜田さんの椅子が欲しい発言も、会長が椅子を取りに行かせたのも、部長がここにいないのも枕研に俺を勧誘の機会を与える作戦だったのか？

だとしたら回りくどくないか？

「入ってくださあい！」

「入らないよ！」

「じゃあ離れまてん！」

困る！

どうしよう……。

ふと、北乃さんの顔を見てみると、目に涙を浮かべていた。今にも声を立てて泣き出しそうな勢いだ。

小泉さんがさっき言ってたのはこれのことだったのか！

入るか入らないか、決断しろ！　ってか！

汚い連中だ。

第5話　レジスタンス

「入ってください……」

北乃さんは鼻をすすり、目から涙が頬を伝って畳に滴り落ちた。ホントに悲しそうな顔をする。

もう！

「わ、わかったよ！」

「ホントですか！」

北乃さんは目を輝かして俺を見る。

「だから離れて！」

北乃さんはようやく俺から離れてくれた。そして、パジャマの胸ポケットから一枚の紙切れを取り出して無言で俺に渡してきた。

見てみるとそれは入部届だった。さすが会長が仕込んだだけある。準備が良い。

「月曜までに書いて顧問に届けるよ……」

ていうか枕研の顧問って誰なんだ？

「クレイヴさんに届けてくださあい。顧問はいないのですぅ」

納得。寝るだけの部活に顧問がつかないのは。

「じ、じゃあ、俺はこれで……」

俺は当初の目的だった椅子を持って、そそくさと部室を後にする。

「絶対に来てね！」

そう言って北乃さんは俺を見送る。

ドアを閉めてすぐ隣の生徒会室に大慌てで向かおうとした。

しかし、「今ごろ出てきたの？　椅子一つだけでいいの？」と背後から声がした。それは正真正銘、小泉さんの声だった。

俺はシカトして生徒会室へ向かう。生憎、小泉さんとも目的地が同じなので、シカトしたことについてしつこく聞かれた。

でも無視無視。

生徒会室のドアを開けると、一番最初に会長の膨れっ面が見えた。

「遅い！　何してたのよ！」

会長が俺に向かって怒鳴る。俺にはそれが耳鳴りに聞こえた。

いや、何って言われても……。

「それより美園。どうすんの？」

小泉さんがちょうど良いタイミングで会長に、恐らく広瀬さんのことを聞く。

「そうね。はぁ～……なんでこうもめんどくさいのかしら……」

会長は染々とそう言いながらも、喋り始める。

「一応みんなに話すわね。今回の作戦はこうよ、小海ちゃんを騎士団のメンバーに入れるの。あえてね。それにもう手は打ってあるわ。小海ちゃんに騎士団のオーディションを受けさせるの」

いきなり始まったけど、騎士団との戦いのことか。というか今回は俺にも作戦を教えてくれるのか！

でも……

「受からなかったらどうするんですか？」

俺はストレートな疑問を投げ掛ける。

「残念だけど軽く作戦失敗ね……。その時は別の方法を考えるわ」

まぁ、会長には力ずくという最終手段があるからね……。

「今のところ二対〇だから、負けてもそんなに悔しくないしね」

そう言って小泉さんが笑う。

「何言ってるのよ！　負けは悔しいわ！　すっごくね！　むしゃくしゃするし、面白くもない！」

会長が叫ぶ。

「美園は小さい頃から負けず嫌いだからね……」

浜田さんが宥めるように言う。

というか、え？　会長と浜田さんってもしかして幼馴染みだったの？

「ちょっと伊代ちゃんってば！　シー！」

会長は人差し指を唇にあてる。

「あ！　ごめんなさい……」

何故か謝る浜田さん。

そして何故か小泉さんが笑い出す。

この三人、絶対何か隠してるな。居心地が悪い。栗山さんも俺と同じ気持ちなのか、笑顔が無い。――って元々か……。

「気を付けてよね……！」

小声で言う会長。

「それより、ねえみんな！」

すぐに話を切り替える会長。回転が早い。会長が飲食店とか出したら、五分で出されそうだ。

それ以前に会長の店なんて誰も来ないよな……。

全員が会長に注目すると、会長は喋り始める。

「この生徒会も、名前、つけない？」

「名前？」

みんなを代表して俺が答える。

「そうよ？　でも『東葦の騎士団』なんてダサい名前はノーサンキューね」

「う～ん……」

小泉さんが興味を持ったのか考え込む。

前々から思ってたけど、これ生徒会じゃなくて部活だよな？　完全に。

俺に部活二つ掛け持たせて、会長はいったい何を企んでるんだ？

今度はどんな手で騎士団を圧倒する気なんだろう。いつしか会長に期待してるし……。

頭が良いのか、バカなのか、それさえも考える余地を与えないパワフルな会長にはある意味憧れるよ……。

「――レジスタンス、なんてどう？」

小泉さんが提案する。

たしか、『抵抗』って意味だよな？　まさにこの生徒会にぴったりじゃん！

「それ良い！　悪い奴をやっつける『レジスタンス』！　私たちにぴったりじゃない！　決まり！」

何か色々間違ってる気がするし。客観的に見ると、向こうがヒーローでこっちが悪だと思うんだよなぁ。

「今作戦から、我々は『レジスタンス』って名前で活動するわ！　新聞部、記事まかせたわよ！　もし新名発表後も『生徒会』とか呼ぶような拭ききれてない汚いア●ルがいたらソイツには振り向かなくて良いわよ！」

女の子の言うことじゃない！

「じゃあ、今日はこれで解散！」

会長は間髪入れずに叫ぶ。

全く忙しい人だ。

第6話　ハプニング（前書き）

強烈なキャラが出ます。。。。

第6話　ハプニング

次の日、昨日は金曜、なら今日は？　もちろん土曜日だ。

平日という名の広い砂漠の中にひっそりと蜃気楼で人々を誘うオアシスに行き着いても、ふと気づいた頃にはもう干上がってるんだ。そんな幻想にも似た現実、この高低さに酔ってしまうと、当日に主役の代役を言い渡された冴えない劇団員みたいに熱も冷めないまま舞台上であたふたしてしまう。

でも俺にはそんなの関係ないね！

とにかく俺はオアシスもとい休日を楽しみたいんだ。

土曜日といったら俺が行く場所はただ一つ、そう、雛菊育成園だ。

いつもより少し遅い時間に起きて、やることやってから、妹の桐乃をあしらい、朝十時、自転車に乗り、一人隣町へ向かう。

いつもの幹線道路の片隅を流されるまま自転車を漕ぎ、駅から近いガード下の小さな脇道へ吸い込まれるように進入し、住宅街の路地に忍者のように紛れた緑色の門を確認し、その隣の小さな駐輪場に自転車をとめる。

自転車からおり、さっさと中に入ろうと緑色の門へ向かおうとした時、来た道から黒いリムジンがゆっくりとしたスピードで走ってきた。

珍しいな。もしかして、政治家とか有名人が乗ってるのかな？

俺はリムジンを見送ろうとしたが、そのリムジンは何故か俺の前で停車した。

そして後部座席の車窓が開いた。

やばい。なんか緊張する。大統領だったらどうしよう！

「ハぁ～イ、元気してる？」

遊び心をによわせた高い声が、馴れ馴れしく俺に声を掛けてきた。

この声、聞いたことあるぞ……。

車内なのにストローハット、垂れ下がった水色の長い髪、洒落たサングラスをずらしながら俺の顔をうかがう純白のドレスを着た年上の女性、というか女子……

「もしかして、会長……ですか？」

「なあに？　その宇宙人を目撃しちゃったような顔は。いつも会ってるじゃない」

そんな舞踏会みたいな格好をした会長には会ったことはないよ。

「なにしてるんですか、こんなところで」

「その質問は野暮よ」

そう言うと、会長は自分で車のドアを開けて俺に近寄る。

ストローハットとサングラスをとり、車内へ雑に放り投げると会長は年老いた運転手に、ジェスチャーで合図すると、運転手はめんどくさそうに微笑んで、リムジンは走り去っていった。

会長は何も言わずに施設の門を開け、俺よりさきに中に入った。

慌てて俺も会長に続く。

会長も、施設が名残惜しいのか？　俺みたいに定期的に来てるのかな？

若干ワクワクした様子でレモンの家の呼鈴を押して、待つ。

家の中から何やらドタバタと暴れまわるような騒音が聞こえ、すぐに玄関のドアが開いた。

出たのは理緒だった。

理緒は、すこし焦っている様子で、息を切らしていた。

「いったい何事なの？」

会長が訊ねる。

「前に電話で言った」

「アメリちゃんね……」

くい気味に会長が言う。

アメリちゃん？　誰だそれ。

「そんなことより大変なの！」

理緒がもどかしげに叫ぶ。

「さあて品定めと行きますか……」

そう言って会長が家に上がり込む。

アメリちゃんが気にたって俺も上がる。

「しゃーコラーー！」

リビングへ続く廊下で、何やら甲高い叫び声が聞こえた。同時に物が崩れ落ちる大きな音も聞こえる。

いったい何事か……。

そう思った時、リビングのドアに嵌め込まれてる長方形の曇りガラスの向こうに人影が見えた。

その影はどんどん大きくなり、何かがドアに近づいてるのがすぐにわかった。

「――ちょっ待って！」

理緒が泣きそうな声で叫んだ。

その次の瞬間だった！

耳をつんざくような大きくて高い音が廊下に響いた。

俺はその正体をちゃんとこの目で確認した。

ドアのガラスを突き破って、一人の背の低い、小学生ぐらいの金髪で長い髪の女の子が廊下に飛び出てきた！

ガラスの破片は飛び散り、俺と会長と理緒は反射神経でそれをかわす。

金髪の女の子は、頭から飛び込んだのか額から血を流しながらも、廊下に落ちた破片をものともせず思いっきり踏みつけ、痛みも出血もものともせず、まるで花畑でも駆け回ってるんじゃないかってぐらいに走ってくる。ただ顔はかなりのしかめっ面だ。

金髪少女は何か叫びながら目にも止まらぬ早さで廊下を駆け抜けると、突き当たりで思いっきり身体を打ち付けると「うぎゃ！」と声を上げて倒れ込み、動かなくなった。

「こ、これは面白いわね……」

さすがの会長も苦笑いだ。

アーメン――。

第7話　ダイ・ハード（前書き）

とんだ超人が出ちゃいましたねｗ

第7話　ダイ・ハード

「――ドレスに血がついたじゃない」

会長が呟く。

そんなの着てくるからだよ！　つーか何でドレスなんか着てきたんだ会長は。

それにしても何なんだアレは。ブルドーザーが突っ込んできたのかと思った。

「大丈夫……？」

啜り泣く理緒を慰める会長。

俺は床に散らばった破片に気を付けながら、ドアは開けずに割れたガラスの穴からリビングへ入った。

「ひどいなこりゃ……」

思わず声が漏れる。無理もない……。

食卓の大きなテーブルは虫の死体みたいに引っくり返り、辺りには割れた皿などが散乱していて、それを施設の職員が片付けてる。

二つの部屋の合間にあった大きな本棚は倒れて、辺りに本が散乱した状態になってる。

壁には至るところに穴がいていて、まるで蜂の巣だ。

庭に通じるスライドドアの窓は跡形無く全て割られていて、その窓際のソファーが置かれた小さな団欒スペースにあるレモンの家唯一の大型液晶テレビは、何故か真っ二つで一つは、右側は俺の目の前に転がっていた。

もう片方はと思い、リビングを恐る恐る歩きながら見渡し、探していると何やらドアの開いたままの部屋の中から泣き叫ぶ大声が聞こえた。

俺は警戒しながらその部屋へ向かう。

「テレビぃーー！」

部屋に入ると、明里がテレビの左側を抱き抱えながら泣き叫んでいた。そしてくるりんがそれを慰めようとしているのか明里を撫でていた。

「和也くん」

くるりんが俺に気づいて、俺の方を向いた。

「いったい何が起こったんだ？　まるで戦場だ。こんな悲惨な光景……」

「理緒のバカがアメリちゃんを怒らせたの！」

キレ気味に明里の頭を撫でながら言うくるりん。

「アメリって、さっき凄まじい勢いで突っ込んできた金髪少女か…
…いったい何者なんだ？　アイツは」

「つい昨日、ここに入ってきたんだ。すごく大人しい子なんだけど、怒ると嘘みたいに豹変しちゃうの。そのせいで、親に捨てられたんだって」

なるほどね……。凄すぎて何も言えないよ……。これから雛菊はどうなっていくのやら。

「今どうなってる？　アメリちゃん」

くるりんが心配そうに訊ねてくる。

「気絶したのか死んだのか……とにかく意識を失ってるみたい。壁に思いっきりぶつかって奇声上げてね」

俺がそう言うと、くるりんはホッと肩を撫で下ろした。

その傍らで相変わらず「テレビぃーー」と悲痛に泣き叫ぶ明里。相当テレビが好きなんだなぁ。

「和也くん、おはよう……」

ふと背後から声が聞こえた。

振り返ると、施設の職員である本田美香子さんだ。この人には俺もお世話になった。

「おはようございます」

他人行儀に挨拶をする俺。

「明里ちゃん、理沙ちゃん、ちょっと私、これからアメリちゃんを病院に送り届けてくるね」

本田さんが二人に言った。

「あ、アメリちゃん!?」

不意にくるりんがリビングの方を見て叫ぶ。

その言葉に俺と本田さんが振り返る。

そこには額から出血して顔面が血だらけの青い瞳の少女、噂のアメリが立っていた！　もう目覚めたのか！

アメリに寄り添うように、会長と目元の赤い理緒が立っている。

「病院なんていかないもん。アメリピンピンしてる！」

寝ぼけたようなふわふわした口調でそう言うアメリ。なんて屈強なタフガールなんだ！

「ダメ！　ほら、足とか、頭とか痛いでしょ？」

本田さんがしゃがんでアメリの両二の腕をつかんで言う。

「そんなことより――お腹空いた！」

その言葉にその場の全員が呆れ返った……。

しかし、一人、会長だ。会長は嬉しそうに携帯片手に何やらメールを打ってるようだ。事の深刻さを理解していないようだ。

「片付けが最初よ！」

本田さんが怒鳴ると、アメリはしょぼんとうなだれてしまった。しかし反省はしていないようだ。

アメリは足の裏に刺さったガラスの破片を平然と痛がる様子など無く抜き取って雑にその場に捨てた。

「片付けなら、俺も手伝いますよ」

「ありがとう和也くん」

とは言っても、あんな戦場をどう片付けるのか……。

そう思った時、不意に視線を感じた。

その視線を逆探知すると、アメリの青眼（ブルーアイズ）に辿り着く。

目が合うと、アメリは俺にニコッと笑いかけた。

なんて可愛らしい無邪気な笑顔だ。これがさっきのあのしかめっ面になんて何も知らなかったら絶対に結び付かない。

こんな不思議な女の子、会長以来だな……。

会長よりも強烈なのは間違いない。

「これは年末の大掃除より大変ね……」

そう呟きながらリビングに戻る本田さん。俺もそれについていく。

斯くして俺たちの大掃除が始まった――。

第8話　生徒会長のスピーチ（前書き）

アメリちゃんは我ながら可愛い。。。

第8話　生徒会長のスピーチ

大掃除が終わると、俺と会長とくるりんと明里と理緒、そしてアメリは、くるりんと明里の部屋で一休みをすることになった。

会長はくるりんに対する嫌味のようにくるりんの勉強机の椅子に座る。理緒は絨毯の床に、明里、くるりん、アメリは二段ベッドの一階で寛ぐ。

掃除中、アメリは何故か俺にすっごくなついてきて、くっついて離れようとしなかった。

今も俺がアメリを膝枕してやっていて、アメリはすっごく嬉しそうに下から俺の顔を見ている。可愛いもんだ。

俺は作り笑いでアメリを撫でる。なぜならコイツの機嫌を損ねると次こそはレモンの家が倒壊する、と大暴れを目撃した奴らに忠告されたんだ。

そんなことより、門で会長に会った時から気になってたことがある。

「会長って、かなりの金持ちに引き取られたんですね」

「そうよ」

会長が即座に反応する。

「なんかすごいお城みたいなところに住んでそう……」

「そう見える？　正解よ。和也の家の数十倍の敷地面積はあるわね」
その場の全員が関心する。しかし、くるりんだけは不満そうだ。
「そんな金持ちだったら、もっとすごいことできるんじゃないんですか？」
犬を可愛がるようにアメリの頭を撫でながら言ったこれが本題だ。
「すごいこと？」
会長が首をかしげる。
「なんで騎士団との対決の時、あんなネチネチした作戦立てるんですか？　金にものを言わせれば」
「ナンセンスよ。それは」
会長が食い気味に人差し指を横に振りながら言う。
そして、よくぞ聞いてくれた！　と言わんばかりに語り出す。
「教えてあげる。私は、常にクールで、そしてスマートでいたいの。それに引き取ってもらった分際で、わがままも言えないしね。それに私そういうの大嫌いなの。金持ちが金にものを言わせて好き勝手するのって。私は、自分が作った作戦で相手を打ち負かしたいの！　私の武器は家柄じゃない！　とにかく私は家族には迷惑かけないの！」
珍しいな。会長がこんな熱弁するなんて。

明里や理緒は会長に謎の拍手をおくる。

だが、くるりんは「――よく言うよ」と不満げに呟く。同感だ。

会長は立ち上がるとくるりんに近づき、仰け反るくるりんの頭を雑に無理矢理撫でると「あなたにも解るわよ。そのうちね」と怖めの微笑みを雑に叩き込む。

「あれ？」

不意に、理緒が開いたままのドアの向こうに何か見つけたのか覗き込む。

「どうした？」

「今外に誰か知らない人がいた……」

幽霊を見たかのように不安げな理緒。

それと同時に会長の携帯のバイブレーションが鳴った。

「理緒ちゃん、安心して……私の知り合いだから……」

そう言って会長は部屋を出ていって、玄関へと向かっていった。

会長の知り合い？　俺も知ってる人なのかな？

数分すると、会長が戻ってきた。会長の横にもう一人誰かがいた。

俺はその姿を見て驚愕した！

「矢口さん？　どうしてここに！？」

「こんにちは和也くん。み、美園に呼ばれたの。楽しいよって」

会長と矢口さんって仲良しだったのか。上級生なのに呼び捨てだ。

でも少しぎこちない。

「真依、紹介するわ――」

そう言って会長は、それぞれの紹介を始める。

会長も矢口さんのことを呼び捨てだ。俺もまだ真依って呼んだこと無いのに！

「――そして、この子がアメリちゃん。昨日入ってきたね」

「へぇ～可愛い～」

矢口さんは目を輝かせながらアメリをみる。そして「よろしくアメリちゃん」と手を差し伸べる。

「よろしく真依ちゃん！」

アメリは起き上がり、二人は握手する。それを会長がうんうんと頷きながら見つめる。

「気を付けてよ真依。見たでしょリビングを。アメリちゃんを怒らせると酷い目みるわ」

矢口さんに注意を促す会長。酷い目どころではないけどね。

「ねえ、和也」

矢口さんと会長が話してる端でアメリが小声で俺の顔を見つめる。

「どうした？」

俺も小声で言う。

「アメリ眠いの……」

そう言うと問答無用でアメリは俺に強く抱きつくと、一瞬ですやすやと寝息を立てて寝てしまった。

こんなに可愛いのに残念だ。色々と。

第9話　アメリ（前書き）

映画「エイリアン」の話が出てくるけど、知識がない人にはすみません。。。

第9話　アメリ

アメリが寝てから、会長と矢口さんは、駅前のスイーツショップへ行くと言って出ていってしまった。

ドレスに血をつけたままね。

二人はいったい何しに来たんだ。特に矢口さん。

俺はというと、アメリが俺に抱きついて寝てしまったことで、理緒たちに、絶対にアメリから離れるな！　と強く言われ、身動きができたい。

寝姿はホントに可愛いのに……。

そうだ。寝姿で思い出した……。俺は月曜日、そう一週間で飛び抜けてダルい日だ。俺は『冥王曜日』と呼んでるが。

枕研に入部届を出さなきゃいけないのか。

まぁ、会長が主催したイベントだ、絶対に入らなきゃいけないんだろうけど……。

『恋のキューピッド』なんて言ってたな。もし、北乃さんに告白されたら、自称矢口さんの彼氏候補である俺はなんて答えよう？

う～ん……。悩みどころだなぁ～。会長はいったい何を企んでるのやら……。

俺はふとアメリの顔を見た。白くて透明感のある顔。

おかしい。

さっきまで額から出血していたはずなのに、何故か傷が治っている。

今度は足元を見る。白くてすらっとしていて綺麗な足だ。

膝を曲げていて、足の裏は膝枕をしている俺に向いている。

あんなにガラスの破片を踏んだのに、傷が嘘のように治っている。

ダイハードなタフガールなんてもんじゃないぞこりゃ！

コイツは一体何者なんだ！？

「おいくるりん！　見てみろよ」

俺はアメリを起こさないようにカッスカスの声でくるりんに、アメリの足の裏にお視線をおくり、見るように促す。

「傷が」

くるりんもかなり驚く。

「どう思う？」

俺とくるりんは顔を見合わせる。

理緒と明里も呼び込み、この奇跡を四人でまじまじと見つめる。

「人じゃないんじゃないの？」

くるりんがそんなことを言い出す。

「エイリアンだよ！」

理緒は真剣な表情でくるりんの意見に乗っかる。

「違うよ！　エイリアンはリプリーが全部殺したもん！」

テレビ好きの明里が意味不明なことを言い出す。

「なに言ってるの明里ちゃん！　エイリアンはまだ宇宙にうじゃうじゃいるよ！」

「じゃあ、アメリちゃんの親はリプリーを騙してエイリアンを地球に持って帰ろうとした会社の社員なの？」

くるりんが訊ねる。

「科学者が作った新種の人形エイリアンがアメリちゃんなのかも！　ニュー・ボーンはパンチでクイーンを粉砕したけど、アメリアンなら小指で触っただけで粉々なんだ！」

バカみたいに熱弁する理緒。

エイリアンなら俺も一匹知ってるよ。ミソノリアンというニュー・ウォーリアーの進化系をね。

そいつは生徒会長を装って地球を侵略しようとしてるんだ。困った話だろ。

そうこう思ってる間にくるりんと理緒の議論が激化していた。

だが、俺が一瞬だけ物思いに耽っただけで、どういう経緯で、どういう話になったか掴めない。

「――科学者を嘗めてるの？　調教するに決まってるじゃん！」

「でも反逆されてみんな死んだじゃん！」

「時間がかかるのよ！　エイリアンの優等生は人間でいうくるりんと同じで小さい脳なの！」

「そういうアンタはエイリアンそっくり。人の気持ちを考えないとことか、汚いとことか、ヨダレだらだらの寝顔とか！　寝相も悪いし！　あれを見たとき寒気がした！」

おいおい、罵り合いになってるじゃないか！

「二人ともやめろ！　アメリがエイリアンだったら血を浴びた会長は今ごろ全裸で内蔵とろとろで死んでる。それに……アメリが起きるだろ！」

俺は二人を制す。

しかしその途端だった。アメリが目を開けた！

その場は凍りつく。

「お、おはようアメリ……気分はどう？」

俺は恐る恐るアメリの機嫌を損なわないようにうかがう。

「もう朝？」

寝ぼけているアメリ。

「今は……夕方の四時だよ」

「ふ～ん……」

アメリは起き上がり、ベッドからおりて、部屋を出るとどこかへ歩いていってしまった。

「どこ行く気だろう……」

理緒がそう言ったと同時に、「和也くん！」とアメリが呼ぶ声が聞こえ、俺は慌ててアメリのもとへ向かう。

全く今日は忙しい。

リビングの真ん中のフローリングの上に立ちながら、腰に手をあてがいながら俺のことを見るアメリ。

「どうしたの？」

「アメリから離れないでって言ったでしょ？」

初耳だ。

「ほら、来て！」

そう言うとアメリは俺に背を向け、玄関に続く廊下へと歩いていった。

俺はアメリの奴隷なのか……。でも奴隷ごっこもすぐ終わりだ。

「ごめんアメリ」

「え？」

アメリが振り返る。

「もう、帰らなきゃ、いけないんだよね……」

頼むから怒らないで！

「やだ！！」

そう叫ぶと、アメリは俺に思いっきり抱きついてきた。背の低いアメリは俺の腹部に顔を埋める。

苦しい……。

「やだ、じゃなくて」

優しく言わないと大変なことになりそうだ。

「いやーー！」

さらにキツく締めてくるアメリが、可愛くて仕方ない……。

「じ、じゃあ、明日も来るからさ」

「いやだー！」

困った。まさに修羅場だ。

第１０話　コヨーテの日

冥王曜日が回ってきた。

土曜日、なんとかアメリを説得して午後八時という遅い時間に家に帰れた俺は、その次の日、日曜日も施設へ向かい、アメリの相手をした。

日曜日は奇跡的にアメリはキレなかった。

だけど帰れたのは土曜よりも遅い九時だ。笑える。

そんで平日最初の日、そう今日の昼休み、俺が向かっていたのは三年Ｃ組の教室。

理由はもちろん、クレイヴさんに入部届を出すためだ。

途中、騎士団の連中に会わないかひやひやしたが、奇跡的に会わずにすんだ。

Ｃ組の教室のドアから一番近い生徒を経由してクレイヴさんを呼んでもらう。

クレイヴさんは、ふわふわとした穏やかな微笑みを保ちながら俺のもとへやってきた。

「こんにちは」

俺はとりあえず挨拶する。

「おはよう。入部届は？」

穏やかな割に噛み合ってないし、結構唐突に来る人なんだな。

呆れながらも俺はクレイヴさんに入部届を渡す。

「確かに受け取ったよ……。これでくうも喜ぶね。今日は僕は行けないから、くうを頼んだよ」

「は、はい……」

前にあんなことがあったから、少し気が重い……。

新聞部という厄介者もいるし……。

クレイヴさんと別れ、俺は自分のクラスに戻る。

途中、騎士団が作ったポスターに目が行く。

『入団テストは土曜日に終了！　たいへん優秀な人材が集まりました！』

おいおい。また変なの兼敵が増えたのか……。

会長も大変だな。会長が悪いんだけどね。

そういえば、広瀬さんの生徒会役員オーディションってのはどうなったんだろう？

会長が好きそうな奴ではなかったけどね。

広瀬さんが女子で一番ガサツな奴だってことは、校内にしれわたってるからな。

それにしても生徒会役員選挙とかは重要なことだから朝会とかで取り上げられるけど、このオーディションは生徒会メンバーしか知らないんじゃないかってくらい内密に行われてる。

騎士団の団員募集のポスターは至るところで見たが、生徒会オーディションポスターって全く見かけないな……。

騎士団にでも剥がされたのかな？

放課後、俺は生徒会室へ行く思いではなく、枕研へ向かう思いでＢ組の教室を出る。

Ｃ組の北乃さんは、授業に参加せずにずっと部室で寝てることを聞いて、少し枕研に偏見を持ちながら、一階へ向かう。

だが階段の踊り場で、なにやらこそこそしてる小泉さんを見かけた。

「小泉さん？」

声をかけてみる。

「静かに！　シッシッどっか行って！　これから大仕事――大スクープなの！」

そう言って俺を追い払う小泉さん。新聞部も大変だな。

俺はいつものように渡り廊下側へ行こうとしたが、途中で気になる人物を発見した。

栗山さんと浜田さんだ。二人は、靴を完全に履き替え、正門に向かっていた。

あの二人、バックレる気か？

「……心配しないで。お使いに行かせただけよ」

ふと、横から声が聞こえたと思えば、会長がたっていた。

「何があったんですか」

俺が訊ねたのも束の間、会長は俺の手を強引に引いて、生徒会室へと引きずり込んだ。

そして椅子に座らされる。

「あ、あの……」

俺が訊ねようとした時、会長の携帯が鳴った。

「――もしもしキョンキョン？」

会長が出て、話始める

もしもし＋キョンキョン。なんか可愛らしいのかバカみたいなのか……。

「そう……」

それだけで会長は携帯を切ってポケットにしまう。

すると会長はいつものように机の上に座った。だけど今日は少し不機嫌そうだ。

「あの……会長、俺、枕研に」

「座っててよ！」

食い気味に叫ぶ会長。ホントに様子がおかしい。

恋人にでもフラれたのか？

なーんて、会長に恋人なんてできるわけないか……。

第11話　ミソノ・アルティメイタム（前書き）

ごめんなさいね。またこういう展開。

第11話　ミソノ・アルティメイタム

「会長、どうしたんですか？」

俺がそう訊ねると、会長は項垂れてしまった。

こんな会長、珍しい……。

そんな時、ふとドアをノックする音が静かな室内に響き渡った。

だが会長は出ようとしない。代わりに俺が出ようと立ち上がるが、その必要は無くドアは勝手に開いた。

すると二人の男女がズカズカと入ってきた。

騎士団の一木さんと山口さんだ。なぜまたここに？　やられに来たのか？

「こんにちは会長さん」

一木さんが会長に向かって言う。しかし反応は無い。

一木さんは今度は俺の方を向いた。

「そして、こんにちは桐生和也くん。東葦の騎士団、団長改め会長の一木　博だ」

え？　前に自己紹介したはずだけど？　忘れっぽいのかこのメガネは。

ぽかんとしていると、一木さんは不気味ににやける。

「まだわからないか？　君は忘れっぽいんだな。俺が恋のキューピッドさ。君と北乃くうのね」

「どういうこと、ですか？」

全然話が掴めない！

「今日この日、忌まわしき生徒会長、今田美園の作戦は我々の手によって潰されたのさ！」

一木さんが嬉しそうに叫ぶと、隣の山口さんが淡々と喋り始める。

「私たちは、北乃さんが和也くんのことが好きだって情報を入手したの。それで、私たちが北乃さんに恋のキューピッドになってあげるから、和也くんを枕研に誘いなさいと言ったの。枕研に和也くんを誘って、枕研は寝る部活だからその最中に我々は和也くんを捕らえるって作戦よ。二人だけの空間を作ってね。でもそれだけじゃ二人の空間なんて生まれないわよね。だって、普段和也くんは枕研なんて行かないものね？　だから私たちはこの情報をあえて新聞部に流したの。美園はまんまと和也くんを枕研に送り込んで、二人だけの空間を作ったみたいね」

「でも会長は俺たちを疑っていたんだ。それで会長が利用したのは、かねてから生徒会に入りたがっていた広瀬小海だ。会長は、我々が作ったポスターを真似て、『生徒会オーディション』という紙切れを作った。日時、集合場所は騎士団の入団テストと全く同じ。嬉しそうに生徒会室を出た広瀬に小泉が後から声を掛けたんだ。団員は

ちゃんと目撃していた。小泉が広瀬に騎士団へスパイとして入り込んで情報を盗んでこいと言ってるところはね」

あの時、広瀬さんが嬉しそうに出ていった後に会長が小泉さんに「頼んだわよ」って言ってたのは、このことだったのか！

「私たちはあえて小海ちゃんを騎士団に入れたわ。スパイにはスパイの仕事をさせてあげるためにね。私たちはデタラメな情報を彼女に教えて、それを美園に伝えさせたのよ。枕研での作戦は嘘で、北乃さんを捕らえたから、北乃さんからの呼び出しと見せかけて、和也くんを一年C組に呼び、隠れていた団員で一斉に和也くんを捕まえる。ってね。でも、それはただ単に厄介な新聞部部長を捕まえるための罠よ。会長はまんまと騙されて、今日歌をC組に送り込んだわ――」

小泉さんが、さっきこそこそしてたのって、このことか。

「――それで、こそこそしてる今日歌を聖ちゃんが捕まえたの。それを皮切りに生徒会の手先である新聞部を全員ね。そして、今日歌の携帯を使って美園にこう言ったの。『作戦成功！』とね」

これってもしかして、会長がおされてる？　会長は相変わらずうなだれている。

「何をしにいったかは知らないが、きっとお前の下らない作戦の一部だったんだろう、さっき出ていった風紀委員長と栗山夏子も捕獲済みだ」

またしてもいきなり生徒会と騎士団の作戦に巻き込まれたかと思えば、どうやら大ピンチのようだ……。

「か、会長……」

不安な俺は会長に声を掛けるが、やはり反応しない！

不意に、一木さんが指を鳴らした。

すると、室内が一気に暗くなったと思ったら、窓の外に謎の黒ずくめの集団が現れた！

その集団は窓ガラスを一気に割った。

大きな音を立てて破片が室内に飛び散る。会長に破片があたるが、会長はびくともせず項垂れている……。

そして、割れた窓から黒ずくめの集団が数十人体勢で押し寄せて、俺と会長を囲んだ！

これはホントにまずい気がする！

まるでアクション映画のクライマックスだ！

山口さんが会長に歩み寄る。

「わかったでしょ？　負けるってすっごく悔しい。『家柄』を使えばよかったのにね。……仲間を助けてほしかったら、とっとと降伏しなさい！　アンタの大好きな和也と一緒にね！」

山口さんの声が響き渡る。

なんとか言ってくれ会長！

第11話　ミソノ・アルティメイタム（後書き）

次章はこういうの無しにしようと思う。。。

第１２話　雛菊より愛をこめて（前書き）

また戦闘ですね。。。

第12話　雛菊より愛をこめて

なんか空しい感じするけど、よくよく考えてみれば、これが正義なんじゃないのかな？

俺たち生徒会はバカだったんだ。それをほっといた教師もね。

これを機に俺は普通のつまらない人間として高校生活を送るのか……。

もうちょっと生徒会で良い思い出ができてからでもよかったのになぁ……。

「ねえ和也、覚えてる……？　私が言った言葉」

会長が項垂れながら呟く。

「な、何をですか？」

「私たちを『生徒会』って呼ぶ連中はシカトして良いって……」

たしかにそんなこと言ってたな……。

だからずっと無言だったのか。

「は、はい」

「今さら何を言い出すのかと思えば……」

一木さんが呆れる。

ふと、廊下から、足音が聞こえてきた。

「ねえ、和也。騎士団が一つ、忘れてることがあること知ってる？」

「……へ？」

その言葉に、その場の全員が会長に注目する。

「紹介するわ、私の親友よ――」

会長がそう言った途端、生徒会室の出入り口の前に一人の少女が立った。

矢口さんだ。

「またせた？　美園」

「もう！　すっごい待ったんだから！」

会長はさっきまでの落ち込み具合が嘘だったかのようにきゃぴきゃぴ喋る。

もしかして、ずっと黙っていたのって、『生徒会』って呼んだからだけじゃなくて、矢口さんを待ってたからなのか？

「呆れた……。こんなアバズレだるだる巨乳ヴァージンに何ができるっていうの？」

山口さんが嘲笑う。

「……山口、さんでしたっけ？　紹介します。私の友達です――」

怒りを必死に堪える矢口さんの後ろから一人の背の低い少女が顔を出した。

金髪に青い目……あ、アメリ!?　なぜここに！

……なるほど。どうやら、この戦いも、会長の勝ちのようだ。

アメリは不機嫌そうに山口さんをはじめとした騎士団員を睨み付ける。

「実は、夏子と伊代ちゃんには、アメリちゃんを迎えに行かせたのよ。でも私は二人だけじゃ不安だから、保険を掛けたのよ。元々騎士団の手先で、今は完全にノーマークの真依をね。案の定、真依の出番ができたわ。不本意だけどね。……バカな騎士団がわざわざ施設まで来てこそこそ得た情報は、私が『金持ち』ってだけ。ホントに、笑えるわ！」

「だからどうだっていうの？」

山口さん……アーメン。

「私の勝ち、あんたらの負け、それだけ」

会長がそう言い終わった時、突然、部屋中に大きな金属音が響いた。

その途端、黒ずくめの騎士団の手先たちがざわめき、後ずさる。

俺はその正体を目撃していた。

初対面の時と全く同じ眉間にシワを寄せた厳つい表情でアメリが見せた一瞬のショーは、アメリの身体よりも大きな生徒会室の鉄のドアを根こそぎ取り外したかと思えば、それを持ち上げ、頭上で本を閉じるかのような軽さで一気に折り畳んでしまった。

ドアに嵌め込まれていたガラスの破片がアメリの頭に降り注いだが、アメリは顔色一つ変えないで、騎士団の連中を睨む。

俺はこの時はじめて、アメリがキレることに対する喜びを感じた。

「アメリちゃんの本領発揮ね――」

会長が笑みを浮かべながら呟く。

「な、なんなの……？」

山口さんがアメリに偏見な視線を向け、一木さんと共に後ずさる。

「しゃー！　コラー！」

アメリは気合いを入れるように大声で叫び、上体を少し仰け反らせた。

恐らくあの折り畳んだドアを投げるつもりなんだろうけど、明らかにこのまま投げたら机の上に座ってる会長にあたるって！

俺の心の叫びも空しく、アメリは一気に腰を引っ込ませ上体を前に

突き出し、その勢いで頭上のドアを会長目掛けて投げつけた！

しかし一瞬だけ見えたアメリがドアを投げつけるまでの会長の表情は、余裕そのものだった。

俺にはちゃんと見えた。

会長は、凄まじい勢いで飛んできたドアを完全に見切り、座ったまま股を開き、出来た隙間に両手をつけ腕を曲げると、勢いをつけ、ドアが直撃する、まさにその寸前に、両腕をバネにして宙に飛び上がった！

会長と机の狭間を猛スピードで通過するドアの上を会長は華麗に一回転した！

生徒会室のドアは真っ直ぐと脇目もふらず、黒ずくめの集団へ突っ込んだ。連中はかわすことなどできず無様な声を上げてまるでボウリングのピンのように弾け飛ぶ。

完全に怯んだ騎士団の手先を蔑ろに、会長は机の上に綺麗に両足で着地した。

かと思えば、間髪入れずにしゃがみこんだ。

「アメリちゃん！」

会長はそう叫ぶと、勢い良く、アメリのいる廊下の方へ飛び込んだ！

それを合図に、アメリは机の方へ突進する。

一気に会長とアメリの位置が逆転しようとしていた。

俺も身の危険を感じ、会長が着地した廊下に逃げる！

アメリは机の脚を片手で掴むと、それを狂気したように振り回し、次々と黒ずくめの騎士団の手先を打ち負かす。

全員が戦闘不能になったのを確認すると、廊下際の机を一木さんへ向かって机をぶん投げた！

机は一木さんにクリーンヒットし、一木さんは衝撃で吹っ飛ばされ、机と共に壁に身体を打ち付け、倒れ込んでしまった。

一木さんが打ち付けた壁には窪んで蜘蛛の巣状に亀裂が走っていた。

ホントに、アメリの本領発揮だ……。

「面白いじゃない……」

山口さんは驚きながらも、どこか余裕の表情でアメリを見据える。

そして、メガネを外した。

どうやら山口さんも本領発揮するようだ……。

「楽しませてくれそうね。尿色金髪おチビちゃん」

そう言って山口さんは右手に握った自分のメガネを思いっきり握り潰し、それを思いっきりアメリに投げつけた。

アメリは平然と首を曲げてそれをかわした。アメリの目は、輝きを失い、まるで狂気の殺人鬼のようだ。

山口さんと対角の壁にメガネが打ち付けられた小さな音を合図に、アメリが山口さんに向かって走り出す！

今回は会長も固唾をのんで見守っていた……。

第１３話　エイリアンＶＳプレデター（前書き）

次章はまかせて。。

第１３話　エイリアンＶＳプレデター

俺たちはアメリという名の金髪美少女小学生の皮を被ったエイリアンと、それを狩ろうとする山口百子もといプレデターの壮絶な死闘が今まさに始まろうとしていた！

「心配しなくてもアメリちゃんは大丈夫よ」

会長が俺の肩に手を置いて優しく呟く。

テレビを真っ二つにして、ドアを折り畳んだ奴なんだ。それに山口さんは会長にすら勝ってない。

大丈夫だろうけど、山口さんの謎の余裕さが気になる。

そうこう思ってる間にも二人の戦闘は激化する。

アメリの先制突進を流れるような滑らかな動きでかわして後ろに回り込んだ山口さんは、腰を落とし、左足を曲げ、バットを振るようにピンと伸ばした右足でアメリに足払いを決める！

アメリは仰向けに倒れこむ！

だが山口さんは間髪入れずすぐ立ち上がると倒れたアメリの顔面に大人げない強烈右ストレートを叩き込む！

アメリは暴走の達人とはいっても、武道の達人ではないんだよなぁ……。

山口さんは口元に笑みを浮かべながらアメリの顔面から拳を退ける。

アメリは気絶したのか目をつむり、顔は赤くなり、鼻血が出ている。

「観念した？　オシッコちゃん」

山口さんが嘲笑う。

すると、アメリはふと目を開ける。

そして瞬く間に立ち上がると、山口さんに掴みかかるが、平然とかわされ、回し蹴りを腹部に喰らい、吹っ飛ばされ、枕研側の壁に身体を強く打ち付けた。

手加減しない山口さんは、そのまま壁に凭れたアメリに殴りかかるが、すぐに起き上がったアメリは、突っ込んできた山口の腰に抱きつくと、そのまま半回転し、自分もろとも壁に豪快な体当たりをする。

お陰で壁には大きな穴が開き崩れ落ちる。

壁を突き抜けてしまった二人の姿は見えなくなり、俺と会長と矢口さんは、すぐに隣の枕研の部室へ向かう。

そしてすぐさまドアを開ける。

すると、呑気に布団で寝ている北乃さんの宙を舞い、また壁に身体を打ち付けた。

恐らく山口さんに投げ飛ばされたんだろう。

ボロボロの姿で項垂れるアメリ。もう見ていられない！

山口さんのやってることは非人道的だ！

しかし、アメリはやっぱりダイハードなタフガールだ。普通の奴ならもうとっくに死んでるような衝撃を受けても、また起き上がりふらつきながらも、山口さんへ力強く足を踏み込む！

だが、山口さんは向かってくるアメリの顎を蹴り上げる。アメリは垂直に宙に浮かぶ。

その隙も逃さず山口さんは、いや山口は、アメリの服を掴み、窓へ思いっきり投げ付けた！

大きな音を立てて割れた脆い窓ガラスの破片と共に外へ投げ出されるアメリ。

それでも北乃さんは起きない。

山口は、俺たちの方を振り返る。

「あれが生徒会の最終兵器なの？」

「……」

山口が『生徒会』と呼ぶからか、会長はシカトする。

「そんなことより――」

シカト決め込むかと思っていたが、会長が口を開く。

すると、山口の真下の畳が不自然に盛り上がる。異様な光景だ。

盛り上がった畳は、火山が噴火するように、一気に押し上げられ、山口は仰け反り、尻餅をつく。

畳の下から現れたのは、ガラスの破片が身体中に刺さって血だらけのアメリだった！

さすがタフガールだ。

山口はすぐに立ち上がろうとしていたが、立ち上がれなかった。

いつの間にか背後から山口に近寄っていた会長が、両腕を山口の脇の下から通し、山口の身体を押さえつけていた。

「離せ！」

焦りを見せる山口。

アメリは、畳の縁を掴むと、畳で、山口の顔にビンタを撃ち込んだ！

畳の角が山口の顔面を直撃し、山口は血を吐く。

アメリは畳を窓の外に投げ捨てると、姿勢を低くし、思いっきり足を踏み込み、山口の腹部目掛けて突進した！

その衝撃で会長もろとも吹っ飛び、コンクリートの壁を突き抜け、廊下へ飛び出した！

飛び散った瓦礫で煙が発生し、三人の姿が隠れてしまい、どんな状況かわからない。

俺と矢口さんは、固唾を呑んで煙がおさまるのを待つ。

会長とアメリは、そして生徒会、じゃなくてレジスタンスはいったいどうなってしまうんだ！？

第１４話　レジスタンスを忘れない（前書き）

第四章終了です。

第１４話　レジスタンスを忘れない

煙が引き、俺の目に映った光景は、まるで寝相の悪い女子生徒が集まった修学旅行の夜中のように、瓦礫に埋もれた三人の姿だった。

三人は死んだように動かない。

俺と矢口さんはそれを凝視する。言葉が出ない。

割れた窓ガラス、穴の空いた床、崩壊した壁二ヶ所、そして起きない北乃さん。

まるでディズニーランドだと言われて廃墟に連れてこられた時みたいな空しい気分だ。

連れてきた奴、そう、会長を恨みたいが、そこを連れてこられたのを機に廃墟にハマったように凄まじい光景を見れたことに関心してしまった。

「死んじゃった、のかな……？」

心配そうに呟く矢口さん。

「まさか。会長もアメリも、それに山口も、かなりのタフガールだし、壁突き破った程度じゃ死なないと思う」

「そう、だよね……」

とは言っても一向に起きる気配が無い。

会長がここで死んだら、レジスタンスも、束縛も無くなるんだろうけど、それはそれで寂しい。

ふと、背後から無数の足音が聞こえてきた――

「和也く～～～ん！」

――それと聞き覚えのある声も。

振り返ると、小泉さんを始めとした、浜田さん、栗山さん、広瀬さんが走り寄ってくる。

「みんな！　大丈夫だったの？」

俺がそう言うと、小泉さんは、余裕の表情で、自らの腕を手で叩いて俺に見せつける。

「私の実力を嘗めないでよね！　縄脱けなんて朝飯前！」

さすが新聞部。というか小泉さん。

「というか騎士団の連中はどうしたんですか？」

「スタンガンと催涙スプレーもレジスタンスの一員だってことをもう忘れたの？」

なるほどね……。

普通に考えたらおかしいんだけどね。なんて言葉はもはやナンセン

スだね……。

「全くひどいわね……」

浜田さんが瓦礫に埋もれた三人を見て呟く。

栗山さんや広瀬さんも、その異様な光景をこの世のものとは思えないんだろう、目を見開き見つめる。

ふと、瓦礫が崩れる音がしたから見てみると、破片と血と埃だらけのアメリが起き上がっていた！

けろりとしていて、欠伸をして目を擦る。

ホントに修学旅行の朝みたいだ。

「アメリちゃん！　大丈夫なの？！」

矢口さんが驚き、叫ぶ。

アメリは無言で、初めて歩き出した赤ちゃんのように手を前に伸ばして俺に近寄ってきた。

「和也くん……」

そう言って俺に抱きついてくるアメリ。

俺はそれを優しく抱きしめて上げる。

端から見れば実に奇妙な光景だろう。

「美園！　あんた平気なの！？」

小泉さんが叫ぶ。会長も起き上がったようだ。

「……今日は久しぶりに楽しめたわ」

顔にできた無数の切り傷や後頭部の出血なんてものともせず感想を述べる会長。

……さすがです会長。というか前にもこんな出来事があったのか？

気絶して倒れている山口を見据えながら会長は微笑む。

「三対〇」

小泉さん山口に小さい瓦礫の石をぽんと投げる。その石は山口の顔面に当たった。

すると、山口は目を開けた！

「ハ～イ、気分はどう？」

会長が嫌味のように話しかける。

「アンタに触れた背中が痒いわ」

山口は会長に向かってツバを吐きかける。ツバは会長のほっぺたに付着した。

「キョンキョン……」

会長がそう言うと、分かっていたかのように小泉さんが会長にスタンガンを渡した。

受け取った会長は、電源を入れて山口の腹部に感電させた。

山口は強がったのかグッと声を堪えて気絶する。

「今回は結構ヤバかったんじゃない？」

小泉さんが山口を見据えながら会長に言う。

「確かにね。キョンキョンが捕まったことも予想外だったし。アメリちゃんがいなかったら完全に負けてたわ……」

ホントにピンチだったんだなぁ～。

「みんな！　今日は打ち上げに行きましょ。私の奢りよ。お金なら腐るほどあるわ」

「いえい！」

明確に喜んだのは小泉さんだけで、他は呆れ返った苦笑いだ。

「あ、あの！」

広瀬さんが意を決したように会長に歩み寄る。

「どうしたの？　小海ちゃん」

「あ、あの、あの生徒会の件は……」

「入って良いわよ。それと生徒会じゃなくてレジスタンスね」

「あ、ありがとうございます！」

またメンバーが増えるのか……。

それにどうする気なんだ？　騎士団。

校舎は会長が弁償するとして……。

第1話　グリーンゾーン（前書き）

「けいおん！」のパロディに走りました。。

第1話　グリーンゾーン

あの死闘の後、俺ら生徒会改めレジスタンスは、騎士団が使っていた元生徒会室を制圧した。

生徒会室には物置でも何でもない謎の部屋があった。

枕研はレジスタンスの傘下となり、謎の部屋は枕研の部室になった。

騎士団の連中がどうなったかは、正直わからない。簡単に諦める奴じゃなさそうだけどな。

また何かた企んでるのかもしれない。そうだとしたら今度こそレジスタンスは終わりなんじゃないかって思う。

あんなピンチ迎えてさ……。

あれから一週間後の月曜、じゃなくて今日は火曜日だ。

放課後、やはり俺は生徒会室へ向かう。

大きな扉を力ずくで押し、部屋に入ると、ソファに会長が座ってガラスのテーブル越しに向かいの誰かと話していた。

向かいのソファに座っているのは二人の女子生徒で、一人は茶色の癖のあるショートボブで左前髪を黄色いヘアピンでとめていて、どこかおっとりしてる子で、もう一人は、前下がりの茶髪でおでこを余すこと無く出していて、頭にヒッピーバンドはめていて、股を開

いて座っている。

誰だろう？

「あ、和也」

会長が俺に気づいてわざわざ話を中断して俺の方を向く。

二人の女子生徒も俺の方を見る。

「こんにちは……」

俺は三人に挨拶する。

「こんにちはー」

ヘアピンのバカっぽい奴が返してくれた。

けどもう一匹、失礼、もう一人のヒッピーバンドのデコは少しにやけただけで挨拶をしない。

別にいいんだけどね。

「彼女たちは軽音楽部の子よ。今私に相談しにきてたの」

「凹沢（ぼこさわ）　唯（ゆい）です！　よろしくねっ！」

ヘアピンが満面の笑みで自己紹介する。

「土井中（どいなか）　律（りつ）。よろしく！」

デコも自己紹介する。

「桐生和也です。よろしく、お願いします」

というか軽音部がレジスタンスに何の用なんだろう……。

そう思いながらも俺は枕研の部室となった部屋へ向かう。

ドアを開けると、二十畳ほどの畳が敷き詰められた広い部屋の、やはり中心に布団を敷き、北乃さんがパジャマで寝ていた。

壁には小泉さんが寄り掛かって読書をしていた。

「こんにちはー」

とりあえず俺は小泉さんに挨拶する。一応先輩だからね。

「和也くん。元気？」

本からは目を話さずに返事を返す小泉さん。

「はい。それより、軽音部がレジスタンスに何の用なんですか？」

「ああ、ＧＬＴ？　美園主催でライブを開催して欲しいんだって」

「じ、ＧＬＴ……？」

「五反田ランチタイム、略してＧＬＴ。聞いたことない？　軽音部員がメンバーのグループよ」

相変わらず本から目を逸らさずにスラスラと言う小泉さん。

「ああなんか聞いたことあります。バンド、ですか？」

「いいや、ヒップホップグループ。凹沢　唯、冬山（ふゆやま）　澪（みお）、琴吸（ことすい）　紬（つむぎ）、土井中　律、新宿（しんじゅく）　梓（あずさ）の五人で構成してるね」

「そのＧＬＴって奴が、何で会長なんかに？」

「要は金だね」

なるほどね。

でも会長に頼むって客こないんじゃ……。

そう思った途端、ドアが開いた。

背後を振り向くと、そこには会長がいた。

「和也、ちょっと一緒に来て」

唐突にそう言って俺の手を引いて連れていこうとする。

「な、なんですか？」

引っ張られながらも訊いてみる。

「軽音部の練習風景を見に行くのよ。そして判断するの」

俺が小泉さんから話を聞いたことを知っていたような言い回しだ。

さすが会長だ。

斯くして俺は軽音部の部室へ連れていかれる……。

第2話　16歳のカルト（前書き）

はい。作者は「けいおん！」をみたことがありません。

第2話　16歳のカルト

音楽室のような防音壁のスピーカーなどが取り付けてある広々とした部室。天井にはミラーボールまでもついてる。

部屋の奥の窓際に大きな長机が横向き置いてありその上にミキサーやターンテーブルなどが置いてあり、部屋には他にも色々な機材が置かれている。

音楽室でやればいいのに。なんて大きな学校なんだ。

その部屋の中心に五人の女子生徒が輪を作って座っている。

さっきいた凹沢さんと土井中さんもいる。

「あ！　会長さん！　それにカズくん」

凹沢さんが俺たちに気づいて立ち上がる。

カズくんだって。馴れ馴れしい。

「紹介します！　この子は、ＰＩＣＣＡＤＩＬＬＹ９こと、あずにゃんです」

凹沢さんがそう言うと、黒髪のツインテールの小柄な女子生徒が「どうも新宿梓です」とへらへらと軽い感じで挨拶する。

「そしてこの子は、ＯＴＳＵＭＵこと、むぎちゃん」

すると今度は、金髪の眉毛が無い、いかにもヤンキーな少女が「チョリース」と挨拶する。

「で、この子は、M．I．Oこと、澪」

仲悪いのか？　何故か呼び捨てだ。

前髪パッツンの長い髪のつり目の少女が「どうも」と挨拶する。

「GLTは、りっちゃんがDJで、あとは全員MCなんだ」

「ふ～ん……」

会長が相づちをうつ。

するとドアが開き一人の女性が悠々と入ってきた。

「ハ～イみんな元気？」

サングラス、革ジャンにハデなインナー、ジーンズ……。

「だ、誰？」

思わず声が出てしまう。

「DJ　FLOWER　GARDENよ」

「ふら、フラワーガーデン？」

「そうよ。さわ子先生は巷では有名なクラブＤＪなの」

会長が説明する。

先生？　この人が？　冗談だろ？

「他の先生には内緒だけどね」

さりげなくＤＪ先生がそう言うが、色々とおかしい。

こんなツーリングの途中でちょろっと寄ったみたいな格好の時点でもう只者じゃないって気づかれてるって絶対。

「私たちのネームを考えてくれたのもさわちゃんなんだ」

凹沢さんが嬉しそうに言う。

先生はセンスの無い人なんだなぁ……。

「それはそうと、そろそろ本題にいかない？」

会長が壁に寄っ掛かりながら言う。

「そうでした！　もし良かったら資金出してくれるんですよね？」

「それ以外に私が何か言ったかしら？」

会長のその言葉を最後に凹沢さんは他の部員へ「みんな準備して！」と呼び掛ける。

ＤＪの土井中さんは、ミキサーの前に立ち、他のメンバーはその前でマイクを持って横一列に並ぶ。

ＤＪ先生は案外気が利いた人で、俺と会長のために椅子を用意してくれた。

俺たちはそれに座って、確か「五反田ランチタイム」だっけ？　それのショーを見学する。

「じゃあまず、メンバー紹介からします！」

さっきしたよ！

「色んな人から、唯はよく転ぶドジっ子ね～、と言われるんですが、改善したいなぁって思いながらも、今朝もまた！　なんとリビングで躓いて転んじゃったんですよ～！　もう！　ってイライラしながら足に引っ掛かったモノを見てみると、なんと妹だったんですね～。偶然妹も躓いて転んじゃって、私が転んで倒れていた妹に躓いちゃったんですねー。血の繋がりっておっそろしい～！　ＭＣ　ＢＹＵＩです～」

凹沢さんが流暢に自己紹介するけど、なに？　笑点なの？

「こないだ幼馴染みの男の子に久しぶりにあった時、色々積もる話をしたんですが、私の昔を知ってるソイツはスッピンの方が絶対綺麗だって言うんで、化粧を落として素顔を見せたんですよ。そしたら、ソイツは『いや、スーパーサイヤ人３のモノマネじゃなくてさ！』っていうんですよ。ソイツとは二度と口利きません！　ＭＣ　ＯＴＳＵＭＵよろしくぅ～」

そういう路線で行くんだな……。

「いっつも、つい汚い言葉を使ってしまうんですが、こないだある先生に、澪は才能がある！　って言われたんですね。私が『何がですか？』って聞いたら『S嬢』って言うんですよ。危うく大人の歓楽街へ連れていかれそうになったMC　M・I・Oです！」

全くヒドイ話だ。

「私は背が低いから、よく新喜劇の池乃めだかみたいな『あれ梓がいないぞ～？』って扱いを受けるんですね。悔しいから私はこう言ってやったんですよ。『背が低いとアリがよく見える。アリはあんたらよりずっと働き者ね』ってね。MC　PICCADILLY9ですよろしくどうぞ」

意味が分からん。

最後はDJか……。

「ウチみたいに頭が悪くてヒッピーバンドをつけてますと、どうしてもそのバンドが頭を締め付けてそのせいで頭が回らなくなってるんじゃないの～って言われるんですが、このバンドを外してしまうと、脳みそが本来の位置からずれてしゃべることも儘(まま)ならなくなるんですよ～。それじゃあ駄目じゃんDJ　IBARAGI、よろしゅ～！」

四人の後ろで自己紹介する土井中さん。

このメンバー紹介は絶対間違ってる！

しかし会長とＤＪ先生は微笑みながらショーに釘付けだ。

第3話　眠りたい…（前書き）

謎の急展開に我ながらゾッとした。。。

第3話　眠りたい…

特に耳を傾けて聞くほどでもない笑点風のメンバー紹介が終わり、やっと機器に電源が入り、ミラーボールも回り始め、演奏が始まる。

雰囲気はヒップホップっぽいけど、どこか昔のアイドルっぽいものも混じる。

「一曲目、聞いてください、『オアシスがかれるほど騒ぎたい』！」

どこか聞き覚えのある曲名だ。

曲が流れ始めると、四人は思い思いに身体を揺らし、踊り始める。

＊＊＊

一曲目が終わった。

ヒドイ歌詞だ。

特にサビの『絶不調～私の身ぃ～胃潰瘍　痛風～　急降下～　痛い身体～　かれるほ～ど騒ぎ～たい～　クラッシュ寸前～　不幸せ～のゴ～ル　私だ～け～にｃｌａｓｓｉｃ　ｈｅａｌｉｎｇ　ｓｏｎｇ　聴かせて欲しい～の～』って部分。

それに一曲目からヒップホップじゃないし。

俺の思いとは裏腹に拍手する会長とＤＪ先生。まるでアウェイだ。

「じゃあ二曲目！　『ダイエット・スペクタクル・イマジネーション？』！」

？の前にまず？を聴かせるべきなんじゃないの？

そうこう思ってる間に二曲目が始まる。

どこかの国に、大音量でロックを流しながら車で暴走する奴が捕まると、クラシックを聴かせて拷問するやつあったけど、その気分だわまさに。

＊＊＊

二曲目が終わった。

今度は確かにヒップホップだったけど、やはり何かが違う。

会長とＤＪ先生のスタンディングオベーションの脇で苦笑いをする俺はホントに面白味も無い普通な奴だ……。

「援助決定ね！」

会長が親指を立てて五反田ランチタイムのみなさんに見せつける。

「ありがとうございます！」

凹沢さんが嬉しそうに跳び跳ねる。

ライブを主催してほしいって用件じゃなかったのか？

いつの間にかレジスタンスは軽音部のスポンサーになろうとしてる。

軽音部も可哀想な奴だ。完全にイメージダウンだろう……。

「じゃあ、私は忙しいから帰るわね。後でキョンキョンが書類持って来ると思うから」

「はい！」

会長は廊下に出る。俺もそのあとに続く。

「目ーとー目ーがー離れてるーかーすかにーんー顔デカいーー」

会長が口ずさむ。聞き覚えのある……。

ＧＬＴはそんなの歌ってないのに……。

生徒会室につくと、俺はすぐに枕研の部室へ向かった。

なんだかすっごく眠い。

ドアを開けると、相変わらず北乃さんが寝息を立てて眠っていた。

この人が起きてる姿は最近は滅多に見ないな……。

俺は北乃さんの横の少し離れた位置に布団を敷いて、ジャージに着

替えて布団を被り、目をつむる。

学校で寝るのは実は始めてだ。

いつもは壁に寄りかかってるだけだ。

今日は俺にとって特別な日だ。

目を閉じてしばらく色々と考えていると、何やらとなりに動く気配を感じた。

いや、気配だけじゃなく音も……。

そして、温かい何かが俺にぶつかり、顔に生暖かい風が吹く。

何かと思い、その方向を見てみると、すぐ目の前に北乃さんの顔があった。

なるほどこういう展開か……。

北乃さんは目を閉じているが、まるで見えているかのように、手を使い、俺の布団の中へ入ってくる。

俺の常識は覆された。

北乃さんは寝ながら生活する睡眠民族の末裔だ。

「暖かい……」

気持ち良さそうに呟く北乃さん。

もう起きてるでしょ？

そう思った矢先、北乃さんが思いっきり抱きついてくる。

今日はよく眠れそうだ……。

ふと、視線を感じた。

目を開けて見ると、会長が不適な笑みを浮かべながら俺を見下ろしていた。

「気持ち良さそうね……」

やっぱり会長はエイリアンだ。

物音立てず、気配も消して、突然現れる。

そして何より醜くて容赦無い。

「私も混ぜてよ」

何を言い出すのかと思えば……。

俺と北乃さんで布団はパンパンだ。

「布団なら押し入れにありますよ」

「生憎、家（うち）はベッドなのよね」

「ベッドなら保健室にありますよ」

「運んできてくれないかしら？」

「会長の家柄を活かせば楽チンですよ」

というか何だこの会話。

着地点が全く見えない……。

と思った瞬間、会長が強引に布団の中に入ってきて、俺に抱きつく。

誰がこんな展開予想しただろう。

会長は完全に寝ようとしてる。

す、すかぴ～。

第4話　ウェンズデーナイトフィーバー

俺が起きたとき、部屋にある時計を見たら、時刻は午後7時半だった。

大分寝たみたいだなぁ～……。そんなには眠くなかったつもりなんだけど。

ふと気づけば、北乃さんも会長もいない。

俺を置いて先に帰ったのか？　ヒドイ奴らだ。

布団から起き上がり、俺は枕研の部屋を出る。

生徒会室はまだ明るく、ソファ回りにはレジスタンスメンバーが勢揃いしていた。あと軽音部の面子も。

しかも全員パジャマ姿だ。

それに、さっきまで無かった台の上に置かれたテレビを見ながら、談笑している。

栗山さんと広瀬さんだけが俺に気づいて振り向いた。

なんか近づきがたい。全員女子だし……。

「おはよう」

横から声がした。

振り向くと、そこにはパジャマ姿の、半開きの眠そうな目を擦る北乃さんがいた。

「おはよ――」

俺が挨拶を返すのより早く、北乃さんはまた枕研の部屋へ帰ってしまった。

『帰ってしまった』ってのも語弊があるかもしれないが……。

「和也くん、起きたんだ」

小泉さんがやっと俺に気づいてくれた。

「おはよう！」

会長も気づいてくれた。

「和也もおいでよ」

会長が手招きする。

「いや、いいです。俺はそろそろ帰ります」

しかし会長はまるで聞こえていないかのように手招きをやめない。

俺は仕方なく、会長たちのもとへ行く。

神聖な生徒会室がまるでリビングのようだ。

笑い声が絶えない。

「和也も、今日は泊まっていきなさい」

会長がさらっとそんなことを言い出す。

「もうみんなお風呂入ってきたのよ？　和也も入ってきたら？」

俺が駄目だと返事をする前に、会長が話を進める。

それでみんなパジャマだったのか。パジャマパーティーするなら事前に言っておいて貰いたかった。

そうすれば事前に駄目だって答えられたのに。

「俺はいいです」

ここはハッキリ言ってやらないと逃げられないかもしれない。

「そうね……見張りをつけないとね。誰か和也をお風呂まで見張るウォッチガールはいない？　キョンキョンどう？」

会長って人は……。

「私、お笑い観てる時が一番楽しいんだ」

無理って意味か？　遠回しな言い方だな。

「私いきますよ！」

率先して手をあげたのは、何故か凹沢さんだった。

「じゃあ頼んだわよ！　唯！」

またいつの間に仲良くなってる。この二人。

「っていうか学校にお風呂なんてあるんですか？」

かねてからの疑問だ。

「あるわよ。合宿部の部室にね。合宿部には私から連絡入れておいたから、行けば案内してくれると思うわ」

入れておいたって。仕事が早い奴だ。

「じゃあ行こう！　和也くん」

凹沢さんが馴れ馴れしく手を差し伸べる。

手を繋げってのか？　こんな大衆の前で？　冗談だろ？

手は繋がず、俺と凹沢さんは大きな扉を開けて廊下に出る。

そして、合宿部の部室へ向かう。

「そういえば、急に何で泊まることに？」

俺は歩きながら質問する。

「さわちゃんが許可してくれたんだ」

さわちゃん？　ああ、あのＤＪ先生か。

あの人にそんな特権があるようには見えないが。

「でもそれって、大人が見張るからとかそういう理由じゃないの？　肝心の先生が見えないけど……」

「今日はクラブ」

「それって週末じゃなかったっけ？」

「ううん。週末はスカラ。シムーンなんだって」

とにかく、ＤＪ先生は教え子の身の危険も顧みず、遊びに行ったってことなんだな。

アイツは教師失格だ。

「私もいつかクラブで踊り明かしたいなぁ～」

恍惚と夢を語る凹沢さん。

結構、清純そうな印象だったのに……。

まぁ、ヒップホップグループって時点でなんか違かったしね。

……それに、何だよＭＣ　ＢＹＵＩって！

第5話　未知との遭遇（前書き）

北乃さんの知られざる能力が発揮されるかも。。。

第5話　未知との遭遇

風呂上がり、凹沢さんは行きだけ同行してくれたんだが、帰りは俺一人で生徒会室まで戻ることになった。

酷い奴だ。

この学校はホントに広い。

そして途中、枕研や合宿部に続く奇妙な部活の名前を見つけた。

『角部（かど）』、『ウサギ部』、『コスプレ同好会』、『フレンチ部』、『集中力ゲーム部』、『生姜部』、『ピョミ部』。

普通の部活が無い。

『ピョミ部』って何だよ！

とにもかくにも、俺は暗い校舎を若干警戒しながら生徒会室へたどり着いた。

室内は、電気はついていたものの、人の姿は無かった。

枕研の部屋のドアを開けると、やはりそこに軽音部、生徒会（レジスタンス）、そして北乃さんたちがいた。

布団もぎっしり並べられて、それぞれトランプや談笑で盛り上がっている。

まるで修学旅行だ。

「あ、和也！　おかえり～。和也も大富豪やる？」

会長が、トランプからは目を逸らさず、恐らくこの時間に戻ってくると最初からわかっていたように俺に話しかける。

「悪いけど、先生に言われたんです。女子の部屋には入るな、って。守らないと廊下に土下座させられます」

「好きな時にお風呂入れて、好きな時にご飯食べれて、好きな時に外に出れて、女子が男子を部屋に誘う。まさに理想の修学旅行じゃない？」

言いたいことは分かった。

「大富豪のルール知りませんし……」

「じゃあいいわ」

そう言うと会長はゲーム一筋に絞った。

酷い奴だ。

俺は、壁に寄り掛かって座っている、珍しく起きてる北乃さんに歩み寄る。北乃さんは俺の味方だろう。

「今日も眠そうだね」

変な挨拶をして俺は北乃さんの横に座る。

「……」

眠いのか、北乃さんは喋らない。

「そういえばさ、飯、とかまだ食わないの？　みんな」

「――もう食べた」

おっどろきぃ～

「もう食べた、って？」

「カズっちが寝てる時に」

「なるほど……」

俺はとことん仲間はずれってわけか。作戦もそうだし。

会長は何のために俺を生徒会へブチ込んだんだ！

会長はドSだ。俺に屈辱を与えたいんだ。

ふと、北乃さんが俺の肩に寄り掛かる。慰めてくれてるみたいだ。

コイツは会長以上に人の心を読める。良い意味でね。

会長から厄介さと不気味さと奇妙さと悪賢さと傍若無人さと身長と口数と年齢とその他諸々を除いたら北乃さんになるんだろうな。

北乃さんが地球なら、会長はグリーゼだ。

地球には大地や海や森、そして色んな動物がいるように、北乃さんには真心があるんだよね。これが事実。

でもグリーゼは、地球と似ていて、生物がいるであろう、と言われてるけどホントのところはどうだか。

会長には心は無いんだ。だから俺はグリーゼには生物がいないと思うんだ。

「ねえ、北乃さん」

俺は不意に思ったことがあって、北乃さんに話しかける。

「なぁに？」

「『ピョミ部』って、何？」

実にストレートで、端からすれば意味不明な質問だ。北乃さんが答えてくれるかどうかも闇の中。

「宇宙人と話をする部活」

「え？」

「『ピョミ』っていうのは水星語で、『宇宙語』って意味。ちなみにミドリ語だと『グウァッヴィス』」

「み、ミドリ語？」

「裏火星語。火星の南半球の言葉。北半球だと表火星語でススィ語」

意味不明だけど何か面白い。

「ウェス　ヴィッヴィ　グァスッレス　ヴィヴォ　ヴァスヴェッヴォス」

北乃さんが突然何か言い出す。

「それは？」

「ミドリ語で、『これを温めてください』」

「北乃さんて、火星語が話せるんだ」

「……」

北乃さんが黙りこむ。

「く、くうちゃん？」

俺がそう言うと、北乃さんは電源を入れたように喋り始める。

「私が話せるのは、ミドリ語と、水星のイミゥル大陸にあるパルメス共和国って所のパルメス語だけ。でもピョミ部の人たちは、パルメスのディピュ地方の方言とか、火星の今は使われてないクロ語とかアオ語とか、難易度が高い言葉を話せるの」

俺は、持ち前の普通脳で考えた。しかし答えが全く出ない！

「ヴイ　ヴォヴィヴ　ヴォッヴォ　ヴィーヴォン　ヴァッヴィヴ」

「そ、それは？　何て言ってるの？」

「ミドリ語で『今日、隣で寝てね』」

「別に良いけど……でもその前に、腹減った。それもかなりね」

ホントに死にそうだ……。

第6話　和也が静止する日

俺は一人、学校付近のコンビニで適当にパンなんかを買って公園のベンチで食べた。

そう、この場所は俺が魅惑のセクシーレーザーこと矢口真依さんにフラれた聖地だ。忌々しい。

俺は自分で思う以上に少食で、パン一個だけで吐きそうになった。

余分に買った飯は明日のために取っておこう。

俺は生徒会室へ戻る。

枕研の部屋のドアを開けるが、さっきまで賑やかっだのが嘘のように誰もいない。

いるのは北乃さんだけだ。

北乃さんは時間が止まっていたかのようにさっき俺と座っていたところに相変わらず座っていた。

「くうちゃん、みんなは？」

「踊ってる」

「お、踊ってる？」

「ヴィッヴァ　ヴィヴヴォ　ヴァヴイ」

「それは？」

「楽しく踊ってる」

話が進みそうにない。

俺は北乃さんの横に腰を掛ける。

「踊ってる、って？」

「軽音部の部室で踊ってるの。茨城さんがＤＪ」

なるほど。どうしても俺を仲間に入れたくないんだな。

それに、茨城ってのはきっと土井中さんのことか。

「くうちゃんは行かないの？」

「私ダンス苦手だもん」

確かに得意ではなさそうな感じだな。

「ヴィヴヴィ　ヴォヴィ　ヴェッヴェグィッ」

「――くうちゃんってさ、どうして火星語が話せるの？」

すると北乃さんは顔を上げて天井を見詰めた。

「火星のヴェノヴィニって国に旅行行った時、街がすっごく綺麗だ

ったの。ミドリ人も、少し粗っぽいところがあるけどイイ人たちなんだぁ。ユヴちゃんっていう女の子と仲良くなって、次会う時はミドリ語習得しとくからねって約束したの」

えらい壮大な話だが、北乃さんは未来人か何かなのか？

考えてみれば俺の周りには普通の奴がいないな。

先読みの美園会長、不死身のアメリ、そして北乃さん。なんだかなぁ～。

「そういえばさ、火星の人間って、なんかタコみたいな奇妙な形ってイメージがあるんだけど、どうなの？」

ふと長年気になっていたことを思い出して聞いてみる。

「ううん。そんなことないよ。ミドリ人は、背が低くて身体が黄緑色で頭が大きいのが特徴」

十分奇妙だよそれ。想像しただけでゾッとした。

「……ちょ、ちょっとトイレ行ってくるよ」

俺は逃げ出すように枕研の部屋を出た。

そして俺が向かったのは、会長たちがいるであろう軽音部の部室だ。

部室に近づくにつれ、だんだん部屋から漏れた音楽と騒ぎ声が聞こえてくる。

そうとう騒いでるなこれは。

ドアを開けるのが怖い。

「あんたも来たんだ」

ふと背後から小泉さんの声がした。俺はすがるような気持ちで振り向く。

「大分盛り上がってるみたいですね……」

「なあに言ってんの。パーティーはまだ始まったばかり！　これからどんどん上げてくんだから！」

ご苦労なこった。

「和也くんも踊っていきなよ」

やっぱり来るんじゃなかったな。

「いや、俺は良いです」

「軽音部完全復活のパーティーなんだよ？」

軽音部が今まで沈んでたことすら知らないし。

そう思った矢先、小泉さんが俺の腕を掴んだ。

「ホントに良いですって！」

振り払おうとするが、小泉さんの手に思いっきり力が入っていてほどけない。

「あんたの言い分なんて誰も聞いてないの！　あんたはただ、自分のおかれてる状況とこれからの未来に素直になればいいの！」

「俺は小泉さんも会長も信用してません！」

すると小泉さんは、俺の腕を掴んだまま、たちの悪いイタズラのように、足の爪先を俺の内股に掛けると、持ち上げるように足払いをしやがった！

当然のように俺は崩れ落ち、倒れ込む。

小泉さんは俺を見下ろすと「美園はあんたが部室前の廊下で転ぶことも予言してたんだよ」とにやける。

「会長は予言者なんかじゃない、ペテン師だ！　お前と一緒だ！」

そう叫んだ俺の姿は、第三者から見れば相当あわれだろう。

「お前？」

やばい。つい……。

小泉さんが俺を睨む。

さらにしゃがみこんで、俺に近づいてくる。すごい怖い！

何をし出すのかと思えば、小泉さんは指を鳴らした。

その音は廊下中に響き渡る。

すると廊下の電気が奥から一斉に点灯しはじめる。

気づけば部室から聞こえてきた音漏れも途絶えていた。

「な、何ですかこれは？」

俺がそう言った途端、部室のドアが音をたてて開く。

そしてぞろぞろと会長を始め、生徒会（レジスタンス）の連中、軽音部のダニや埃どもが出てくる。

「え？　え？」

俺が一生懸命困惑してみせているのに、誰も俺に手を差し伸べたりもしない。

逆にみんな笑顔だ。栗山さんを除いてね。

これから、いったいどんなショーが始まるんだ？

第7話　マーキュリー・アタック！（前書き）

よくわからない展開になりました。

第7話　マーキュリー・アタック！

小泉さんは、立ち上がると、後ろで俺を見下ろす会長の横に並んだ。

みんなが俺を囲む。

「な、何なんですかこれ！」

しかし誰も答えない。

「和也、あんたは今まで、レジスタンスに何か貢献した？」

突然会長がそんなことを言い出す。

「え？」

それしか言葉が思い付かない。

「あなたには、ロリコンって称号ともう一つ、足枷が必要みたいね」

会長がそう言った途端、背後に何かを感じた。

案の定、何者かが俺の脇に腕を通して、縛り上げるように持ち上げられ、強制的に立たされた。

「おはよう」

後ろから聞こえた陽気な声は土井中さんのだ。

そう思っていたら、会長が俺に歩み寄ってくる。

「いったい何なんですかこれ！」

しかし、俺の叫び声もむなしく、会長は俺の耳元にグッと顔を近づけてくる。

「ショーはまだまだこれからよ」

それだけ囁いて、会長は一歩下がる。

一瞬の出来事だった。俺は腹に強烈な衝撃を感じた。

そして、意識がどんどん遠退く……。

＊＊＊

俺が覚えてることと言ったら、最後に会長のパンツが見えたことだけだ。

重たいまぶたを開けると、見えたのは頭上を回るミラーボールと、色鮮やかに照らされる室内。そう、軽音部室だ。

俺は軽音部室の真ん中に倒れていたらしい。

立ち上がって何が起こったのか確認しようとしたが、足に何か違和感がある。

足が鎖で繋がれていた。

鎖は床の穴の空いた鉄の突起物に繋がれていた。

前来た時はこんなもんなかったと思うんだが、そうは言ってもいられない。

どうやら俺は閉じ込められたようだ。しかもダンスフロアーに。

「会長ー！」

叫んでみるが、やはり返事が無い。

鎖は短く、歩き回れる範囲も厳しく制限されてる。

ふと、背後に気配を感じた。

振り向いてみると、そこにいたのは、東葦の制服を着た……少女？だった。

この世のものとは思えない水色の身体、そしてそれより少し濃くて長い髪、赤い瞳。

まるで異星人だ。

異星人が女座りして俺を見つめてる。怖い。

「あ、あのー」

話しかけてみる。俺も案外恐れ知らずなんだな。

「ィチュチェムイリィヌ？」

やはり異星人のようだ。俺とは違う言語を話す。

でも、俺と一緒で困惑してるのはなんとなくわかる。

さて、どうするこの状況。

俺は足を繋がれてて動けないけど、この異星人さんは、普通に動き回れそうだ。

助けを呼んできてもらうにしても、言葉が通じないし、第一、常識のようにいるが、この異星人をみんなはご存じなのか？

ここの制服着てるけど、異星人がいるなんて聞いてない。

ダメだ。北乃さんかピョミ部員がいれば……。

「シュペチュキュ　トトモピュイヌ　ペキサ？」

少女が何かしゃべるが、当然理解できない。

今が何時なのかも知りたい！

まさかとは思うが、また俺を仲間はずれにして、みんなで寝てるんじゃないだろうな？

そうだとしたら、俺は見知らぬ異星人（エイリアン）と一夜を共にするのか？

同じ人間でも気まずいってのに。

「チュニ　チェポミスヌィ　トキペニュ　スドー　シュミルヌナニキチェチョ　パルメス　キュチョ　ニェフィン　コレピト　ニュク」

また何か言ってる……って、今『パルメス』って言った？

じゃあこれは北乃さんが言ってたパルメス語なのか？

てことはこの人、水星人？

「に、日本語、しゃべれないん、ですか？」

「ニェフィン？」

ニホンと発音が似てる。ってことは、もしかして『ニェフィン』が『日本』って意味なのか？

「イエース！」

つい英語を言ってしまった。

「コレヲアタタメテクダサイ」

どうやら通じたようだ。

第8話　クウ2

凹沢さんがこんなことを言っていた。

“私の夢は、二二四七年に火星の植民地で開催される『第五回マーズフェス』に参加すること”と言っていたが、火星にはもともと人が住んでいて、植民地だなんて図々しい話なんだ。

不意にそんなことを思った。

「他にニェフェン語は喋れないのかな？」

「チィ　ユキェミュココユ　オニュキ　チェモウサニェ」

ダメだ。通じてない。

どうしようか……。

そうだ携帯！

そう思ってポケットに手を突っ込むが、携帯は無かった。

しかし代わりに紙切れが入っていた。

紙切れには『和也、あなたは今日、生まれ変わる。あなたは、心の理想という叶わぬ願いのもとに平伏すのです』と意味不明なことが書かれている。

いったいどういう意味だ？

「ニュプス！」

水星少女が俺の服の袖を引っ張ってきた。

振り向いて見れば、その少女は俺に一枚の紙を見せてきた。

そこに書かれていたのは、恐らくこの地球には存在しない意味不明な文字だった。

恐らくパルメス語、だと思う。

「読めませんよ」

そう言って俺はそっぽを向く。

すると、俺の目にうつったのは、不自然に床におかれたノートだった。

表紙には、『心のノート』と書かれている。

俺が中学生の時までは使っていたが、たしか廃止されたと聞いた。

なぜこんなところに？

まてよ……。俺は紙切れをもう一度見る。

『心の理想という叶わぬ願い』――。

心のノートっていうと、なんかすごい綺麗なことが書いてあったな。

挨拶をしましょうとかね。

でも誰もそういうのって受け入れてないよね。

この紙切れに書かれてる『心の理想という叶わぬ願い』って、心のノートのことのように思えてきた……。

俺はどうも察しが良いようだ。

「あ、あの～」

俺は水星少女に恐る恐る声をかける。

しかし少女は俺に背を向けていて、どこか負のオーラを漂わせていた。

もしかして、拗ねてるのか？　さっきそっぽ向いたせいで？

心のノートに何かヒントがあるかもしれないってのに。

まさに八方塞がりだ。

「ハロー、メルシー、おはよう、サランヘヨ～」

ありったけの言語を水星少女の背中にぶつけてみるが、反応がない。

沈黙のまま、数分がたった。

もちろん何の進展も無い。

今日は散々だ。

いったい何なんだこの状況。

もしかして、北乃さんが宇宙語を話したことも、会長の作戦ってことになるのか。

でも北乃さんが話したのはミドリ語とかいう火星語で、パルメス語は一切話さなかったよな？

あれ？　確か、この部室の隣はピョミ部だ。

ここから大声を出せば、ピョミ部員を呼べるかも。でも、この時間にまだ学校にいるなんて考えられないよなぁ。

なんだかなぁ～……。

そう思った途端、部室のドアが開いた。

そして外から一人の女子生徒が入ってきた。

「はじめましてデリバリーピョミ部で～す！」

女子生徒が笑顔で俺を見る。

まさか。俺の念が通じたのか？　それにデリバリーピョミ部っていったい！

俺がピョミ部員に話かけようとした途端、耳をつんざくような強烈な爆音が室内に轟いた。

胸から血を噴き出しながらゆっくり倒れるピョミ部員。

いったい何が起こったんだ？

ピョミ部員は倒れてからピクリとも動かない。

「シュエミチェプユ　コッチャヌ」

後ろで水星少女の声が何か喋った。

振り向くと、水星少女は立ち上がっていて、片腕をまっすぐ前に伸ばして、ピョミ部員を見据えていた。

伸ばした手には、銃を持っていて、銃口はピョミ部員に向けていた。

まさかこいつは侵略者なのか……？

第9話　ＯＯＯＢＥ（前書き）

もうすぐオトす予定。。。

第9話　０００ＢＥ

「チェプリュイ　ケッチュア　モスリェルノ　テチュプス……」

水星少女はそう言って腕を下ろし、ピョミ部員へ近き、傍らにしゃがむと、何やら身体を調べ始めた。

水星少女の足に、謎の装置がついている。その装置は、ピョミ部員に近づくにつれ点滅が早くなっていた。

ピョミ部員のスカートのポケットから紙切れを取ると、水星少女はドアを閉め、ピョミ部員の足の両足をつかみ、室内へ引きずり込んだ。

そしてそのまま放置し、銃も投げ捨て、再び俺のもとに戻ってきて、座り込んだ。

「チェキュ　ピオニュイウ　ケッチュア　スクリュニュウミョ……」

水星少女は紙切れを読み始めた。

ふと水星少女の足に付いてる装置の点滅が遅くなってることに気づいた。

あれってもしかして……爆弾!?　部室を出ると爆発!　みたいな?

だとしたら、この水星少女ももしかして、被害者?

とにもかくにも、あの心のノートをどうにかして取らないと……。

あれを取れるのは、水星少女しかいないけど……コイツはいきなり入ってきた人を射つような暴君だ。

俺も殺されるかもしれん……。

というか何で銃なんか……あの紙に書かれていたのか？

だとしたらもう一枚の紙には何て書かれてるんだ？

『相部屋のマヌケを殺せ』　なんて書かれてたら……。

俺が考え込んでいると、視線を感じた。

水星少女が物欲しそうに俺を見詰めてくる。

「な、何ですか？」

俺がそう言った途端、水星少女はスッと立ち上がった。

ヤバイと思った俺は無様にも後退りする。

水星少女は、俺の横を通り過ぎ、心のノートを拾ってからまた戻ってきた。

俺にそれを手渡すと、また座り込んだ。

水星人は、人の心を読める人種なのか？

ノートを無造作に捲ると、一枚の紙切れが出てきた。

そこにはこう書かれている。『彼女の胸には触れるな』。

どういう意味だ？

女子の胸にさわるなってわざわざ言う必要が……？

まさか、触れろってのか？

変わった形の肝試しだな。

この謎の空間を作り出したのは他でもない会長だ。

あの角質糞女は一体何を企んでるんだ？　後でファックしてやる！

別にこのまま待ってれば、いずれ助けがくるはずだ。会長は敵が多いからな。

さて、寝るか……。

俺は横になり、完全に寝る体勢に入る。

しかし、水星少女が俺の身体を揺さぶる。

「な、何？」

「キュピ　リュクスヌイ　ケッチュア　ソパァズ　ノキュヌ！」

「なんつってんだよそれ！　せめて地球語喋れよ！」

ついムキになってしまった。

「ヅィ！」

水星少女もキレた様子で立ち上がり、ピョミ部員へ歩み寄った。

そして傍らに落ちていた銃を拾い、その銃口を俺に向けやがった！

「ストップ！」

俺は両手を精一杯挙げる。

水星少女は俺の脇に来ると、銃を俺のこめかみに突き付けてくる。

ヤバイ！　チビりそうだ……。

水星少女は、水色だけど綺麗な足を俺の前につきだし、足首に巻かれた恐らく爆弾であろう装置を指差して「チュイス　ケノミョウアニュクチュケ　ニノム！」と叫ぶ。

『これが何に見える？』とでも言ってるのか？

「お、お洒落なアクセサリーですね……」

すると少女は黙り込む。もう一声必要か？

「ど、どこのブランドのものですか？」

「キュシュアヌ――」

キュシュアヌ？　聞いたことないブランドだな。水星では流行ってるのか？

「キュ　チョスヌイン　ツィノモア　ケッキュア！」

「俺の好物はマルゲリータだ！」

「キュス　ノクニュイノ　ミソノ　チュピヌ！」

「ああ！　よく意外だって言われるよ！　お前はフランス料理の方が好きなように見えるってさ！」

「ケノ　ニュキュケソ　ビュイス　テツィッシュ！」

どうしろってんだ！

こんなに会長が恋しくなったのは初めてだ……。

第１０話　ＱＯＯＢＥ２

あ～眠い。

俺はいつまでこんな牢獄に居なきゃいけないんだ……。

水星少女は、銃をピョミ部員の方へ投げ捨てると、俺に背を向けてしまった。

これが映画「ソウ」の粗末なパロディだとしたら、どんどんヒントを辿っていかないと、何も見えてこないはず……。

今俺が持ってるアイテムは、『彼女の胸には触れるな』って書かれた紙だけ。

俺はもう一度、心のノートを開く。

案の定、もう一枚紙切れが出てきた。

そこにはこう書かれていた。『彼女の股間には触れるな』と。

夜の旧校舎を一人で一周する方がマシだな――。

会長が憎い。

我ながら何を思ったのか、俺は水星少女の背中を見つめる。

無意識のうちに身体が水星少女に近づく。

願わくば、自由の身……。

気付いたときには、俺は背後から水星少女の胸を鷲掴みにしていた！

案外大きくて、そして柔らかい――。

「ちょっ！　まっ！　きゃーー！」

水星少女が声を上げて背筋を伸ばす。

水星の叫び声は、日本とそっくりなんだなぁ。

そう思ってる間に俺は、胸の柔らかさに紛れて紙のような感覚を見つけた。

これはブラジャーとは違うだろう！

さぁ！

俺は、水星少女のYシャツの裾から手を入れ、再び胸を触る。

見つけた！　紙だ！

ブラジャーにテープか何かで貼り付けてあるようだ。

「ちょいと失礼するよ！」

俺はそれだけ言って、紙切れを剥がし取る。

そして紙を見る。

そこには、俺には読めない、宇宙語が書かれていた……。

まさか、これは水星少女用のヒント？

そう思った矢先、俺は頭に巨大な衝撃を感じ、前のめりに倒れ込む。

何かと思い振り向くと、立ち上がった水星少女が俺を睨み倒していた。

無理もない。

「チュキス　ノミュア！」

そう叫んでから水星少女は、教室の隅までいき、どっしり座ると、相変わらず俺を睨む。

「あ、あの～。これ！」

俺が、水星少女の胸からむしりとった水星語が書かれた紙切れがあることを知らせようとするが、水星少女は、ふんっ！　とそっぽを向く。

これも会長の作戦ってやつか？

俺は見知らぬ女子生徒の胸を鷲掴みにした男だ。

俺にできないことなんてない！

「忘れ物ですよ」

俺は水星少女に紙切れを投げ付ける。

水星少女は、それを疑った様子でゆっくり拾うと、黙読する。

「キュペノニュイ……」

水星少女は、若干イライラした様子で紙切れをスカートのポケットにしまった。

果たして……次のターゲットは水星少女の股間か……。

胸は水星語が書かれてて、俺的にはハズレ。ならパンツにはちゃんと日本語が書かれてる、はずだ！

さてどうする……。

「あ、あの！　パンツに何かついてますよ！」

我ながら良い手段だ。

「チェピシュ！」

水星少女は俺に向かって中指を立てる。

言ってることはわからないが、恐らく俺を罵ったんだろう。

不意に、水星少女は自らのスカートの中に手を突っ込んだ！

何をし出すのかと思えば、恐らくパンツに貼り付けてあった紙切れ

を剥がして、俺に投げ付けた。

俺は困惑しながらも紙を取る。

温かい。

紙にはこう書かれている。

『極限のあなたが頼れる人物はただ一人です』

これは、果たして……。

第１１話　クウ　ザ　ファイナル（前書き）

第五章完結。。

雑過ぎる終わらせ方、申し訳ない。。。。

第11話　クウ　ザ　ファイナル

俺が頼れる人物？　そりゃもちろん弁護士しかいない。

それより俺が水星少女の胸から剥がし取った紙には、『パンツに貼ってある紙を剥がして相部屋のマヌケに投げつけろ』とでも書いてあったのか？

それにしても、あの立ち振舞い、もしかしたら、胸に紙が貼ってあったのも、股間に紙が貼ってあったのも、コイツは分かってたんじゃないのか？

なんて思った。

わざと胸を触らせたのか？

ということはコイツは痴女か。

もう！　わけがわからない！　会長の『作戦』は！

「かいちょ～～～～～！」

思わず俺は声を漏らす。

すると水星少女がビクンと反応する。

大きな物音がした後、俺は天井を見た。

天井無くなってる!?

そう思った途端、部室の壁が花が開くように外側に倒れた！

見えたのは、満点の星空、そして巨大なクレーン車……ここは、校庭？

すると、水星少女が「もう！　美園のバカっ！」と部室（？）を出る。

水星少女に銃で射たれて死んだはずのピョミ部員も、「案外、血糊の量多いっすねー！」と立ち上がり、そそくさと部室（？）を出る。

「気分はどう？」

会長が俺に微笑みかける。

会長以外にも、小泉さんや栗山さんなどレジスタンスメンバーや、軽音部員、そして北乃さんが俺を囲んでいた。

「和也！」会長が突然叫ぶ。

「一体、なんですかこれ？」

「見ての通り、あんたが軽音部室だと思っていたこの場所はハリボテよ。金にモノを言わせて作ったの。校庭のド真ん中にね。良い出来でしょ？　ウン百万掛かったんだからっ」

嬉しそうに話す会長。

「……今回は一体、なんていう下らない作戦なんですか？」

「私がしたことは金を出しただけ。あとは全部くうちゃんが考えた企画よ？」

北乃さんが？

「くうちゃんってばすごく冴えてるのよ。あんたとは大違いね！」

「目的はなんなんです」

「あんたがどれだけ普通でバカで、無駄に勘が働くかを調べるテスト、所謂ドッキリよ！」

食い気味に会長が叫ぶ。

とんだ爆弾コントだ！

「この意味不明さのどこが冴えてるっていうんですか？」

「全部よ！」

即答だった。

「あの水星人も金にモノを言わせて作った特殊メイクですか？」

「水星人？　あぁ、シュナちゃんのこと？　彼女は火星人よ」

会長がそう言うと、さっきの水星少女が俺に近づいてきた。

「初めまして！　さっきは殴ってすみません。私、須藤シュミルヌ

ナと言います」

胸を触った直後だというのにこの丁寧な態度……。

「シュナちゃんは我が校唯一の異星人なのよ」

聞いたことない！

異星人が存在するってのも、さっき知ったばっかなのに！

まさかこんな身近に異星人がいるだなんて！

信じがたい。

「このドッキリは、一体何のために」

「分かったでしょ？」会長がまた食い気味にしゃべる。「極限で無力なあなたにとって、私がどれだけ大事な存在か！」

「ご、誤解だ！」

このクソみたいなドッキリの首謀者が会長だと悟ったから、俺は会長に止めさせるようにと念を込めて叫んだだけだ！

「素直になりなさい……」

認めたくないものだな……。

第1話　桐生和也と謎のプリンセス

風ふふふ～ん、今は夏～。

昼休み、俺は廊下を我が物顔で歩きながら口ずさむ。

そう、今は夏。七月十日だ。もうすぐ夏休み。

春の騎士団との死闘以来、騎士団は妙に静かで、その姿を見かけることも少なくなった。

嵐の前の静けさ、なんて言葉がぴったり当てはまりそうだ。

だがその前に、困ったことがもう一つあったんだ……。

それは先月から始まったことなんだ……。

「和也コラ！　コラ和也！」

噂をすれば……。背後からヤツの声が聞こえる！

俺はあえてダルそうにゆっくり振り向く。

すると背後にヤツの姿はなかった。

「どこみてんの？　こっちこっち！」

背後、つまり、俺が元々向いてた方から声がする。

振り返ればヤツがいた。

「一日ぶり！　和也！　今日はなんで待っててくれなかったの？　ちょっと酷くない？　何で？　何？　何を企んでるの？　あの美園ってヤツのせい？」

流暢に喋るツインテール、つり目の女子生徒は、東京（とうきょう）都（みやこ）。あだ名は「ロンドン」。

いじられキャラの強がりキャラだ。

俺は「ローマ」と呼んでいる。

「ねえ和也！」

「悪い。今日はお前の声が聞こえない日なんだ」

「昨日は私の声があんたには理解できない言語に聞こえる日、一昨日は日本語を使っちゃいけない日……。それってどう思う？」

腕を組ながら見下した態度で俺にそう問うローマ。

もちろん答えなど出さずに俺はその場から立ち去る。

「どこ行く気？　生徒会室？　みんながあそこを何て呼んでるか知ってる？　不毛地帯よ。美園、コケ娘、ストーカー女、裏切り者の風紀委員長、あれはぜーんぶ偽物の幻なんだからっ！」

何か叫んでるが、気にせず俺は突き当たりを曲がる。

アイツと出会ったのはさっきも言ったが六月の初旬。

無理矢理参加させられた町内を清掃するという名目のボランティアでの話だ。

俺が誰から見てもダルそうな様子で茂みでゴミを漁っていたら、ゴミ袋を持った一人の女子が俺を見つけるやいなや、猛スピードで走り寄ってきた。それがアイツ、都だった。

アイツはいきなり「アンタ、私ん家の玄関の前にある岩に似てるわね。私あの岩って大嫌いなの。そのダルそうな顔どうにかしてくれない？」と俺の胸に指を押し当てて睨んできた。

入学当初に会長と出会った時以来の衝撃だった。

都と会う前日、会長がこんなことを言っていた。

“いい？　もし明日、変なビッチに会ったりしたら、そいつにこう言ってやりなさい。「そのバカ短いスカートからチラチラ見えてるボーダーパンツが色褪せるぐらい凌辱してやるからさっさとパンツを脱ぎやがれ！」って。きっと恐れをなして逃げ出すわ！”

それを言おうか、考えたが、生憎俺にはそんな勇気が無い。

だから俺は「御晩でございます」と言ってその場を立ち去ろうとした。

だけど、俺は都に足を引っ掛けられて転んだ。

起き上がろうとしたらアイツは立ち去った。

その次の日、彰造が二年A組の転校生がヤバイと騒いでいた。

俺は別に興味は無かったが、無理矢理連れていかれた。

A組の人だかりの中心にいた退屈そうに腕を組んだ人物、そいつが都だった。

都は俺を見つけるやいなや、「おはようニューヨーク！」とパッと笑顔になって俺に歩み寄ってきた――。

気が付けばアイツが俺の友人リストに勝手に名前を書いたんだ。

何がきっかけかもわからない。

だけど、会長は絶対に何がどうなってるのか分かってるはず。

でも、この一ヶ月、ずっと口を閉ざして話そうとしない。

なんだかなぁ～……。

第2話　火星の女

渚のふふふふ～んで待ってて～。

放課後、俺は歌を口ずさみながら生徒会室へ向かった。

「会長！　ちょっと聞きたいことがあるんですが」

ソファーで寛ぐ会長に単刀直入に聞く。

「ロンドンのことならノーコメントよ」

相変わらずの即答。

「いいえ、会長のことです」

「何よ」

「都とは一体どういう関係なんですか？」

「しつこい奴ね。くうちゃんが待ってるわよ。さっさと寝ちゃいなさいよ」

今日は、俺も引き下がる分けにはいかない。

もうアイツには耐えられない！

「わかったわよ！　あの子は私の義妹。あの子が実の子で私は里子。これで満足？」

さっすが会長。でも疑問が……。

「都は何で転校して来たんですか？」

「お嬢様学校に飽き飽きしたのよ。私とおんなじ」

会長も転校生なんだ……。

それはさておき……。

「――つまり、都は会長の弱点ってわけですよね？」

会長にしては詰めが甘い。弱点をポロリするなんて。

「何でそうなるのよ」

「だって、会長は俺と同じ孤児院出身。ということは、都はあそこの実の子なんじゃないですか？　会長も都には頭が上がらなかったりして～……」

「和也ってホントバカ。あの子が私の顔を殴ったら、私はあの子の顎を蹴り上げるわ。ただの姉妹喧嘩として処理されるだけよ」

そう言うと会長は立ち上がり、そそくさと生徒会室を後にした。

あれは図星と見ていいのか？

俺は一つ溜め息を吐いて、枕研の部屋へ向かう。

ドアを開けると、くうちゃんがやはり部屋の真ん中に布団を敷いて熟睡していた。

壁にはやはり小泉さんが本を読みながら寄りかかっている。

放課後はこの光景がもう当たり前になった。

「ねえ小泉さん。会長の弱味、知りたくないですか？」

俺が話しかけると、いつもみたく本を読みながら返事するのかと思えば、今日は本を置いて俺に注目した。

どうやら気になるらしい。

だから俺は続ける。「あの付け入る隙もない軍艦女にも、東京（とうきょう）都（みやこ）という名の弱点があるんです！」

「あんた死にたいの？」

とんだ返事だ。

「それって」

「美園は都のことが大好き。これ常識」

「そうですか？　そんな風には見えないけど……」

「先輩に口答えしないの。先輩がそうって言ったらそうなの」

予想外の反応だ。

なんかテンション下がる。

「あんたも都とは仲良くしといた方が良いよ。後々良いことあるかもね」

「それは難しいです」

俺は適当に返事をし、部屋の隅に畳んであった布団をくうちゃんの横まで持ってきて、制服のまま広げた布団に横になり寝る体勢に入る。

「あ、そうだ忘れてた。シュナちゃんが呼んでたよ。図書室で待ってるってさ。行ってやんなよ」

「なんで寝ようとした時に言うんですか……」

「聞こえたでしょ？　忘れてたの」

あの火星少女が俺に一体何の用だ。

俺は起き上がり、図書室へ向かうべく、枕研の部屋を出る。

生徒会室では、ソファーで栗山さんと浜田さんと広瀬さんが談笑していた。

この三人は仲が良い。

俺は「どうも」とだけ挨拶して通り過ぎ、生徒会室を出る。

第3話　ミリオンダラー・シスターズ

ふふふ～んの岸辺に咲～いた～ふふふ～んスイートピ～。

俺は歌を口ずさみながら図書室のドアを開ける。

室内には生徒の姿はなく。

居たのは部屋の隅で本を立ち読みしている俺がずっと水星人だと誤解していた火星人のシュナこと須藤シュミルヌナさんだ。

「あの～」

恐る恐る声を掛けると、シュナさんは「あ、和也くん」と反応して本を閉じて俺を見る。

「小泉さんに言われて来たんですけど」

「そうそう。浜田さんが生徒会室で待ってるそうよ」

「え？」

「さっさと来て。だって」

何だそれ。

半ば追い出されるようなかたちで、俺は図書室を出た。

少しイライラしながら俺は生徒会室に戻る。

室内のソファーで相変わらず三人が談笑していた。

その内の一人、そう、浜田さんにターゲットを絞り、話しかける。

「あの～浜田さん」

「あぁ、桐生くん。美園が呼んでたわよ。新聞部で待ってるって」

おい、嘘だろ。

なんだそれ。

「ど、どうも……」

悪いのは浜田さんじゃない。きっと会長だ。

そう自分に言い聞かせながら、俺は生徒会室を後にし、怒りを抑えながら部室棟にある新聞部室へ向かう。

部室棟の一階にある、元枕研部室と元生徒会室は先の死闘で崩壊し、立ち入りを禁止されている。

この学校は案外貧乏なのか、『キケン！　立ち入り禁止！』と書かれた粗末なテープで仕切られていて、修復工事をする気配がまるで無い。

まるで記念にのこしてるみたいだ。忌々しい。

新聞部室のドアを開けると、会長と小泉さんが呑気にテーブルでお茶を飲んでいた。

テーブルを引っくり返してやろうと思ったが、会長のことだ、何か裏があっての三度手間なんだろう……。

「会長！」

俺が叫ぶと会長はお茶を引っくり返しながら大慌てで俺まで駆け寄り、俺の口を抑えて強引に室内に引き込んだ。

これはきっと、騎士団絡み……だな。

「あんたってホント――どうしようもない尻穴野郎ね」

「会長がちゃんと説明しないからですよ！　今回は何なんですか！」

「まぁ座んなさいよ」

そう言われて俺が席につくと、会長は向かいの席に座った。

お茶はどうやら小泉さんが拭いてくれてたみたいだ。

「あんたって、ニューヨークのこと、好き？」

「ニューヨークって」

「都のことよ」

あぁ、アイツか。

「ニューヨークって、俺が都から呼ばれてるあだ名なんですよね。俺は都をローマって呼んでますが」

「うるさい野郎ね。私の質問聞いてた？」

「はい、大嫌いです」

「何で？」

何で？　何でって言われてもなぁ～……。

「まぁ答えなくて良いわ。それより、今後何があっても、あの子のこと、好きにならないって誓って」

会長はいつも急だ。

「何があっても？」

「だからそう言ってるじゃない」

会長からの電話は、ワンコールで出ないと、ちょっと不機嫌そうになる、って最近気づいた。

「『何があっても』、の『何』が気になるんですよ！」

「口答えする気？」

会長は立ち上がって俺を指差す

「そう言ってるつもりですが？」

「はぁ～……」

会長は崩れ落ちるように椅子に座り溜め息をつく。

会長の弱点って、都じゃなくって、口答えだったりするのかな。

「和也くん。私がさっき言ったこと、覚えてる？」

俺と会長の不毛な言い合いを見かねたのか小泉さんが割って入る。

「すみません、覚えてないです……」

「じゃあ、もう一回言うからよ～く聞いてよ。美園は、都のことが大好きなの」

「つまり……レズってことですか？」

「そういうことじゃないわよ！」

会長がテーブルを叩く。

それにしても、この二人にしては随分回りくどいな……。

第４話　近い夏の向こうに

キッス　イン　ブルー　ふ～んふ～ん　もっと遠くへ～。

人目も憚らず口ずさみながら俺は部室棟を後にし渡り廊下を歩く。

実はそんなに乗り気じゃない。

会長から命じられた今回の任務が原因だ。

なんでも、あの都が俺のことを好きなんだという。

そして、都は明日、俺に告白するんだと。

これは都の義姉である会長が本人から得た確りした情報らしい。

それで、告白を断らず、都と付き合って欲しいんだと。

俺が何故かと聞くと、会長はこう答えた。

“あの子、楽しそう”

会長は人にわかるように説明するのが苦手らしい。

だけど、会長には出来る秘書がいる。

そう、小泉今日歌、通称キョンキョン。

俺は小泉さんと呼んでいる。

小泉さんは会長と似て性格はひねくれてるが、言った通り出来る女だ。

小泉さんの補足によれば、都が前に通ってた聖ソドム女学院っていう学校では、あんなお嬢様がうじゃうじゃ居て、都はその中でも目立たず、いじめられていたらしい。

それでここに転校してきたことで、一転して人気者になった。

その姿を見た会長は泣いて喜んだんだとさ。

それで、都はこんなことを言い出した。“私、恋がしたい！”と。

婚カツをするようなモチベーションで参加したボランティアで偶然俺に出会い、なんと一目惚れしたらしい。

嬉しいがなんだか複雑だ。

くうちゃんや矢口さんのこともあるしね……。

都のためにも、付き合って欲しいと。

そして、醜態を晒して欲しいとも言ってた。

それは都が俺を諦めるようにだという。

理由は教えてくれなかった。

めんどくさいが断ったらタマを一つ教会に寄付という謎の脅迫を受

け、今俺は平凡を装っている最中だ。

元々平凡なんだけどね。

生徒会室へ行くとあの三人の姿は無かった。

枕研の部屋をそっと覗くと、あの三人が呑気に布団を並べて寝ていた。

無警戒な奴らだ。

どうなっても知らんで。

俺は一人、ひっそりと学校を抜け出し帰路につく。

そうだ。

もうすぐ夏休みか……。

夏休みはいつも幼馴染みのアイツが泊まりに来るって決まってるんだよなぁ～……。

一ヶ月間ずっとだよ。

俺の夏休みは、鎖でギッチギチに縛られた拷問部屋での日々なんだ。

そんな拷問部屋にブチ込んでおいてアイツは“青春を謳歌しよう！”とハイテンションで俺に言い寄ってくるんだ。

俺はアイツが鬼に見える。

まぁ今は、アイツより都だ。

俺はずっとバカだった。会長の言う通りね。

見落としていたんだ。

会長の名前は、今田美園。

そんでその義妹の東京都。

名字が違う！

何故俺は気づかなかったんだ。

明日会長に聞いてみよう……。

アイツより都より、まず最初に俺がやらねばならないことは、妹の世話だ。

今日は遠回りして帰ろう。

第5話　はいって。いつでもいいから

ああ～私のふんふふ～ん、南の～風にのってふふんふふ～ん。

昼休み俺が歌を口ずさみながら廊下を我が物顔で歩いていると、背後から「和也コラ！　コラ和也！」と都の声がする。

いつもは無視するが、今日は振り向いてやった。

「あら、珍しいわね」

都が驚いた顔をする。

「都は知らないだろうけど俺は――」

「それより私は今日、あんたに言いたいことがあって呼び止めたのよ！」

ジョークぐらい最後まで言わせてくれよ……。

「言いたいこと？」

「これを読みなさい！」

そう言って都はスカートのポケットから手紙を取り出すと、俺の胸に押し付ける。

そして「いい？　絶対に読むのよ！　じゃないと退学よ！　それどころか国外追放よ！」と念をおす。

俺が手紙を受けとるやいなや、都は颯爽とその場を立ち去った。

アイツは確か、言いたいことがある、と言っていた。

まさか、この手紙のことか？

なんて滅茶苦茶な女なんだ。

俺がこいつと付き合わなきゃいけない？

会長のために？

なんだかなぁ～……。

俺はその場で手紙を開けた。

『放かご、体く館うらで待ってまふ』

なんて稚拙な文字なんだ。誤字も酷い。

他人に見せる字じゃない。

記者が手帳に自分だけが分かるような字で書く奴だよこれじゃ。

でも、これはいい素材だ。

これを皮肉って、会長が言ったように都から嫌われてやろう。

放課後、俺は彰造の誘いを振り切って、俺は体育館裏へ向かった。

どんな用件かはもちろん知ってる。めんどくさいことも。

体育館裏をそっと覗いてみると、珍しく緊張してるのか浮かない顔の都がいた。

ここは俺も芝居をしておいた方がいいのかな？

俺はわざとらしいぐらいおずおずと都の前に出てる。

俺が、何か用？　と尋ねるより前に、俺を見つけるなり都は「来たわね！」と俺を指差す。

会長の奴、決闘と告白を間違えたんじゃないだろうな……。

「せっかくの女子からの呼び出しなんで」

「よく言うわ！」

うるさい女だな。

「あんなバカみたいな字で書いた手紙で俺をこんな所に呼び出して、一体何の用？」

小泉さんの話だと、体育館裏は学校でも随一の危険地帯らしい。

理由はいつもの感じで教えてくれなかったけど。

「私はタイピングは得意でもペンは苦手なの！」

「それより早く用件を言ってよ」

俺がそう言うと、都は一瞬だけ下を向いた。

顔を上げ、キリッと俺の目を見て、そして指をさす。

「あんた、騎士団に入りなさい！」

第6話　ミソノ・ビッチ2

ムーンライト　ふ～ふんっ　私のことを　ふんふんふんふんふ～ん
ふふん～　三日月の夜～。

気が動転して思わず歌い出しそうになった。

「さぁ！　どうなの！」

都が叫んだ途端、背後から物音がして振り返ろうとしたが、都の背後の茂みから何者かが飛び出した。

あれは、松田さん！？

松田さんが、物凄い形相で俺に向かってくる！

「和也くん！」

背後から小泉さんの声がした。

振り返ると、小泉さんも猛スピードで突進してくる。

だけど松田さんも小泉さんも、俺に向かってきてるわけではないようだ。

路線が合ってない。

と思った次の瞬間、松田さんが小泉さんを蹴り飛ばした！

小泉さんは当然のように「きゃあ！」と女々しい声を上げて吹っ飛ぶ。

それを見届ける猶予も与えず、俺は何者かに押さえつけられた！

首を捻って確認すると、俺を押さえていたのは都だった！

まさか、俺はまた、騙されて生徒会（レジスタンス）と騎士団の対決に巻き込まれていたのか！？

「気分はどう？」

松田さんが嫌味をタレる。

「ワクワクしてますよ……会長が助けに来て、お前らを一蹴するのを想像すると！」

「口だけは達者なんだね。今すぐにでもその戯言で汚れたア●ルを開けなくしてやってもいいけど、生憎、許可が出てないからね」

「……俺を捕まえて、どうしようってんだ！」

「もう、簡単な話。あんたが騎士団に入ればいいの！」

松田さんは不適に笑いながら俺を指差す。

俺は昨日のことを思い返す。

あの三度手間は、恐らく騎士団のスパイを遠ざけるための手段だったんだろうけど、こうなったってことは、完全にアレは意味無かっ

たよね？

会長は完全に騙されていたんだ。

都は、元々騎士団と手を組んでた。

俺は知ってたのに！　アイツは反生徒会だってことは。

何故、会長にはその情報が行き渡ってなかったんだ！

アイツは会長の奥の奥にある良心を利用した最低な奴だ！

「騎士団には入りませんよ」

「入った方が良いことあるのに……」

都が俺を押さえつけながら言う。

「俺は反騎士団だ！　無理矢理入れたって、すぐに反逆して中から壊してやる！」

俺が叫ぶと、松田さんはしゃがみこんで俺を見下ろす。

「あんた一人の力で何が出来るの？」

「お前を犯して、ダメにすることぐらいはできる！」

俺は叫ぶと同時に、都を振り払って立ち上がる。

すると、何を思ったのか、二人とも俺から離れる。

「俺が怖いか！」

調子に乗って叫んだ直後だった！

上から大量の水が降ってきた。

水が止んだと思ったら、頭に衝撃を感じる。

頭に何かが落ちてきた。

俺は跪いて、頭をおさえて、落ちてきたものを確認する。

これは……タライ？

「はいＯＫ～」

この声は……会長？

俺が顔を上げると、目の前にはムカつく笑顔の会長がいた。

「和也にしてはよくやったわね」

「会長……何なんですかこれ」

「決まってるじゃない。ドッキリよ」

ドッキリ？

その言葉、前にも聞いた。

四月だ。

俺が火星人と一緒に軽音部室風ドッキリハウスに閉じ込められたあの日だ。

「松田さんは、騎士団の人なんじゃ……」

「全く、彼女の顔、ちゃんとじっくり見た？」

「え？」

俺は松田さんの顔をよーく確認する。

「ひ、広瀬さん！？」

「あったり～」

松田さん風広瀬さんが小さく手を振る。

「特殊メイクよ」

また金を無駄遣いしたのか。このビッチは……。

察しの良いはずの会長なのに、今日ばかりは俺の思いなんて理解せずベラベラと語りだす。

「普通に体育館裏に呼んだんじゃ、つまらないから、あえて色々手段を踏んだのよ。あんたに無駄な想像をさせるためにね。それがどういう意味かわかる？　あんたが一回目のドッキリから何も学んで

ないってことが露になったのよ！」

会長は俺を指差して睨み付ける。

畜生。

会長は一体、俺をどうしたいんだ！

第1話　52週後・・・（前書き）

書いてて途中からめんどくさくなったので、次話からはいつもどおりに書きます……。

第1話　52週後・・・

真夏だと言うのに、ベッドの隅に踞って布団を巻き付けるように被っているのは、臆病なダックスフンドでも、不細工なマトリョーシカでもない。俺だ――。別に寒いわけじゃない。むしろドロドロに溶けてしまいそうなぐらい暑苦しい。汗が滲んで居心地も悪い。長袖のパジャマ上下もびしょ濡れだ。今すぐにでもこの場を飛び出して、隣町の区民プールで翌朝まで泳ぎ明かしたい気分だ。しかしできない。そんなのハリネズミを「よ～ちよち～」って抱きかかえて舐め回すようなもんだ。つまり、俺は今、そんな雑な無茶振りと罰ゲーム、どちらかしか選べないというものすごくピンチな状況なんだ――。

冷房も扇風機もついていない、窓も全閉したサウナのような部屋でガクガクブルブル震えていると、下の階から微かなインターホンの音が耳を掠めた。教師に注意された時みたく、俺の身体が止まる。同時に「はーい」と母さんの声がインターホンよりも小さな声で響く。母さんは予言者だ。誰が来るか完全に知っていた上でモニターを見ることなく玄関に向かったらしい。玄関のドアが開く音の後、俺には確かに聞こえた高い声で「こんにちは～」と。ただの「こんにちは」じゃない。これはアイツ（・・・）の「こんにちは」だ。俺には鬼の唸り声にしか聞こえない。

アイツ（・・・）が階段を上る足音が聞こえる。徐々に近づいてくる足音に、俺の身体はちょんと押されたように震えを再開する。差し詰め、いや、毎年そうだから、絶対、俺の夏休みはアイツ（・・・）に持っていかれるんだろう……。

ドアの向こうから「おっはよ～カズちゃん！」と大きな声が聞こえ

たが、鍵を閉めたドアは開かない。汚ならしい舌打ちを一発鳴らして、ガチャガチャと開かないドアを力ずくで壊してまで開けようとするその精神は、とても女子とは思えない。しかし、すぐにその騒音は鳴り止んだ。これは毎年、もう恒例になったお約束の、陳腐なワンコーナーみたいなもんだ。名付けるなら「新島歩莉の！　ドアをブッ壊せ！」かな。一度としてドアを壊したことなんてないけどね。俺はその次がどんなコーナーかも、もちろん知っている。また、歩莉の冠付きコーナーだ。名付けるなら、こうだな。「新島歩莉の！　十円玉でＧＯ！」。

ドアが開き、アイツ（・・・）、歩莉がのこのこと室内に入ってきた。首元まで伸びた前下がりの黒い髪、幼さをずっと引きずってるようなあどけない顔立ち、大きな瞳。口元を緩め、見せびらかすように十円玉を摘まんで頬に近づけてウィンクして、俺に星を飛ばす。

「だからさあ、鍵閉めたって無駄だって、いつも言ってるじゃ～ん」。

部屋の電気をパチンとつけ、みっともない俺の姿を数秒間、訝しげに凝視すると、「暑い～！」と部屋の中央にある四角いテーブルの上から慣れたように冷房のリモコンを取り、電源を入れた。

「何その格好！？　減量でもしてるの？」歩莉が鼻を鳴らす。「ねえ死んじゃうよ？」。

歩莉は前屈みになり、前髪を揺らしながら心配そうに俺を見る。俺も頑固な男だ。聞こえない振りを貫くべく、目を閉じる。すると、振動を感じた。どうやら歩莉がベッドに上がり込んできたようだ。布団から間接的に、歩莉が布団をぎゅっと握ったのがわかった。引っ張り、俺から布団を剥がそうとするが、もちろん俺も力を入れ、布団の引っ張り合いになった。

「ちょっと！　いつまでこんなことしてる気！」

歩莉の馬鹿力で、布団が剥がれた。すると、冷房の風で一気に身体が冷える。「寒い！」と思わず声が漏れた。

「やれば出来るじゃない」

自分を褒めているのか、はたまた俺をバカにしてるのか、曖昧な表現で歩莉が呟く。汗臭い布団を丸めて、俺とは対角の隅に置くと、滑り込むように直ちに俺の横に座る。

「五十二週間ぶり！」歩莉が笑顔で俺の顔を覗き込んでくる。「元気してた？」。

「五十二週間？　今年は閏年で、去年お前が来たのは八月三日。そんで今年は七月十九日」

「もう、細かいなぁ、私そういうの大っ嫌い！」

「俺としては光栄だ」

「――そんなこと言って！　ホントは嬉しいんでしょ？」歩莉が憎たらしく俺に身体を寄せ、強引に肩を組んでくる。

「嬉しそうに見えた？」

「それでさー、桐乃ちゃん、どこ？」

歩莉はいつも急に話を変える。幼い頃からずっとだ。「プーさんっ

てね～」って話し出したかと思うと、数秒後には「キリンの角って何なの？」って急に車線変更する。全く危険極まりない。それに歩莉の「桐乃ちゃん」は、憎しみを込めた呼び方に聞こえて仕方ない。実際、二人は仲悪いし……。

「アイ　キャン　ドゥ　ベター！！」歩莉が突然なんか叫ぶ。「私が好きな言葉だよ」

俺はとっくに急な話題変更には慣れてるから平然と返事を返してやる。「なんて意味？　私はベタな人間ですって？」

「違う違う！　簡単に言うと～……まぁ、あんたはバカ、私はあんたみたいな結石野郎よりずぅ～っと出来る子よ！　分かったんならさっさとその雑菌まみれの布団を干してきなさいマイク。的な？」

「愉快な翻訳だな。お前と英語の授業を受けたら退屈しないよ……」

俺はわざとらしい溜め息をつきながら、窓の上に掛けてある時計に視線を向ける。午前九時五分、まだ起きて一時間も経ってない。まだ飯も食ってないし。

「ねえ、アメリちゃんにはもう会った？」歩莉が俺のパジャマの裾を引っ張る。

「会ったよ。アメリはお前より可愛くて、優秀だ。アメリがお前に会ったら言ってくれって。アイ　キャン　ドゥ　ベターって」

「私は、アイ　キャン　ドゥ　ベターよりも、ワット　ザ　ヘルとかキープ　ホールディング　オンとかの方が好きかな～」

「何の話？」

「そっちこそ何の話？」

頭が混線して爆発しそうだ。歩莉と絡む時は、いつも体力を使う。

第1話　52週後・・・（後書き）

52部目で「52週後・・・」ってタイトルは偶然です。

第2話　アユリ・ニイジマ

歩莉はキャッチボールをする時、いつも顔を横に振ったり縦に振ったりする。

恐らく野球のピッチャーの真似をしてるんだろう。

キャッチャーもいなければバッターもいない、それ以前に野球でもない。

つまりこういうことだ、歩莉jはバカなんだ。

「ピッチャー大きく振りかぶって――」

自分でそんなことを言いながら歩莉が振りかぶった。

生憎、投げたボールはコントロールのコの字も無く大きく軌道を逸らし、俺ん家の屋根にすっ飛んだ。

俄然、歩莉が「取ってこーい！」と叫ぶ。

自分で投げといて、図々しい奴だ。

「取って来ても良いけど、それじゃお前のためにも、ボールのためにもならない」

俺が無造作にそう言うと、歩莉はすかさず食い付く。「それってどういう意味？」

訝しげな歩莉の顔は実に滑稽で笑える。だから俺はさらに不毛な畑に雑草の種を蒔く。

「あれはボール自ら、お前の元を離れていったんだ。アイツは反抗期なんだよ。わかるだろ？　その気持ち。夏休みを悪用して家出をするお前には痛いほど」

俺の意味不明な言葉に歩莉は当たり前のように首を傾げる。

「つまり、どうすればいいの？」

「そうだな、ボールが帰ってくるのを待つ……ってのも一つの」

俺が話を終えるのよりも先に、歩莉は家に戻ろうとしていた。

今回は歩莉に救われた。

不毛な畑にカラスを放ったってどうにもならないからな。

部屋に戻ると、桐乃が一人、お菓子を食べながらテレビゲームをしながら寛いでいた。

「お兄ちゃん、風神の唄ってどうやんの？」

俺が入ってきたのを雰囲気で悟った桐乃は、視線をこっちに向けることなく言った。

「上、上、下、右、左、右」

「なるほど」

桐乃は礼も無く無愛想に返事をして、俺の言ったコマンドを入力する。

「そうだ、風の神殿終わった後、トライフォースの欠片探さなきゃいけないのか……。その前にマップ探して、高い金払って解読……。本編のシナリオの癖にやけにサブイベント染みてんなぁ……」

桐乃がまるでオッサンのように染々と呟く。

歩莉は「平和だね」と言いながらベッドに腰を下ろす。

すると桐乃はすかさず「あんたの頭ほどでは無いけどね」と皮肉る。

俺はこの二人を同じ空間にいるこの状況が大嫌いなんだ。

二年前は取っ組み合いの喧嘩にまで発展したことがある。

「お兄ちゃん知ってる？　神殿の前のあのタコみたいな岩、ヘビィブーツが無くても壊せるんだよ。でも結局、神殿内でヘビィブーツ使うから何の意味もない裏技だよね。歩莉みたい」

おいおい、こいつはいつの間にか、煽って自ら喧嘩を催促することを覚えてやがったのか。

迷惑な話だ。

「次から悪口とか皮肉一回につき千円頂戴するから。お前らのための税金だ。名付けて、アホバカ税」

「お前らっていうのは撤回して欲しいな。だって、私は悪口なんて一回も言ってないし」

歩莉が寝転がりながら手を上げて主張する。

「勝手にしてくれ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4913w/

オアシスがかれるほど騒ぎたい！

2011年10月11日08時58分発行